
アイテム鑑定士の業務内容

冴野一期

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイテム鑑定士の業務内容

【Nコード】

N0340Z

【作者名】

冴野一期

【あらすじ】

魔都ルーン。その職人街で、小さな店を構える青年の物語。

項目1：掟と制約

この世界に満ちた概念を、大方知り尽くした男がいた。

「——峠越えは気分がいいな」

晴れた昼下がり。これから西に落ちていく太陽が、雲の波間に浮かんでいる。

春先の蒼天だった。足下は、人が何百年もかけて踏みしめた畦道が続き、両脇には背丈の低い野草と、幾色かの花が咲きほこる。

「そろそろか」

空を見上げ、片手で陽をかざせば、一羽の鳥が目に残った。気持ち良さそうに眼下に広がる森へ降りていく。その森から辿ってきた川の流れに沿って、街が栄えていた。

「さて……」

風が吹く。ざわざわ、野に生えた小さな花が種子を飛ばす。それもまた青空を昇って、導くように街へ向かう。

「故郷は、少しは変わったか？」

男は前を向き、ふたたび歩きだした。

街へ至る道は、申し訳ない程度に均されていた。男の隣を、荷馬車を通り超える。色褪せた幌ほろの隙間から、暗鬱とした瞳の少年少女が垣間見えた。

「……奴隷か」

足がわずかに止まる。

「最近、南の方で、農民による革命があったな……」

なれば、没落した貴族の子供かもしれない。

苦いものを味わった顔で足を進ませる。城壁の一角に辿りついたのは、先ほどの馬車が通り抜けた直後だった。門番が振りかえる。

「ん、なんだ貴様は」

「普通の旅人だが」

鋼の鎧を着た門番は、男を疎ましそうに睨んだ。ジロリと眺めた後で、白銀の箆手に覆われた手を伸べてくる。返答の代わり、木製の割符を取りだし見せつける。

「関所もきちんと通ってきた。『魔都』に入れてくれないか？」

「そんな物はどうでもいい。銅貨二枚だ」

「は？」

「最近できたばかりの法律なんだよ。ごちゃごちゃ抜かすな。代わりに一撃くれてもいいってんなら、釣りはいらんぜ？」

拳が握り締められる。門番は、たつぷりと贅肉のついた顎を緩め、卑下した。

「……わかった」

一拍の後に応じた。小さな革袋より、銅貨二枚を素直に取りだして払う。

通りぬけようとした時に、門番の視線が男の指先で止まった。

「おい、ちよつと待ちな」

「まだ何かあるのか？」

「あるぜ、いくらでもな」

銅貨を奪い、ニヤニヤと、嘲りの色合いが増していく。

「今思い出したんだが、この魔都に入るには、持ち物を一つ置いてかねえといけねえのさ」

「……中々に斬新な法律だ」

「そうだろう。とりあえず、その指に嵌めた指輪を渡しな。見たところ黄金だろ、そいつはよ」

明らかな脅し文句。対し、男の口元にも笑みが浮かぶ。

「目敏い豚だな」

「あ？」

「確かに、こいつは貴様の命より価値がある」

「おい。指ごと落とされてえのか？」

「そうか」

瞬間、風が切り裂かれる音がした。

門を抜け、男はふらふら、街を歩いていた。

空が雨雲に覆われはじめ、ひたひた、近づく雨の気配を感じとる。

「厭な気分だ」

太陽が、尾根の向こうに消えていく。辺りは急速に色濃く、夜の足音が近づいていた。その中にあっても、喧騒あふれる声は騒々しい。確かに活気はあるが、派手な彩りの影にある貧富の差は隠せない。虫食い穴のように目立ち、匂ってくる。

「なにも変わっていないのか」

道を少し逸れてみた。ゴミに満ちた路地を歩けば、

「……………して、やる……………」

黒ずくめの少年が、壁に背を預けて死にかけていた。

腹部からドス黒くなった血を吐きだし、どんより曇った空を、一心に睨みつけている。

男はたいして気に留めず、横切ろうとする。

少年もまた、同じ言葉を続ける。

「……………殺して、やる……………」

呪詛の声。

ひたすら、ひたすらに、呪う。

男の足が止まった。愉快そうに口端を歪め、正面から見下ろし言い切った。

「おまえは、もうすぐ死ぬ」

ぴくり、と少年の眉が動く。瞳が苦痛に震えながらも、わずかに焦点が定まり、ギラついた表情で男を見上げた。

「……………死んで、たま、るか……………」

「無理だ。数えて百も経たないうちに、おまえは死ぬ」

「……………ッ」

血を吐いた。

それでもまだ飽き足らないように、黒ずくめの少年は言霊^{ことだま}を紡い

だ。

最期の一音まで、憎悪の言葉を、殺意を、たっぷり吐きこぼした。
なにひとつ、救いを求めなかった。

呪って呪って、死んでいった。

「そうだな。この世界に救いは無いな」

空に浮かぶ暗雲の気配が、急速に広がった。

世界を色濃く覆い、雷鳴が轟く。地上に落ちた雨を受け、男が笑
う。

「少し、変えてみるか」

口端を吊り上げる。膝を折り、指輪を嵌めていた側の手を伸ばす。
乾きつつある返り血が激しい雨で流されていく。

「俺の【力】を分けてやる。少年、足掻いてみせるよ」

言葉に呼応するように、黄金の指輪が輝いた。

闇の中。指先にだけ、淡い光が満ちていく。

項目2：買い値は安く、誠実に。

『 アイテム鑑定士の業務内容 』

かつて、魔都と呼ばれた強国があった。高度な文明を誇っていたが、なんらかの理由によって地の底へ沈んでしまった街だ。

それから長い時を経て、地上にも街ができあがる。

古代の知識を求める者たちと、その知識を売り払い、富を求める者たち。

その場所はいつしか、もう一つの魔都『ルーイン』と呼ばれるようになっていた。

ルーインの目抜き通りの一角。

その路上では、自前の店を持たない流れの『冒険者』たちが商いを行っていた。中には市場の商人と変わらない声を張り上げる者も多い。

「——さあ、見てつてくれよっ！ここに並ぶのは、今しがた命がけで『迷宮』から発掘したばかりの >アーティファクト< ですよええ！」

とりわけ声のでかい露天商がいた。

その声に惹かれるように足を留め、並ぶ商品を覗いていく客がいた。身形のいいのは大抵、自前の店を構える商人や、王宮の『ギルド』に属する職人たちだ。しかし最も多いのは、迷宮に潜って遺物を漁る冒険者だった。

彼らは決して街には馴染まない。特有の雰囲気を漂わせている。

「もうちつと、まともなモンはねえのか？」

「いやあ、なにせ過去の遺物グートアハテンですからねえ。見た目はちつとわりいすが、王城のギルドで働く鑑定師に見せりゃあ、値も吊りあがるつてもんでさ」

「なら、自分で持ってけや」

「奴らの鑑定料は、バカ高いすから。その身銭がねえんすわ」

「下手な言い訳しやがって。テメエも冒険者だろっが。これが、ガラクタに過ぎねえことを知ってて売りつけようとしてんだろ」

誰もが同じような反応をした後で、それから「ん？」と、鞘に入った無骨なナイフに興味を示した。動物の皮で作られたらしい鞘を外すと、刃こぼれ一つない、漆黒の刀身が姿を見せる。

「おお、ダンナ、お目が高いっ！」

すかさず、露天商の男が押しまくる。

「それ！ 中々いい品でしょう。銀貨一枚でどうっすかねっ！」

「いや、いい」

しかし客たちは、皆が得体のしれないなにかを感じ、即座に刃を戻して立ち去った。

「……チッ」

客の後ろ姿を見送り、露天商が舌を打つ。

「やっぱ売れねえか。こんな演技の悪い代物はなあ……」

どのように角度を傾けても、一切の光を映さない漆黒の刃。

一滴の血もついておらず、刃こぼれも無い。それが逆に、いつそう不気味だった。

「やーれやれ……。アレから漁ってきたのは、やっぱマズかったかねえ……」

「おい」

小声で愚痴をこぼした時だった。入れ替わるように、買い物袋を抱えた青年が足を止めていた。

「それ、見せてくれるか」

「へ、へいつ、どれでもどうぞっ！」

「いや、お前が持つてるナイフだけでいい」

「こ、これですかい」

「ああ」

青年は、少しこけた頬と顎骨の線が良い、それなりに見栄えのす

る顔だった。髪と瞳は明るい茶色。身に着けているのは、簡素なシヤツの上に綿をつめた濃紺のベストだ。下も量産された革ズボンだが、足下は金属で補強したブーツを履いていた。

「……………」

そして、目つきだけはやたらと鋭い。
黙ったままベストのポケットから片眼鏡^{モナクル}を取りだし、右目に被せる。

「貸してくれ」

手を出して受け取り、ナイフを抜く。何気ない一連の動作が流れるように素早い。

「兄さん、あんたも冒険者かい？」

「昔はな」

答え、他の客が難色を示したナイフを見る。

黒の刀身、続けて外された革の鞘もまた、隅々まで目を通していく。

「これ、どこで拾ったんだ」

「へ！？」

「ずいぶん染みついてる、と思ってな」

ぎよつとした様子で、露天商が目を見開いた。

「な、なにが……。ついてるんで？」

「なんだと思う？」

反して青年の口元には、ニヤリとした笑みが浮かぶ。

「別に追求するつもりはねえよ。ただ、こいつは一級品だな。金属の打ち方を見ても分かるし、なにより『鞘』の方も文句なしだ。単なる薄汚れた毛皮に見えるが、わざわざこのナイフの為に作られた一品物だろうな」

「そ、そうなんで？」

「なんだ。何もわからないのか？」

青年が言えば、露店商が慌てて弁明する。

「……え、いや、まあ、この下に眠る、古代都市に住んでた職人だ

ろうつてのは……」

「ちげえよ。こいつは東にある異国の文字だ。刀剣を練成した技術にも、最近の手法が使われてる。間違つても古物じゃねえ」

「や、やたら詳しいな。兄さん、鍛冶職人か？」

「違う」

言つて、今度はナイフを陽にかざす。さらに様々な角度から検分した。

「——気に入った」

静かな声とは裏腹に、鋭い瞳で、売り手である男を見据えた。

「いくらだ」

「へ？」

「引き取つてやるよ。いくらだ」

「あ、ああ……。んじゃ、銀貨一枚で」

「ほらよ」

青年は腰元のポシエツトから銀貨を一枚投げた。露天商は、両手の中に納まつたそれを見て、しばらく「ぽかん」としていたが、突然夢から覚めたように言い募る。

「ま、毎度っ！　なんだよ兄さん。もしかして、鑑定師か？」
グートアハテン

「いや、王城お抱えの職人共とは無関係だ」

青年はナイフを腰のベルトに下げ、買い物袋を持ちなおした。

「俺は自由鑑定士だよ。職人街に店がある。鑑定したいモンがあれば持つてきな」

「な、なるほどなあ！　いやいや兄さんも人が悪いねえ。なんなら、その短刀を鑑定——」

「コイツをどこで拾つたか、もう少し、根掘り葉掘り聞いてもいいんだぜ？」

「……あ、いや……。そ、そうだ、兄さんよ！　自由鑑定士ってことは、師匠がいたりすんだろう？　ギルドお抱えの鑑定師はたつけないからよ！　よかつたら紹介してくんねえか」

「今はいねえよ。店も、俺の名義だ」

「へえ！」

露天商は、感嘆と羨ましさの入り混じる声をあげていた。

「その歳で自分の店持ってるのかあ。兄さん、名前は？」

青年はほんの少し、口元を歪めた。

もしかしたら、営業スマイルだった、のかもしれない。

「ジークハルト・ワーグナー」

項目3：営業時間について。

月明かりに照らされた職人街の通りは、しんと静まりかえっていた。そのなかで、一軒だけ灯りのついた建物がある。見栄えよりも実用的な印象を放つ、無骨な赤レンガで出来た小さな店だ。正面に木製のプレートが下がり、閉店中だと告げていた。

勝手口を抜けた先、さして広くない室内の中央に、長机が置かれている。

天井から吊り下げられた電球の明かりが、ぼんやり届く。

「……………ゴミ」

ジークハルトは椅子に座り、手を動かしていた。赤い宝石が乗った杖を置く。

茶色の短髪と瞳。やたらと険しいその目を細めれば、どこか猫科の肉食獣を思わせる雰囲気^{モノク}が滲みでる。

「……………こいつもゴミ」

白い絹の手袋をはめ、無言で、青い宝石を乗せた指輪を、ためつすがめつする。

その指先が不意に止まり、舌打ちをした。

「クソ。初見の客は信用ならねえな」

ジークハルトの右目には、昼間つけていたものと同じ、丸い片眼鏡^{モノク}が被せられていた。銀縁の外枠が、苛立った内面に呼応するように光る。

「あの野郎。なにが伝説の >妖精指輪< だ。ホラ吹きもいいとこだぜ。指輪から【魔】の反応がぜんぜんしねえ。単なるクズ銀じゃねえか」

両手を動かしながら、今度は青い宝石に注目した。

「こっちの【魔石】は本物みたいだが……………」

慎重に、ゆつくりと、角度をズラしていく。指輪の青い宝石に注目すると、じんわり、右目に乗せた片眼鏡のガラスに、イメージが

浮きあがってきた。

ぽつ、ぽつ、飛び散る、赤い鮮血の色。
すうーと、人の手を模したイメージが伸びてくる。

「ウゼエ」

実在する己の手で払いのけると、イメージは霧散した。

ひとつ溜息をこぼし、片眼鏡を外す。指輪は再び、なんの変哲もない銀の指輪に見えていた。

「どこの死体を漁ってきたんだか。良物は、あのナイフだけか」

指輪を机上に戻し、傍らに置いてあったマグを取る。中には半分冷めたコーヒが残っていた。苦い顔を浮かべ、茶色い毛を掻きむしる。

「面倒くせえ」

改めて、作業机の上を見渡した。

転がるのは革の鞘に入った短剣を除くと、赤い宝石を載せた杖、目を引く青い宝石の指輪が三つに、黒い水晶で作られたネックレス。そして極めつけは「カタカタ」音の鳴る鎖帷子だ。

「ったく。王城の鑑定師^{グイットアハテン}が拒否するような、面倒なアイテムばかりじゃねえか。まとめて銀貨六枚で引き取らせてやる」
手にしたコーヒを、ぐつ、と飲み干したとき。

——カラン、コロン、カララン。

澄んだ鈴の音が、薄明るい店内に響いた。一人、男の客が入ってくる。

「ジャマするぞ」

背の高い、青空の髪と瞳を持つ、二枚目の男だ。黒衣のロングコートを着て、足は膝下まである濃紺のブーツを履いている。腰元には一振りの長剣をたずさえていた。

「相変わらず仕事熱心だな、ジーク」

「……エリオット」

「なんだ？ 嫌そうな顔をされる覚えはないぞ」

「表の看板が見えなかったのか。店はとつくに閉まってんだよ」

「そうか。暗くて分からなかった」

さらにと見栄えのいい顔が笑う。

エリオットと呼ばれた客は、木目の床を進み、客用の椅子へと腰かけた。

「仕事熱心なおまえに、いい話を持ってきたぞ」

「頼んでねえ」

「頼まれた覚えはないさ」

「なら帰れ、今は面倒事を聞いている暇はねえよ」

「鑑定中か。相変わらず、面倒な【属性】が付与されたアイテムが並んでるな」

エリオットが、先ほどまでジークハルトが鑑定した指輪を取りあげる。

宝石から赤い【霧】が立ち込めた。再び人間の腕が伸び、エリオットの手に食らいつかと迫るも、

『——【呪】を知る我、命ず。>> 解除・デイス 属性付与エンチャント <<』

ささやくと、赤い【霧】は弾かれたように消えてしまう。続けて、その他のアイテムにも手を添えて、同じ言葉を告げていく。

「ふん。【魔】が外れたら、ただの粗悪な指輪だな」

「俺が預かってる商品に勝手な真似してんじゃねえよ」

「べつにいいだろ。持ち手に害意を与える【属性】が付与された『呪い物』を、好んで引き取るやつもいまい」

「それもそうだな。おい、エリオット。ここらのアイテム全部【解除】しやがれ」

「なんだと貴様。こっちは客だぞ」

「うるせえ。やれ」

この世界に満ちた【魔】と呼ばれる力。

万物、ありとあらゆる【属性】のイメージに、別のイメージを付与し、本質を操作、または変貌する力。

【魔】が秘められた有用なアイテムは、人々から >アーティファクト< と呼ばれ、そうでないものは「呪い物」などと呼ばれていた。

「まったく人使いの荒い……」

エリオットは愚痴をこぼしながらも、素直に呪いを解いていく。

黒い水晶のネックレスと、さらに『カタカタ鎖帷子』を黙らせたところで、

「——さて、後はそのナイフか？」

残るのは、革の鞘に入っていた短刀だ。

手を伸ばすと、先にジークハルトが取りあげた。

「こいつは必要ない。今朝、俺が市場で買いつてきたもんだ」

抜き放てば、黒い刀身が現れる。

アーティファクト

ジークハルトの片眼鏡越し、刀身の中央に【歪んだ渦】が見え隠れする。エリオットの口元からも「ふむ」と声があがる。

「いっぱしの冒険者なら、そいつに秘められた【魔】に警戒しそうだが」

「単なる『呪い物』と、純度のいい【魔石】の違いが見抜けなけりや、鑑定士なんざやってねえよ。おそらく、これを作った職人はよっぽどの腕利きだぜ」

「何故わかる？」

「本体に、一切の刃こぼれも血の跡もついてねえ。——鞘は使い古された感があるのに、刀身が真新しいってのは妙だろ」

「そうか？ 普通に研いだんじゃないか？」

ジークハルトが首を振る。

「この『いかにも怪しいです』って刃を研いだとすれば、普通に実用性があるってことだ。それに、もう一つの可能性があるだろ。このナイフがそもそも『直接斬りつける用途に使われてなかった』ってな」

「なるほど」

エリオットが、会得の言ったという感じに頷いた。

「特定の【魔】を発動させるべく作られた、触媒用の『クリスナイフ』か」

「そういうことだ。片眼鏡で鞘の方も見たら、そっちにも【魔】の反応があつたんだな。特別な【魔石】は、作り手の意識で、姿も、形も、色も変える。だが【本質】を見抜く片眼鏡と、質量だけは誤魔化せねえ」

片眼鏡モノクルを載せたジークハルトの瞳が、ナイフの鞘を見据える。一見して動物の革に見えるそれは、刀身と同じ、漆黒の色合いを映し出していた。

「鞘、刀身、握り手に至るまで、すべてが【魔石】で出来てやがる。革の鞘を手にしたときの重さによる違和感と、抜き身にした時の真つ黒な刀身のせいで、呪われてるように勘違いするんだろうな」

「——見事な鑑定だ。いくらだった？」

「銀貨一枚」

ジークハルトがさかさず答えると、エリオットが噴き出した。

「いい買い物をしたなあ。金塊に等しいお宝を、銀貨一枚で買い取つたか」

「宝が腐つてんのを回収して何が悪い？」

エリオットが、くつくつと、心底楽しそうに笑う。端正な表情を緩め、口端を吊りあげる。

「たいした奴だ。やはり、場末の自由鑑定士エルサースにしておくには惜しい」

「そいつはどうも」

「よし、そろそろ仕事の本題に入るか」

「うるせえ、引き受けねえって言つてんだろが」

「人に解呪を任せておいて、それはないだろう。いいから話だけでも聞いてくれ」

微妙に下手になりはじめた。

「今回の仕事は王城から来たものだ。もう一度言つが、損は無いぞ」

「……城からの依頼？ 危険はねえのか」

「当然ある」

「帰れ。死ね」

ジークハルトが心底嫌そうな顔をする。ナイフを引っ込め、睨みつけた。

「場末の鑑定士の店に、厄介な依頼持つてくんじゃねえ。テメエんとこの『ギルド』で片しとけ」

「ウチは隠密行動に向いてる人材が少なくてな。できれば、あまり顔が知れてない奴で、なおかつ腕利きが好ましいわけだ。なっ、頼む、ジークハルト」

「うるせえ。つーか、なんで王城から仕事預かってくんだよ。テメエは元々、ただの冒険者だろうがよ」

「ふっ。それだけ、この俺の名が売れてきたということだなっ」

「アホが」

「なんだと」

「良いように使われてるだけだぜ」

ジークハルトは、そつと腹部を抑える。

じわつと、わずかに古傷が痛んだような顔をした。

「悪いが、帰ってくれ。俺は、貴族の犬になるのはごめんだ」

本気で苛立つ言葉を耳にすれど、エリオットは引き下がらなかった。

「便利屋のように使われることに辟易してるなら謝る。だが事実、お前の力が一番高いと確信している。それに俺は、信頼を切り捨てるようなバカとは違うぞ」

懷から小さな袋を取りだし、放り投げる。

中に詰まっていた金貨が、机の上に広がった。

「前金で二十万だ。質素に暮らしていれば、三月は食っていき^{みつき}けるだろ？」

「だから……」

眉間に指を添え、ジークハルトは、深々とため息をこぼす。

「俺は、只の鑑定士だつて、言ってるだろうが」

「謙遜するな。鑑定だけじゃないだろう。鍵開け、罫外し、古代知識に、異国の言語。ついでに薬物調合とか。おまえなら、今でも一流の冒険者としてやっていけるさ」

「引退済みだつてんだよ」

市場価値の高い金貨を取りあげ、指で弾く。

手に落とし、純度を確かめるように軽く噛んだ。

「……ま、金に貴賤はねえ、か」

「その通り」

「一万上乗せで話ぐらいは聞いてやる」

「そうこないとな」

エリオットが平然と、新しい袋を取りだし乗せた。そして、真顔になる。

「事のはじまりは先週だ。南西にある森で起きた噂は聞いてるか？」

「知らねえよ。ここから南西の森つつと……」

「【魔】に優れた、『エルフ』の一族が住んでる森だ」

言葉をひとつ区切る。

「先週から、エルフ族との連絡が途絶えているそう。おかげで、連中の森から取れるアイテムの流通が無くなり、王城は大騒ぎらしいぞ」

「そのアイテムってのは？」

「> 森の霊薬< だ。消費した【魔】を回復させる、飲み薬だな」

「ああ……。王城が販売を独占してるアイテムか」

「そうだ。そのアイテムの流通も途切れている。エルフ族はおそらく、ほとんどが死に絶えたという見方になっているらしい」

へえ。

ジークハルトは、どこか気のない様子で返事をした。

「それで。この街で、明日の夜に盗品が流される情報を掴んだのが、つい昨日だ」

「盗品？」

「エルフ族の >アーティファクト< が売りに出されるらしい。売り場に潜り込めば、一族が滅びた元凶が掴めるかもしれん」

「流してる連中の正体は分かってんのか？」

「確証はないが、十中八九、この国の貴族だ」

「あー、腐ってんな」

唾を吐き捨てるように告げ、後ろ髪をかいた。

「自分らの不始末が処理できず、テメエのギルドに依頼が来たわけだ」

「そういうことだ。腐った貴族の連中に、一泡吹かせてやるのも面白そうだと思わんか？」

「……悪くねえな」

ジークハルトが応じれば、蒼の双眸が深く頷いた。さらに、懷から一つの仮面を取りだして置く。顔の上半分を覆う、目と口元のところだけ開かれた、白いオペラマスクだ。

「なんだそりゃ？」

「これが、売り場に行くための招待状らしい。手にとって見てくれ」
ジークハルトは片眼鏡モノクルを装着し、受け取った仮面を観察した。額に触れるところを撫で、表情を歪める。

「気づいたか？」

「……詳細は分からねえが、わずかに【魔】を感じる。催眠系か？」
「恐らく。内側に己を驕らせる【属性】が籠められているはずだ。あとは……」

少し言葉を濁して告げた。

「オークシヨンの客は、男に限定するらしい」

「それがどうかしたのか？」

「確証はないが、エルフの生き残りが売りに出されるらしい」

「クソだな」

「同感だ。さて、そろそろ返事を決めてもらえるか？」

「ああ」

ジークハルトが片眼鏡を外す。茶の短髪と同じ瞳を閉じ、思案に

耽る。

壁際に置かれた棚上。時計の秒針が一週した。

「——いいぜ、引き受けてやるよ」

項目4：悪意と殺意の目利き。（前書き）

一部、倫理感に外れる描写があります。

項目4：悪意と殺意の目利き。

催しは、月の浮かばぬ深夜に開かれた。

大通りから離れた裏路地の、朽ちかけた屋敷。

正面の門は錆びつき、もうずっと、人の手が入り込んでいない有様だったが、

「会場は二階か」

注意しなければ見落としてしまう程度の明かりが、一箇所。

「慣れないもんを着ると暑苦しいな」

ジークハルトは、黒一色のコートと、白のオペラマスクをつけ、錆びついた門を単独で通り抜けた。続く中庭は雑草が伸び、石畳みは割れている。しかし枯れた噴水の周辺は、確かに人が通ったと思わしき足跡が残されていた。

室内に入っても同様だ。消えるか、消えまいかといった風前の灯火が、二階へ導く。

「……………」

辿り着いた部屋。十を越える、仮面の視線が向けられる。

室内はテールクロスを被せた机だけがあるホールだった。ただし内装は、急ぎ整えられた様相で、埃をかぶったシャンデリアの代わり、【魔】を付与された燭台がそれぞれのテールに灯っている。床の赤絨毯はところどころ糸が解れたまま。両側の窓は、黒い布きれで覆われているものの、ジークハルトが外から見たとおり、僅かに光が漏れている。

——杜撰^{ずさん}だな。

思いながら、まっすぐ、部屋の中央に進んでいく。

蒐集家たちは、本来の目的とする物へ視線を向けた。

それぞれの机には、強奪されたと思わしきアイテムが並ぶ。指輪

やネックレスの装飾品、礼拝に使われていたらしい聖杯などの呪具、さらには木製の弓や杖までも。強奪された時についたのか、血の跡がこびりついた物も少なくなかった。

「……よい、実によい。迷宮で取れるアイテムとは、また少し性質が異なるようだ」

一人の仮面の男が呟いた。

ジークハルトもまた横から覗き込んだが、一瞥をくれただけで移動する。

贗作かよ、と小声で呟き、向かった先には、三人の『仮面』が密やかに笑いあっていた。

「いやはや、驚きました。今回はこちらに来て正解でしたよ」

「はは、本当に」

内二人の声は、いくらか皺がれた男の声。

残る一人は、この場で唯一に黒のドレスを着ている。

「ご満足いただけて、なによりです……」

真つ赤なルージュが弧を作り、妖艶な雰囲気醸し出す。

「本日取り揃えた商品は、どれも一級品ばかりですが、さらにこの後、とっておきの商品が控えておりますので……」

「ほお、それは楽しみだ」

「まったく、なにが出てくるのやら」

物欲をたつぷり孕んだ声。そこへ気にせず割って入り、宝石で彩られた髪飾りを、ひよいと摘みあげる。

「……………」

ジークハルトは、手の内で髪飾りを転がした。三つの仮面がその様子に釣られていると、

「これは悪くねえな」

同じ調子で机に戻し、それからまた、足早に去っていく。

「……なんでしょう、今のは。乱暴な」

「随分若そうな声でしたなあ。どこその成り上がりの息子でしょう」
「違う」

仮面の男らは嘲笑し、再び談笑に戻る。
ただ一人、ドレスの女だけが、その行動を追っていた。

すべての机を見て回ったところで、ジークハルトは一つ息をこぼした。

口元に手を添えて、さてどうするか、といった感じに立ち尽くしていた時だった。

「――皆さま」

ドレスの女が、部屋の中央で声をあげた。一同の仮面が、すべてそちらを見る。

「本日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。これより最後の一点をお披露目したく思います。あちらを、ご覧くださいませ」

ホールと廊下をつなぐ扉が軋んだ。

ジャランツと、硬質な部屋の中に響き渡る。その先には、

「ひ、ぐうつ……！」

少女がいた。

成人した男たちの、胸元に届くかという大きさ。粗末な服と、首輪をつけて、強引に歩かされてきた。

「いひゃいっ！」

長い金髪、森の新緑を思わせる翠眼、薄いクリーム色の肌、そして特徴的な、長く尖った両の耳。幼くも端正に過ぎる顔立ちで、頭にはまばゆく輝く精銀の髪飾り。

エルフの少女の首輪を率いて来るのは、狼の顔立ちをした、二本の足で歩く毛むくじやらの『亜人』だった。赤錆び、無骨な骨で出来た鎧を着て、ひたひたと素足で向かってくる。

「コ、コボルトっ！？」

「な、なんなんだ、おいっ！」

仮面の男たちが一斉に身を引く。

コボルトが「ルル……」と犬歯を剥き出し、集まった男たちを睨

みつける。ギヂツと齒を鳴らし、手にした鎖を投げるように放った。
「あ、ぐっ！」

エルフの少女が床に転がされる。

ドレスの女が歩み寄り、膝を折って上を向かせた。

「みなさま、こちら、純血エルフ種の生き残りであられる、リーアヒルデ王女です。フフ、最低落札価格は、一千万から如何でしょうか……？」

「ひっ！」

上向きにされた王女の顔。

見る者にとつては、嗜虐芯をそえられる香りをたつぷり孕んでいた。男達は魂を抜かれたようにリーアヒルデを見つめる。一人を除いて、女の唇が何事かを紡いだことに気がつく者はいなかった。

仮面に秘められた【魔石】が呼応する。その力を満たしはじめる。

「……は、ははははははははは。これは、いやはや、おもしろい……」

「実に、実にいいでは、ありませんか、なあ？」

「やつ！」

不穏な気配を感じたリーアヒルデが、くしゃと顔を歪めた。男たちの眼下から逃げようとするも、コボルトが鎖を引けば、再び転がるだけだ。

「けほっ！」

苦しげに咳きこむ声に対して、男たちが嘲笑う。

「ひははっ、愉快的催しですなあ。低値で入札をいたしましたようか」

「あー……。では千二百」

「千三百で……」

「いやいや、過去の繁栄とは儚きものですねえ」

仮面に付与された【魔石】が理性を溶かす。値は天井知らずに伸びていく。

「——さて、みなさま」

うつすらと、女の口元に笑みがこぼれた。感情のなかった紅い瞳

に、ぼうつと怪しげな色が浮かぶ。

「本日は納得いくまで、直々に、商品をお確かめいただけることを推奨してまいりました」

そう言つて、液体のたゆたう小瓶を取りだした。リーアヒルデが全身をふるわせ、ぽかんと口を開いたまま動きを止める。

「【水】をさしあげましょう。王女さま」

口をこじ開き、小瓶の液体を強引に流し込む。

「ご気分は如何？」

「……………あう」

リーアヒルデは、ぼうつと気が抜けたように宙を見上げていた。魔法にかかったように、首を傾げてみせてから、それから自分を見下ろす、情欲に染まつた視線と向き合つた。

「……………なんだ、あの【水】は」

あらかじめ【魔石】を取り除いていた男だけは冷静だった。そして、その思考を遮るように、ドレスの女が近づいた。

「貴方は、入札に参加する気がございませんの？」

「ああ、結構だ。テメエが持つてる薬の成分と、効能のほうに興味があるからな」

「残念ですが、こちらに関してはお答えできませんわ」

「そつかよ、なら、自分で調べるとするか」

口元が吊りあがる。その手に、半分ほど中身の減つた小瓶が踊る。
「なるほど？ 麻薬というよりは、【魔】に起因する成分が強いよ
うだな」

ふたたび手に落ちたとき、女が短い悲鳴をあげていた。
「いつの間につ！？」

「手癖が悪いのが、売りの一つでな」

平然と囁く。小瓶をわざとらしくスーツの内にしまふ。

「……………お客さま、無事にお帰りいただけなくなりますわよ？」

「最初から期待しちやいねえさ」

「あら、そう？」

女が小さな笛を取る。音の無い響きがしたのと同じ、ホールと廊下を？ぐ扉から、武装したコボルトたちが集団で現れる。

冷酷に、ドレスの女が告げてきた。

「まったく、困ったネズミだわ。増えるまえに、駆除しておかなくちやねえ……」

「同感だ。もう遅いけどな」

女の言葉を制す。

手首の裾から、鞘に収まった漆黒のナイフを抜き放ち、床上に突き刺した。

『——【時空】を知る我、命ず。> 彼方へ通じる扉、此処に生ぜよく』

項目5：正当防衛ですから。

呼応する。

漆黒のナイフの刃先が煌き、言葉に秘められた概念イメージが展開。

ナイフの上空が揺らめくと同時、声が落ちてきた。

「遅かったな、ジーク」

そして、女の言うネズミは、颯爽と現れた。

ブーツの先で一步、韻を踏み、片膝をついた後に立ちあがる。

身につけた衣服は黒づくめ。蒼髪・蒼瞳の若い男。腰に帯びた長剣とはべつに、持ち柄のついた短刀を二本握^{マインゴースト}っていた。

「死んだかと思ったぞ」

「金を貰うまでは死なねえよ」

「ははっ、お前らしい」

エリオットが口端を緩め、手にした短刀を二本、投げてよこす。

「首尾はどうだ？」

「エルフを狂わせた元凶らしい薬物は回収した。詳細はその女が知ってそうだ」

「上出来だ。後は片付けるだけだな」

白銀の刃をさやから抜き払うと、ジークハルトもまた、短刀を抜いて構える。

エリオットが一步、距離を詰めた。

「ご婦人、抵抗がなければ痛い目にあわなくて済みますよ」

見栄えのする二枚目の顔立ちが、いつそ清々しいほど、爽やかに笑う。

さらに一步。黒ドレスの女が気圧されたように悲鳴をあげた。

「そ、その男を止めなさいッ!!」

武器を手にしたコボルトの一体が、忠実に襲い来た。

間合いに入る。やや赤錆びた感じのする片手斧を落とす。

ざっくり。簡素な手応えは、真つ赤な絨毯を裂いた音。

「おまえは、まあ、死んでおけ」

白刃による一閃。残像に近い影が浮く。

——ドッ。

手首を斧ごと斬り払い、続けて首まで跳ね飛ばす。

血飛沫が吹き荒れ、鮮血が舞う。

頭が勢いよく回転し、ゴッ。と音を立て、天井にぶつかった。落下する。

『……………』

砕け、脳髓を撒き散らした頭部。異臭が漂う。首なしの身体も傾ぎ、ゆらりと倒れた。

しん……と静まり返った場。朗々と響く、エリオットの声。

「さて、次の相手は？」

斬り殺した死体を足蹴に。

瞬間、獣たちの怒号と、男たちの悲鳴の音が、

『——ウ、オアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

！……』

折り重なる。正面左右より二体。後続からも迫り来る。

「ハハッ！ 生憎と、犬畜生とダンスを踊る趣味は無いんだがなあッ！」

鮮血をこびりつかた表情のまま、楽しげに一閃。斬り返す勢いでもう一閃。亜人の死体がまた増える。

同時に攻めていたのは残る一体。本能で悟ってか、初めて怯み、そして影のように近づく男に気づかなかった。

『——【炎】を知る我、命ず』

ジークハルトが【魔】を謡う。

短刀の柄にはまっていた、赤い【魔石】が輝いた。

『――刃にその力宿し、> 爆ぜ、散じろッ！ < 』

呼応する。

短刀より【炎】が舞いあがり、火花と化して爆散。

鋭利に研がれた刃が二本、コボルトの肉と骨、さらには粗悪な革鎧ごと食らい尽くす。

「ガ、ア、アギイイイ、ッ――！」

気が狂ったような咆哮をあげ、手にした斧を振り上げるも、

「おせえよ」

斧が落ちる前に、短刀が、腹を斜め十字に斬り裂いた。

血肉が一瞬で焦げ、骨が碎ける。くすぶる音と匂いが立ちこめ、絶命した。

呼吸をいくつも終えないうちに、襲いかかったコボルトの死体が合わせて四体。

二人は無造作に剣を振るい、向き合った。

「相変わらず熱い殺し方をするな。ジーク」

「うるせえ。そっちこそ少しは加減しろ。俺の服にまで返り血つけないじゃねえよ」

「実は最近、書類仕事が多くてな。身体を動かすのは久しくて、エリオットが笑いながら、屍を乗り越える。」

「歯止めが効かん」

ひゅうつ、長剣が風を斬る。嬉しそうに笑い、さらに一步。

残るコボルトの進撃が止まった。敵わぬと知ったか、恐れたようにドレスの女を見た。

「……な、なにをしているっ！ いけっ！ いきなさいっ！」

命じ、女は単独で逃走した。余裕などない。必死に、息荒く、廊下と繋がる扉を開けた。

その瞬間、

「はい、ごめんなさいね」

「ぐ、はッ！？」

後ろに吹き飛んだ。ドレスの女を蹴り飛ばして入ってきたのは、紫色の髪をなびかせ、軽装の防具を身につけた、褐色肌の美女だった。追い討ちをかけるように踏みつけ、にっこり笑顔で言いきった。「動くと言います」

場は一瞬で決着がついた。残るコボルトもすべて物言わぬ屍と化し、ジークハルトを除いた男たちは、仮面を外され一堂に集められた。ドレスの女もまた、身動きできぬよう縄で縛りあげている。

「エリオット様」

「どうした？ フィノ」

現れた美女は、なにかに気がついたように瞑目し、耳に両手を添えていた。

「……外を見張っていた姉様より【声】が届きました。周辺に危険は無いとのことで、まもなくこちらに合流されるそうです」

「そうか。ご苦労だったな」

「……おい……貴様っ！ おいっ！」

「ん？」

仮面を外された男たちが、緊張に耐え切れなくなったのか、エリオットを指さす。

「きつ、貴様らは、何者なんだッ！」

「そっじゃ、ワシを誰だと思っておるかアッ！！」

「……やれやれ。フィノ、説明してやれ」

「はい」

命じられた女性が前にでる。一枚の書類を取りだして、書かれた内容を宣言する。

『依頼者：ゲイルフリート・トラバント・フォン・ノインス』

依頼対象：冒険者ギルド『ニーベルンゲンの指輪』

および『ギルドマスター』エリオット。

依頼内容：魔都にて、近々に開かれる、

ブラックマーケットの制圧・殲滅・実行者の逮捕。
そこで売買されるであろう、エルフ族の秘法の回収
を命ずる」

その内容は、場にいた男たち、全員を凍らせた。

「……………こ、国王、だと……………」

「はい、直々のご依頼ですよ。そういうわけで、どいてください、
ねっ！」

「ぐふっ！？」

フィノが男たちを遠慮なく蹴り飛ばした。突き進み、その奥で果然とする、エルフの王女の元へ歩み寄った。膝を曲げて、頭を撫でる。

「ごめんなさい。もう、大丈夫よ」

金の髪、翠の瞳、粗悪な服のあちこちが破れた姫君を、優しく抱きしめる。

「……………ふええ……………」

弱々しい声と共に、じわり、と涙が浮かぶ。

つうつと、頬を落ちていき、それから両手を伸ばして抱きついた。

項目6：不足の事態。主に金銭的な意味で。

如何に優れた財宝でも、心から欲し、求める者の手に届けねば輝くことはない。財宝に価値を持たせるには、正しく、宝の真贋を見極める手が必要だ。

職人街の一角にある、小さな鑑定店。

「……ふあ」

昼前、眠たげな欠伸を浮かべて、ジークハルトは部屋の扉を開けた。コーヒーを入れたマグを手に、整然と物が置かれた店内を歩く。表玄関の鍵も開け、看板を『営業中』へと裏返す。

昨晚に着ていたスーツ姿ではなく、量産品のシャツに黒のベストを重ね着して、下は作業ズボンというラフな格好だ。

「飯は……。後でいいか」

店内に戻り、壁にかかった時計をちらと見て、椅子に座る。

コーヒーのマグを傾けると、熱くて苦い味わいが、口の中いっばいに広がった。

「さて、仕事だ」

手袋を両手に嵌め、右目の上に片眼鏡モノクルを乗せる。鑑定するのは、昨晚ドレスの女から盗んだ薬の小瓶。透明なガラスの内側に漂う、なんらかの【水】を見据える。蓋を開き、手で扇ぎながら慎重に匂いをかいだ。

「無臭か。ただの水ってこたねーよな」

昨晚、この水を飲まれた姫君は、まるで洗脳されたかのように、ぼんやりしてしまっていた。

「……まあ、口にさえ含まなけりや大丈夫、か？」

あとはじつと、片眼鏡越しに向き合う。すると道具に秘められた【魔】が呼応し、【水】に秘められたイメージをジークハルトに伝えてくる。

液体は次第に血のように赤く染まっていく。赤い色は、使用者に

対して害意を与えんとする意味合いが強い。

「毒か、あるいは一種の媚薬か」

思考を続けながら見据える。

「エルフは【魔】に強いはずだしな。精神を惑わし、乱される状態にはなりにくいはずだ。それなら、エルフに特別な効果をもたらす薬ってこともある、か……？」

あきらめず、さらに赤くなった液体と向き合う。無味無臭で、成分を詳細に確かめられない以上は、片眼鏡モククルの力だけが頼りだった。

「……ん？」

ジークハルトが顔を近づける。

「なんだ？」

浮かんだのは【白い風】のイメージ。

それが、小瓶の口元へと吸い込まれていく。

「こつちのイメージは……。俺の、片眼鏡か？」

解明する、明らかにする——白。

未知の物を究明したときの開放感——風。

それが小瓶の中に吸い込まれている。と理解した時に、不意に視界がぼやけた。正しく言えば、水が赤く見えなくなった。

「なっ!？」

慌てて小瓶の蓋を閉ざす。それから再度、凝視するも、

「おい……」

一切の反応が消えていた。

試しに他の鑑定済みのアイテムを見ても、まったくイメージが浮かんでこない。

「……………嘘だろ？」

呆然としつつ、ジークハルトの頭脳は働いていた。目の前にある【水】は乾きを癒すためのものではない。あらゆる他より【魔】を吸収すべく、本質を【逆転】させられた液体だった。有用性など一切あるはずもない。

「クソッ!」

アーティファクトは総じて高価だった。品によっては家が一つ建ってしまうほどだ。ジークハルトの片眼鏡も安くはなかったし、修理をするには、専用の付与師エンチャンターと呼ばれる職業が存在するのだが、その料金もまた高い。

「ふう」

大きくため息をこぼしたジークハルトの口元には、無意識らしい笑みが浮かんでいた。しかし、鋭い瞳だけは笑ってない。

「この野郎」

小瓶を掴んで振りかぶる。

『短気は損気じゃぞう』

しかし、寸でのところで動きが止まった。

小瓶を投擲しかけた斜線上。棚の近くに、一枚の老人の肖像画が見えた。

三角帽子とローブを身に着けた格好。その手にはビールジョッキ。顔はやたらと赤く、右下には小さなサインで『ワーグナー』とあった。

「クソジジイ」

肩の力を抜いて、手にした小瓶を机に戻した。何気なく指折り数えと、

「もう、四年も前になんのか……」

空には少し、雨曇が浮かびはじめていた。

窓の外を見つめながら、ジークハルトの右手は腹部に添えられる。若い店主の顔に、じわりと、古傷が痛んだような表情が生まれていた。

項目7：己の親は選べぬが、己の師匠は選ぶべき。

* * *

——ガキには過ぎた金だろう？

依頼主であつた王城の騎士に裏切られ、路地裏で腹を刺された瞬間、哄笑するような笑い声が降ってきた。

殺してやる。確かにそう言った。しかし両足はぐらついて、機能を失つたように倒れ込んだ。ちょうど遠くから雨の音が聞こえはじめていた。

ふたたび目を覚ましたのは、月が浮かぶ深夜だ。気を失っていた間はずっと、ドブネズミのように雨に打たれていたらしい。ゴミの入り混じる腐臭が鼻をついた。ハエも集っていた。荒れた石畳みの地面には、いくつもの真新しい水溜りがあつて、夜空には綺麗な星が映っている。

「……う」

顔の側に飛びまわるハエを追い払おうと手を振れば、ジャラと鳴る袋が落ちた。

開いてみると、奪われたはずの金貨が丸ごと入っていた。

「……………」

眉をしかめ、刺された腹部に手を添えると、凝固した血液が剥がれ落ちる。傷口は綺麗に塞がれているが、手当てをしたらしい痕は無い。

「なんなんだ……………」

首を傾げた。いつそ、親切な神様でも通り過ぎていったのか。とさえ思った。

「……はっ」

くすんだ笑いがおちる。神様、ねえ。

笑えば、身体の奥底から熱が滾るような感覚を覚えた。心臓に手

を添えると、どくん、どくんと、自然に脈を打つ。盛大に腹の虫が鳴いた。

「なんか食い行くか」

立ちあがった。歩き出す。

表通りに出てから、馴染みの安酒場に入ろうとした時に、

「――少年、一杯おごってくれんかの」

かけられた声に振りかえれば、そこには妙ちくりんな老人がいた。ボロのローブを着て、頭には不思議な尖がり帽子を乗せていた。命があったせいで、気持ちが楽になっていたのかもしれない。言われた通りに奢ってしまった。

馴染みの安酒場に踏み入ると、酒ビンを持ち、手をあげて叫ぶ声がある。

「よお、ジークウ！」

「……ジジイ」

「嫌そうな顔をするでないわ。こっちに来て、いっぱい付き合えいっ！」

「うつせえ」

無視してカウンター席に座ると、勝手に隣の席にやってきた。ジークハルトの背中を、ワグナーと名乗った老人が景気づけるように叩く。

「なにしやがる！」

「怒るない。本日も講義をしてやろう。テーマは『マナ・ポーション』じゃ！」

「……はあ？」

「賢者の助言をタダで聞けるとは、おぬし、運がええぞお」

「頼んでねえ。つーか誰が賢者だ。この酔っ払いが」

「では、年寄りの長い話、はじまり、はじまりじゃ！」

「聞けよジジイ！」

ワグナーはまったく気にせず、好き放題に話していく。ジーク

ハルトは相槌を打つ代わりに、舌打ちを一つくれてやる。

「……メシがマズくなる。マスター、鶏の手羽先を丸ごと一つくれ」
「ほお、羽振りがええのう」

「うっせーな。昨日拾ったアーティファクトが、ようやく換金できたんだよ」

「おお、そりゃあめでたいの。で、どれぐらいの儲けになったんじゃ？」

「答える義理はねえ」

「なんじゃ、ケチいのお」

ワグナーは言つて、ビールジョッキを、ぐびつと煽った。

「ぶつはーい。んでは講義をするかの」

「必要ねえ」

「なら適当に聞き流しとけい」

「チッ」

ワグナーが酒ビンを煽る。ジークハルトは啜えていた鳥の骨を吐き飛ばした。

「マナ・ポーションは大変貴重なアイテムじゃ。今では > 精霊の霊薬 < なる愛称で、王城のギルドが販売しておるがのう」

「一瓶で十日はメシが食えるな」

「うむ。バカ高いじやろう。何故だか知っておるか？」

「……量が多く取れねえからだろ」

「半分正解じゃ」

ワグナーが、ちちち、と指を振る。

「残り半分は、エルフとの協定があるからじゃ」

「協定？」

「うむ」

ぐびつと酒を煽り、

「ぶつはー。えー、南西の森に住まうエルフ族は、マナ・ポーションの源泉となる『精霊の泉』を確保しとるが、その対価として、この国から生活用品を支給してもらつ約束を交わしておるんだがー、」

「マスター、手羽先とソーセージ追加」

「聞けよ若者お！」

「うるせーな、聞いてるよ」

がるがる、噛み千切る。

「で？　それが協定つてのと、どう関係してくるんだ？」

「ヒント出しちゃろう。貿易と税金の関係って言ったらピンと来るかの？」

「知るかよ……」

口を動かしながら、ふと気づく。

代金として取り出した銀貨が数枚。鋭い瞳が瞬いた。

「……おいジジイ。その協定つてのは、昔から『物々交換』なんだな？」

「そーいうこつたの」

ぐっ！　と親指を立てて、ワグナーが笑んだ。

「>精霊の霊薬<　をいくらで販売するか。その値段を決めるのは貴族たちじゃ。おまけに、元手がタダ同然の商品を、おぬしらに吹っかけとるわけじゃの」

「ハッ、貴族つてのは碌な連中がいねえな」

「まあのう」

「でもよ、ジジイ。エルフの連中はなんで文句言わねえんだ？」

「おっ、話を聞く気になってきたようだの」

「うるせー」

そつぽを向いて、ソーセージをぶすつと一刺し。

「時にジークハルトよ。おぬしが拾ったアーティファクト、そいつを売った先は何処じゃ？」

「……ギルドマーケットの、鑑定師グートアハテンに決まってるんだろ……」

答えた言葉は低く、そして苦痛に満ちていた。

売り買いの値段は相手に一任せざるを得ない。それでも、これだけの金銭を得られたということは、答えは一つだ。

「恐らく、おぬしが売ったのは、よほど質が良かったんだろうのう」

「黙れよジジイ。メシが不味くなる」

殺気を込めて睨む。ワーグナーは「すまんの」と一言だけ呟いた。そしてビールジョッキを掲げ、ぐびぐび飲んだ。

「ぶあっ！ ジークハルトよ。おぬしは頭が良い。冒険者なんぞ止めて、どこぞのギルドにでも入って、王宮での働き口を捜してみたらどうじゃ？」

「貴族共に使われるぐらいなら、死んだ方がマシだ」

「傲慢なやつちやの——ぷっはあっ！」

「……うつ！」

酒臭い息に眉をしかめ、ジークハルトもまた吐き捨てる。

「んで、理由はどうなんだよ」

「うん？ 何の理由じゃ？」

「だから、エルフの連中が、そんな不利な協定結んだ理由だよ。その時は事情があったとしても、今なら俺らに【水】を売った方が、あいつらも暮らしが楽になるだろ」

「まーの。しかしそれは、次回のお楽しみということにしておこう」
釈然としねえ、という顔で睨んだ。

「んじゃ今日の講義は終わりか？ 金にならねえ、腹はふくれねえ。おまけに気分は悪くなる。最低の内容だったな」

「む！ 年寄りの話は聞いておいて損はないのぢや！ いついかなる時、役に立つかわからんからの！ ほれほれ、情報量として、その手羽先よこさんかいっ！」

「っざけんな！ こいつは俺のだっ！」

「ならば追加注文ぢや！ 骨付き肉を追加で五本！ 代金はそっちのガキ持ちでっ！」

「五十歳下のガキにたかんなジジイ！！ テメエこそ自分で稼げ！！」

「うーむ、この前も迷宮に挑戦したんじやがの。腰が痛うなったんで、早々に帰ってきたわ」

「いっそ死ね！」

「ジジイには、いささか辛いわ！ ふぉーふぉふぉふぉーっ！」

ワーグナーは、冒険者としては最悪の腕前で、性格も相当に残念だった。

そんなダメ老人が、もがもが肉を食らいつつ、ふと真剣な眼差しになって言う。

「ジークハルトよ。おまえには、仲間はおらんのか？」

「いらねえよ。んな面倒くせえモンはな」

もう、宝の分け前で裏切られ、殺されかけるのは御免だった。それだから、ワーグナーとも酒場だけの付き合いで、共に遺跡に潜ったことは一度としてない。

「ジジイ、この街を表す言葉を知ってるか？」

「ん？」

「生も死も、気品はあらず、ってな。どう生きようが俺の勝手だ」

「……ふむ。まあ、それもよいか。若さ故じゃな」

ワーグナーは、空になったジョッキを意味もなく揺らす。

そしてまた、好き勝手に語りはじめた。

「ついでに、もう少しエルフのことを教えてやろう。森に住むエルフの種族は【魔】に特化した能力を持つ。彼らはひどく閉鎖的な種族じゃが、それには体質的な要因もある」

「聞いたことあるぜ。連中は、俺たちより【魔】の消耗が激しいってな」

「そうじゃ。生活の水として、日常的に精霊の泉を用いておる故にのう。その【水】が無ければ、彼らとて生きてゆくのが困難なのじゃ」

ふらふらと、空になった酒瓶を煽り、語っていく。

「故に精霊の泉の存在は、秘中の秘。エルフ達の間でも、王族にたらなる者にしか詳細が伝えられとらん」

「やけに詳しいじゃねえか」

「伊達に、長くは生きとらんでな」

「そうかよ」

目つきの悪い少年は、適当に聞き流し、残った最後の肉を手にとった。

「——スキありッ！」

ワグナーが、ジークハルトの酒瓶をひょいっと取り上げる。一気に飲み干した。

「んなっ！ おいジジイ！」

「ぶへーいっ！ ちなみに【魔】というのはあ、言葉を用いることで【己の精神を構築している精霊】と接続するのじゃ！ 命令コードは仮物質となり、【自然界を構築している精霊】の資源と結びつくことで実体化するっ！ それが【魔】じゃあゝい！」

「やかましい！ クソジジイ！ いい加減にしねえと殴るぞ！」

「そして最後はあ！ せつくす！ について！」

「ぶはっ！？」

酔いが回ってきたらしい。

驚いたジークハルトが、半端に砕けた肉を口から吐きこぼす。ワグナーが「ひよっひよっ」とか言いながら、怪しく指先を動かした。息荒く、陶醉したように語りだす。

「基本的にい、体内の魔力は、【自然界の精霊】と同調することで時間をかけて回復させるわけじゃがあッ。対象が強い激情を放った瞬間ッ！ すなわちオスの精子を、体内の深いところで受けとめることで、【魔】を回復させることも可能なのじゃあああいッ！

メスが総じてオスよりも魔力が高いのは、そおいうことおおおーッ！」

「黙れエロジジイッ！」

「魔女っ娘が、【魔】を使いまくった後はチャンスぢやぞ。本能的に、やらしー気分になっておることが、ワシの長年の研究で分かっているッッ！」

「んなもん研究してんじゃねえッ！」

ごす。っと殴ったら倒れた。

息をしていたのが、残念だった。

「……あー、クソ、ムナクソ悪い」

過去の回想から戻ってきたジークハルトは、眉間に指を添えた。

深く椅子に身体を預け、小瓶を掴み左右に揺らす。

「つまり、エルフの王女は、あの時『喉が乾いてたわけ』だな……」
昨晚、エルフの王女が急変した様子を思い出す。

【魔】を吸われる【水】を飲まされて、心ここにあらず、という状態だった。

「……エルフの連中がやられたのは、『精霊の泉』の水源を突き止められて、本質を【魔】で変化させられたせいだ。この小瓶に入っているのが、恐らくその【水】だろうな」

一見しては、無色透明な、ただの水。

本質は【魔】をたっぷり秘めた、エルフ達の日常生活における必需品だ。

それが性質を【逆転】させられてしまった。飲めば逆に【魔】を失ってしまう【水】へ。

「エルフの純粋な肉体能力は、人間以下って話だしな。【魔】が使えないエルフなんざ、赤子を捻るようなもんか」

机の上に置いたマグを傾ける。少し冷めたコーヒーの苦さが眉間を貫いた。

「もう少し推測するなら、一気に変化するよりは、地味に混ぜてつたんだろうな。そうなると犯人は、多少なりともエルフの連中と接点がある奴らか……」

エリオットが言っていたことを思い出す。

犯人は、王城に関係のある貴族かもしれない、と。

「……無理に考えることなんざねえか。エルフが【水】を取引するのは王城の連中だしな。私欲に溺れた奴が【水】を独占しようと考えるもおかしくねえ。ただ、水源の本質を変化させても、それを

元に戻す必要があるよな……」

頭^{かぶり}を振る。思考を止める。

これ以上は、余計なことに首を突っ込む義理はなかった。

マグを逆さにして、一気に黒い液体を飲み干す。

「つし、通常営業に戻るとするか」

言^{モリ}つて、片眼鏡^{クル}を掴んで思いだす。

「……………」

大切な商売道具は、【水】に力を奪われたままだった。

「エリオットの野郎、あとで——」

——カラン、コロン、カララン。

呪詛の念を込めたとき、ちょうど店の扉が開いた。反射的に「よし、いいところに来たな金よこせ！」と顔をあげれば、そこには穏やかな顔をした褐色肌の美女が立っていた。

「こんにちは、ジークさん」

「……フィノ」

「昨晚『動くと潰します』宣言をした女性だった。今は色気のない革鎧ではなく、膝下まである白のロングワンピースを着て、右腕には編み模様のバスケットを抱えていた。本人の美貌とも相まってとても華やかである。空いた手で深い紫の髪を撫であげ、にっこり、花が咲いたように微笑んだ。」

「お仕事中でした？」

「いや……」

怒りの行き場を失って、曖昧に手をあげるジークハルト。その様子が「元気が無さそう」という風に映ったらしい。心配そうに見つめられる。

「大丈夫ですか？」

「気にすんな。あー、ちょうど鑑定の目星がついたとこだ」

「そうでしたか。さすが、仕事が早いですね」

「まーな……」

追加料金よこせ、とは言えなかった。

「あつ、ジークさん」

「なんだ？」

フィノが、手に持っていたバスケットを机の上に置いた。かぶせていた布を取り払うと、ふんわり、甘い匂いが漂った。

「パイを作ってきたんです。よかったら食べてください」

「助かる。今日はまだ、マズいコーヒーしか飲んでなくてな」

「もしかして、起きたばかりですか？」

「ああ」

ジークハルトが頷くと、フィノは「良い事を思いついた」とばかりに両手を合わせる。

「よければ、私がご飯作りましょうか。ここに来る途中で市場の方から、タマゴとか、お野菜を分けて頂いたんです」

「いいのか？」

「はい。エリオット様は、朝から登城されていて、夜まで帰ってこないそうですから」

「偉くなったもんだな。最初はしがない冒険者に過ぎなかったヤツが」

「本人は、今もそのつもりですよ。三年前と変わらずに」

「……そうか、結構経つんだな」

エリオットがこの街に訪れたのは、三年前。

ジークハルトが冒険者から足を洗い、鑑定業を営みはじめた年でもあった。エリオット自身の見栄えがよく、剣の腕が異常に立つこともあったが、連れ立っていた『姉妹』も美女ばかりというのもあって、その名は瞬く間に広まっていた。

「敵多いだろ、あいつ」

「そうですねえ」

「わざわざ『上』を目指すこともねえのにな。一人で、気楽にやってりゃいいのによ」

そう言うのと、フィノは口元に手を添えて、くすりと笑った。

「エリオット様、おっしゃってますよ。ジークさんが、もつと素直に依頼を引き受けてくれたら、自分の仕事が楽になるのにつて」

「勝手なこと言いやる」

「信賴してるんですよ。王城の鑑定師にだつて、^{グートアハテン}ここまで腕の良い鑑定人はいないつて言つてますもん」

「大げさだな。俺は器用貧乏な、場末の自由^{エル}鑑定士^{サース}が似合いだよ」
言いながら、ジークハルトはパイを一切れつまんで、口に放り込む。

「おっ？」

瞬間、茶色の瞳が驚きに染まる。真顔で、短く言いきった。

「美味い。一級品だな」

「でしょ？」

やわらかな店内の雰囲気とは裏腹に。

窓の外は、少しずつ雨雲が近づいているようだった。

項目8：蔽蛇の対処法 「斬り殺す」

現王が座す魔都の城は、平地から伸びた小高い丘の上に建っていた。見張り塔から見下ろせば、魔都ルーインの全景と緩やかにカーブを描く河の流れが見える。その岸辺の一角は、大地がぼっかり抉られており、その場所だけが異質だった。

広がる迷宮の入り口。さらに河の向こうには、緑豊かな森の情景が広がっている。

エルフ達が住んでいた『帰れずの森』だ。

「……じきに陽がくれるな、夜までに一雨くるか？」

蒼髪の男が、濁った具合の空を見あげていた。そろそろ夕方に近い時間で、空には灰色の雨雲が広がりがつつある。

「こんなところにいたのね」

「うん？」

声に振りかえる。黒髪をなびかせ、片方の眼を眼帯で覆った女性が、塔の螺旋階段から顔を覗かせていた。

「バカと煙は高いところが好きね。会議が再開されるわよ。部屋に戻って」

「わかった。にしても、時間は有用に使いたいものだな」

言えば、女性は素直に応じた。

「無理でしょうね」

城の議会議室。広い石組みの部屋には、飾り気のない円卓が一つと十席に満たない椅子が置かれているだけだ。

「——それでは、昨日に回収した宝は引き続き、王城の『ギルドマ―ケット』の倉庫で保管しておくということで、よろしいですか」
「意義なし」

殺風景な室内に反して、高価な服を着た初老の男たちが、忙しく言葉を交わしていく。

「では、森への調査については、いかが致しましょう」

「最優先の事案でしょう。あの里には、貴重な　>精霊の霊薬<となる源泉がありますし」

「うむ。アレは魔都の柱となる、貴重な財源ですからな」

「錬魔師ギルドアルケミィが作っている、代替品ではダメなのですか？」

「効力が無いことはありませんが、まだまだ、改善の余地があります」

「では、やはりエルフの森の調査を行い、原水の状態を確認しないことにはなりませんまい」

話の流れは、一つの方向に傾いていくように思えたが、

「……いやしかし、そのための予算はどうするおつもりで」

「街の地方警備に回しているぶんを、一割ほど回してみては？」

「バカな。自警部隊の予算は今でも足りないぐらいでしょう。それよりも、迷宮の関所に投入されている予算をですな……」

簡単には決まらなかった。

いざという場合の、責任時の押しつけあい。そして予算の出資所の取り決め。結論だけが引き延ばされるやりとりの行きつく先は、

「——さて、どうしたものでしょうなあ」

明らかに、場にいた一人に向けられる。

言葉を受けた蒼髪の男は、「まったく困りましたね」と、無難な返事をしておいた。

>精霊の霊薬<　という名をつけられた【水】は、非常に高価だった。

失った精神の安定を取り戻し、ふたたび【魔】を発動させることが可能になるアイテムは、一見しては無臭透明の水なので、ニセモノが堂々と出回る品でもある。最悪の場合、毒薬をそうだと偽って、暗殺に使われた前例もあった。

それ故に、基本的には王城と直接に繋がりのある『ギルドマーケット』で、やりとりするのが常となる。これは、売り手にとって都

合がいい。

(……【水】の供給が途絶えれば、城側の権威は大きく落ちる)
エリオットは言葉を隠し、思考していた。

(だからこそ、今は逆に好機といえる。俺たちにとっても、城の連中にとつてもな)

【魔】は、強力だ。 >精霊の霊薬< がいくら高価であっても、求める者は多い。

己を際限なく強化することもできるし、逆に相手を衰えさせることもできる。

自然界の火や氷を模した、擬似的な【火】や【氷】を新たに創造することも可能で、応用すれば自らの武器に、【火】や【氷】の【属性】を付与できる。反面、その【属性】の攻撃から身を守ることでもでき、【魔石】と呼ばれる特殊な鉱物を用いれば、その力はさらに増す。

だが、用いれば用いるほどに、精神が疲弊する。

肉体的な損傷はないのに、己の存在意義が分からなくなったり、記憶が抜け落ちたり、ひどいと自我が崩壊してしまう。

【魔】は使いこなせれば強力無比。しかし同時に、諸刃の剣だった。

「——ット殿！ エリオット殿ッ！」

「……………は？」

気がつけば、ぼんやりと考えに耽っていた。やや焦って怒声のする方をみれば、頬に傷のある男が、真っ向から睨みつけている。

「心、ここにあらず、といったようだなア？」

齢三十をいくつか超えたぐらいの男だった。筋骨隆々としており、白い魚眼を思わせる瞳が来る。勲章をつけた白銀の全身鎧もまた、ギラリと輝いた。室内の視線がすべて、エリオットの顔に注目する。

「……大変に失礼をいたしました」

席を立ち、頭を下げる。周りから失笑したような声きた。

「どうやらお疲れのようですな。まだお若いというのに」

「申し訳ありません。なにぶん、こういう所には縁のない下賤な身の上でして」

「ほお、その割には、ずいぶん慣れた風に口が回るなア」

「まっただ」

初老の男たちも頷いて、楽しげに、柔和な表情で追いつめてくる。「エリオット殿の噂は聞いておりますぞ。三年前、この魔都に現れてからというもの、破竹の勢いで迷宮を攻略し、今では最も『深淵』に近い男であるとか」

——しかしその生い立ちは、ほとんど謎に包まれているとか。

——帝都の王族が、妾に産ませた子であるという噂もあるとか。

ここぞとばかり、次から次へ生じる質問に、エリオットは苦笑した。

「単に放浪癖があつて、少しばかり、広く浅く、物を知っているだけですよ」

「そうだろうな。所詮はこの国になんら想い入れなど無い、余所者だ」

吐き捨てるように騎士団長が告げれば、取り成す声があがる。

「まあまあ、レンデル殿。その辺りにしておきましょう。普段、人知を超えた迷宮に対峙している剣聖も、こういう席では心が折れるご様子だ」

「ほお。では我々の闇の広さは迷宮以上と？」

「さもあらん、ですな」

冷やかな笑いがこぼれる会議室のなか、エリオットはもう一度頭を下げて、席に座りなおした。それから、何度も頭の中で組み立てていた言葉を口に出す。

「皆さま。もし騎士団を動かすのにお困りでしたら、私が束ねたギルドを持つて、南西の森の探索、およびその調査を赴かせていただくことは可能でしょうか？」

「ふざけるなよ、蒼毛の」

レンデルと呼ばれた騎士団長が、睨みを効かせてくる。

「南西の森に住まうエルフの領域は、我らが王に連なる者と、その従者のみが立ち入ることを許された地だ。貴様のような、何処の生まれかも知れん者が踏み入れると思うな」

「……失礼いたしました、騎士団隊長、レンデル殿」

一呼吸おいて、言葉が続ける。

「では、我がギルドの者たちは、王宮騎士の手足となって働かせて頂きます」

「なにが狙いだ」

「単に血が騒ぐだけです。未知に対する憧れ、とでもいいでしょうか」

「はっ、やはり貴様らは、蛮族に過ぎんな」

「返す言葉ありません。ああ、ところで。昨日、私たちが捕らえました女の詳細は、なにか分かりましたでしょうか？」

安い挑発を流して告げると、正面にあるいかつい顔が、さらに陰しくなった。

「なにか、とはどういうことか」

「……どうかされましたか？」

エリオットが聞き返す。さらに言葉を重ねる。

「探索先は『帰れずの森』とも呼ばれる迷宮です。如何にしてそれを突破し、エルフの里を落としたのかは見当もつきませんが、捕らえた女を吐かせて案内させれば、エルフの里や源泉にも、楽に辿りつけるのではないかと思ひまして、ね」

もつともらしい事を言えば「確かに」などと続く声もあがる。

レンデルだけが、苦虫を噛み潰すような顔をした。

「森を案内させるのは、生き残りである、リアヒルデ王女でもよかるうッ!!」

「——ならん」

そしてこの時、エリオットの対面、上座にいる壮年の男が声をあげた。

「かの王女が得た傷は深い。我々が近づけば、部屋の隅に逃げだす

程にな」

「……しかし、それは……」

「レンデル。女の正体は分かったのか」

落ち着いてはいるものの、しかしこの場で、最も威厳に満ちた声だった。

場がにわかに、しんと静まりかえる。

「はっ……、いえ、なにぶん、口が堅く……」

「そうか」

するどい灰褐色の眼光が、胸中を貫き刺すように、光る。

「では、ひとまずここまでだな。エルフ族の秘法は取り決め通り、ギルドマーケットの倉庫に保管しておけ。競りに参加していた者たちの処分も、裁判官たちに通達しておくように」

告げる男の声に、わずかな老いは感じられる。しかし、ひたすらに重かった。

「さて、エリオット・ニーベルンよ」

「はい」

「お前のギルドに森を探索する許可を出す。我らが騎士の配下となるのは抵抗があるかもしれないが、引き受けてくれるな？」

「微力ながら全力を尽くしましょう」

双眸が混じり、互いにひとつずつ、相槌を打つ。

「ああ、それともう一つ、貴殿に頼みたいことがある」

「なんなりと」

魔都の王は、うむ、と頷いた。白くなつた髭を撫で、口を開く。

「エルフの王女、リーアヒルデのことだな。先ほども言ったが、不慣れな環境ゆえにか、食事も満足に取らぬし、城中の者とも言葉を交わさぬ。唯一に、おぬしの配下であつた者とは、いくらか言葉を通じていたようだが」

「フィノですね」

「うむ。その者に、リーアヒルデの身柄を頼むわけにはいくまいか」

「国王ッ！ それは我らに信頼がおけぬとッ!？」

レンデルが激をあげる。しかし変わらぬ口調で、魔都の王は言いかえす。

「事情が事情なのだ。仮に捕らえた女がなにも吐かねば、エルフの王女であるリーアヒルデが唯一の生き証人なのだ、わかるな？」

「……ぬ、う」

「いや、確かに王の言質には一理ありましょう」

「そうですな。まずは精霊の泉の原水を、一刻も早くとり戻さねばなりませんまい」

場を集った方々から、賛同する声があがる。さりげなく、王女の安否よりも、泉の水が大事だと言わんばかりだった。

エリオットが密かに笑う。冷静さを装っていた表情が、ここに来て初めて崩れていた。

項目9：王女とメイドとの暮らし方。

その夜、ルーインの街は、バケツの水をひっくり返したような大雨に見舞われた。

表玄関の看板は、当然のように「閉店中」だと告げていたが、そんな時でも平然と扉を開けて入ってくる客がいる。

「よお！ ジーク！」

鈴の音は強い雨音にかき消され、聞こえなかった。客は雨に負けじと叫ぶ。

「昨日ぶりだな！」

「表の看板が見えなかったのか！」

「雨が強くてな！」

ずぶ濡れになったエリオットの側には、連れが二人いた。共に暗色のローブを被り顔を隠していた。

「――夜分遅くにすみません、ジークさん」

連れの一人がフードを取り払う。昼に訪れていたフィノだった。

両手に抱えた大きな荷物を、重たい音を立てて置く。

「あ、う……………」

さらに、フィノの足下にひつつく最後の一人。この場では頭ひとつぶん小さい。フードの下から覗くまぶしい金髪と、明るい翠色の瞳が、ジークハルトを恐ろしげに見上げていた。

「……………おい。エリオット、こいつは」

「ああ、リーアヒルデ王女だ。御身を一時、俺達が預かせてもらうことにした」

「どういうつもりだ。ここへ連れてくる必要はねえだろうが」

「実は、少し気にかかることがあってな。俺たちのギルドも安全とは言いい切れん」

「……………だから？ なんだってんだよ」

「明日には、俺も森の搜索で留守にせねばならん」

「知るかつ！」

「俺がいない間、王女の護衛を頼んだぞ」

「おいっ！ ふざけんな！！」

殺意すら込めてエリオットを睨むも、

「ジークさん、私からもお願いします。さあ、リーアヒルデ様も」

「……お、おねがい、しま、う……」

残る二人が揃って、ていねいに頭を下げてる。一步離れたところから「断れんだろう？」と、エリオットが得意気な顔を浮かべていた。

一夜が空けた。

朝が来るのと同時に雨は去ったのか、空は綺麗に晴れていた。

「……ねっ みい」

茶の短髪をかきながら、マズいコーヒーを片手に、店の表に通じる部屋までやって来る。玄関に手をかけたところで、すでに鍵が開いていることに気がついた。

「ふん、ふん、ふふん」

鼻歌交じりに、店の前を簾で掃いているメイドがいた。城中や貴族の屋敷では珍しくも無いが、下街とも呼べる職人たちの住むところには、使いにでも出されない限り見ない姿だ。

「あっ！ おはようございます。ジークさ——ご主人様」

あろうことか、場末の鑑定士の男を、様づけ呼ばわりだった。まだ陽が上がりきらぬ早朝から妙な幻覚でも見てるのか。そんな顔をしつつ、ジークハルトは店の中へ取っつかえず。すると今度は、

「……………あ……………」

廊下に行く扉の向こう。こっそり顔だけ出している、金髪翠瞳の子供と目が合った。

「ひう！」

ジークハルトの記憶では、背中までなびいていた金髪は、今は自分と同じほどに短く、耳元で切り揃えられている。着ている服はあ

りきたりなシャツの上に、大工たちや、その使い走りの少年たちが着る作業用のツナギだ。頭は長い耳を隠すつもりか　>たれ<のついた帽子を被っていた。

「フイー……。どこ……。？」

「あいな」

ジークハルトが根負けしたように前に出る。途端に「ひっ！」と両肩を振るわせて、部屋の隅に走っていった。おどおどしながら謝った。

「……ご、ごめん、なひゃい……」

まるで母親から離された、力のないウサギ。ジークハルトがまず不機嫌そうに眉をしかめると、目の前の小動物はガクガク震えて、さっと作業机の影に隠れた。

「どうしろってんだよ」

思わずといった感じで呟いた時。

玄関の扉が、明るい鈴の音を立てて再度開いた。

「どうしたんですか、ご主人様？」

「フイーっっ！！」

「あら」

エルフの少女が、全力で、弾丸のようにまっすぐ駆けた。ジークハルトの隣を抜けて、途中でこけそうになりながらフィノに抱きつく。受け止めたメイドは、簪を壁際において小さな頭を愛しそうに撫でてやる。

「リアン様、もうお目覚めでしたか」

「リアン？　――ああ」

偽名かと納得する。それから仲睦まじく、抱き合う二人を見比べた。しかし少年に扮したリーアヒルデはともかく、フィノが、メイドの格好をしてる理由はよくわからない。

「フイー、どっか行っちゃったと思ったっ！」

「大丈夫ですよ。私はどこにも行きませんからね」

「えへ」

幸せそうに、白いエプロンの胸元に顔を寄せる。そして、メイドに転職した知り合いは、紫色の瞳を細めて微笑んだ。

「ご主人様。リアン様が目を覚まされたようですし、食事の支度にいたしますね」

「……いいんじゃないか」

「かしこまりました。ご主人様」

恭しく礼をしてくるメイドに対して、ジークハルトは、すごく気まずそうな顔を浮かべる。何気なく手にしたコーヒースプーンを煽れば、いつもより、苦い味わいが広がった。

項目10：確信犯である顧客、および知的少女との会話劇。

奇妙な居候が二人増えたが、やるべき仕事に変わりはない。

朝食を食べ終え、作業机に座って時間を潰していると、鈴の音が聞こえてきた。

「よお、兄さんよ！ 昨日はすげー雨だったなあ！」

二日前に黒のナイフを買い取った、あの露店商が入ってきた。

さらにもう一人、のっそりと、背中に大斧を構えた男がやってくる。太い両腕をむき出しにしており、威圧的な雰囲気隠そうとしない。

「場末の鑑定士たあ聞いてたが、確かに若えな」

「アンタは？」

「この小せえ奴と、何度か組んで迷宮に潜ってる。そんだけだ」

両腕を組んで仁王立ちになる。ジークハルトは椅子に座ったまま、明らかに友好的でない視線を受け止めた。

「話だと、随分腕が良さそうだって聞いてたんだがな。実際どうなんだ？」

「受け取った料金以上の仕事はやったぜ」

「ほお」

どすん、と床が響く音を立てて、大男が椅子に座る。

「あのナイフも、銀貨一枚で買い取ってくれたそうじゃねえか」

「今更返せつか？」

「んなこたねえよ。ただ、相方が他に持ち込んだ鑑定品は、どうなつたのかと思つてな。中には良質の【属性】が付与された、レアな
> 妖精指輪く もあつたら？」

「クズ銀の指輪に、カスい【属性】が入った指輪なら鑑定したぜ」

「……んだと？ おい鑑定士、もっぺん言ってみろ」

「三流品だつてんだよ、全部な」

ジークハルトは席を立ち、二日前に鑑定した商品を机の上に並べ

た。

「指輪が三点、鎖帷子、杖、ネックレスがそれぞれ一点ずつ。合わせて六点だ。不要な【属性】も解いてやったから、銀貨六枚でまとめて引き取っていい」

「ざけんなッ！」

ドンッ！ と勢いよく机が叩かれた。

「所詮は場末の自由鑑定士^{エル}だ。安い料金に見合った、適当な仕事しかしねえってか」

「そう思うなら勝手にしな」

大男の方が、眉間に太い血管を寄せてジークハルトを睨む。その後ろでは、小さい方の相方が「すまんね、兄さん」という感じに苦笑しているが、腹の内は知れない。ともすれば難癖を重ね、あのナイフを取り戻そうという思惑ぐらい、あるかもしれない。

「おい、真面目に鑑定したんだろッ！」

「手は抜いてねえよ。そっちこそ、次はホラ吹いて持ち込むんじゃないぜ」

「なら、その理由を言ってみろっつんだよ！！」

再び机が叩かれる。ジークハルトが面倒くさそうに、息をこぼした。

「さつきからうるせえな。テメェら、この町に来たばかりの新米だろ。浅層ていどのアイテムなら、こっちだって飽きるほど鑑定してんだよ。大方は迷宮の小鬼^{ゴブリン}と、【炎】を操る術者が一人つてとこだろ？」

大男が目を見開いた。

「どうして分かる」

「役に立つかは知らないが、覚えときな。小鬼の連中は、気に入ったモンは赤ん坊みたいに口で転がして、自分の印だっている傷をつけたがる。片眼鏡^{モリクル}で見りゃ、唾液でマーキングされた後は一発で見抜けるが、肉眼でも結構わかるもんだぜ？」

言って、指輪に共通して残る、独特のひっかき傷を示してみせた。

「ほ、ほお……」

大男が、先ほどの激昂した態度から一変、知性を窺わせる色合いに変わる。隣の男も思うところあったのか、両肩を竦めていた。

「昔は冒険者だっつったな、兄さん」

「ああ。引退する前は、単独で中層以降に潜ってた」

「へえ、たいしたもんだ」

「そいつはどうも。言っとくが、こっちはまともに商売してんだぜ。それに、最初から難癖つける目的の客は、テメエらが始めてじゃないんでな」

「む……」

大男が野太い指を、自らの顎に添える。

「説明も今なら無料にし^{タダ}といてやるが、どうする？」

「ははっ、兄さんにや適わねーな、頼んまずぜ。なあ、ダンナ？」

「……仕方ねえ、聞かせてみる」

ジークハルトが、初めて口の端を緩めた。語りはじめる。

「まずはこの指輪だな。低級の小鬼ぐらいなら従えさせられる【使役】の属性が付与している。害を与える目的の『呪い物』は、基本的に人が作る物だ。となれば、連中を操る主がいる」

続けてネックレスと、赤い宝石を乗せた杖を取り、いつのまにか聞き入っていた二人に向ける。

「……で、これがその主だろ？ 【魔】に精神を乗っ取られた奴は、正常な判断ができなくなる。もしくはテメエらみたいな新米冒険者を狙って味を占めた、魔術師くずれの盗賊だ」

「【炎】を使ってきたのが分かった理由はなんだ？」

「色だ。【魔石】は基本、術者のイメージがきっかけで、この世界に実体化する」

言って、杖に嵌った赤い石を指で叩いた。

「【魔】の威力をてっとり早く高めようと思えば、【魔石】の色を近づけることが、もっとも手っ取り早い。闇に住む小鬼共は【炎】が苦手だしな。こっちの鎖帷子は、連中を閉じ込めておく拘束具、

と言ったところか」

「……フン。なかなかやるじゃねえか」

「そう思うなら、ついでに一つ忠告しといてやる」

「ん？」

すう……と、ジークハルトの瞳に陰が増す。

「お前ら、死体漁りは適当にしとけ。場末の店で処分しようと思うぐらいの度胸なら、近い将来、いつか必ず同じ目に合うぜ」

客である男二人が、揃って気まずそうに顔を見合わせた。

存外、気の良い二人組みらしい。

「そいつは、相手から襲ってきたから奪ってやった、ただ……」

「兄さん、俺らが死体を漁ったのは、アンタに売ったあのナイフの持ち主だけでさ。なかなか、宿代にも切羽詰まる有様でしてね」

「別にかまわねえよ。どっちでもな」

ジークハルトは、少し面倒くさそうに告げる。それから、鑑定したアイテムをすべて二人の前に運んだ。

「ここから東に歩いた通りに、溶鉱炉を持ったクス鉄屋がある。たいた値にはなんねーが、俺の名前出して持ってけ。一日のメシ代ぐらいにはなるからよ」

結局、ジークハルトは料金を受け取らなかった。なんとなく講釈っぽいものを垂れて満足してしまったという感じに、ぼんやりと天井を仰ぎ見た。

「生きてりゃ、また来るか」

良くも悪くも、善良な人間はジークハルトにとってはありがたい。客の信頼を得ることができれば、鼻屑にして常連になってくれることも多いのだ。

『自由鑑定士』は言うなれば、個人営業の鑑定人だ。専門の試験を突破して、王城と直属繋がりのある、正等な『鑑定師』グイートアハテンではない。

誰もが名乗れる自由鑑定士は一言で「信用に足りない」わけだが、鑑定師は、その信用に足るぶん、制約も大きかった。

王城直下のギルド機関にしか所属できず、月々で、一定の給金が保証される代わり、個人で店を出したり、鑑定料を決めることができない。だから、鑑定料金が安いだけの自由鑑定士は絶えない。むしろ堂々と、詐欺目的で冒険者に近づく者が多かった。

故に、名が知れた実力者たちは、ギルドの鑑定師にだけ依頼を頼む構図ができあがる。中にはジークハルトの腕を見込んで、お前も鑑定師にならないかと誘ってくる者もいた。

「……お断わりだ」

昔を思い出すように、一人呟いた。

それから、小さな店で、黙って、慎重に、別の遺物アイテムを鑑定していく。開いた店の窓からは、気持ちのいい風が吹き込んでいた。ふと顔をあげる。

「店主と客。俺たちの間柄なんてのは、それが一番だ」

客一人につき対価を得て、日々の腹を満たして生きる。

未来への展望はなく、今だけを見つめる。

求めるものは無く、けれど失わない。

一人で生きるのは楽だった。

「ご主人様」

「……………ん？」

「お疲れさまです。一息いれませんか？」

すっかりメイド服に馴染んだフィノが、優しい顔で笑いかけていた。

「居間の方に、コーヒーと焼き菓子をご用意しました。あまり根を詰めすぎると、倒れてしまいますよ」

「そうだな。リアンは？」

「リアン様でしたら、お部屋ですつと本を読まれています」

「本？」

フィノと、リーアヒルデこと「リアン」は、半ば物置と化していた屋根裏部屋に身を置いていた。

「リアン様、びっくりするぐらい賢いんですよ。こう……、自分の

周りを取り囲むように本を広げて、何冊も同時に目を通されるんです」

「本当か？ あそこにあるのは――」

ジークハルトは、壁にかかった老人の肖像画を見やった。当たり前だが、相変わらず赤ら顔で、ビールジョッキを片手に笑っているおかしな一枚だ。

「あそこにあるのは、クソジジイが遺していった難解な本ばかりだぜ」

廊下の先、部屋の奥にある小さな食卓で、三人が席についていた。ジークハルトはここ最近になって『マズくないコーヒー』の存在があることを知った。香りの良い、熱を湛えた液体に口づけ、中央にある木製の器にも手を伸ばす。

「ん、美味しい」

「ありがとうございます」

コーヒーを一口。軽い苦味がクッキーの仄かな甘さに、よく合った。

「フィノ、美味しいコーヒーを煎れるコツみたいなのはあるか」

「愛情です」

「そうか」

さっぱり分からなかった。ジークハルトは、やや手持ち無沙汰に「壊れた片眼鏡」を手で転がしていた。

「ご主人様、それは？」

「俺の商売道具だ。この前の――。今は調子が悪いみたいでな」

この前の仕事のせいではないかと、正面を見る。頭には長耳を隠す　>たれく　のついたキャップを被り、職人用の青い作業着ツナギと同色の長ズボンを履いて、下町の少年に扮したエルフの王女がいる。「あぐはぐまぐつ！」

すこぶる行儀が悪かった。

小さな手を往復してクツキーを掴み、頬を膨らませるほどに食ら

う。それと同時に、ぶあつい本のページを捲っていく。

「口と手が器用に動くな」

「そうですねえ、こぼれてますけれど」

フィノが作ったクツキーを齧り、視線はひたすら本の上に釘付けに。口元からは、ぽろぽろと絶えずこぼれ落ちる。

「あつ」

青い作業着ツナギの上に散ったものを、ひょいと指で摘んで、普通に口元へ運んだ。

「おい、コイツは本当に王女なのか？」

「そうですね。可愛いじゃありませんか」

「関係ねえだろ、それ」

「もぐぐ」

「リアン。食うか、読むか、どっちかにしろ」

「！っ……はぐはぐ、はぐぐ……っ！」

ぽろぽろ、ぼろろ。ぱらぱら、ぱらら。

「聞いてねえな」

「無駄ですよ。燃料が切れるまでは」

「燃料？」

ジークハルトが訝しそうに眉をひそめる。と、皿の上に乗ったクツキーが、一つ残らず消えていた。てのひらが、カラカラ、カララつと、空しい音を響かせる。

「……あ、う？」

リアンが指先についた粉を舐めながら、そつと、隣に座るメイドを見た。

「ねー、フィー、お・か・わ・り」

「ダメです」

「おねがいー」

「許しません」

「……うう……」

はらり、と哀しそうに本のページが捲られる。それから今度は、

ジークハルトの手元に視線が移った。手にした片眼鏡に興味があるのか、じーつと手元を覗き込む。

「コレが気になるのか？」

「ご、ごめんなひやいっ！」

「怒ってねえよ、ほら」

言いながら、ジークハルトが手にした片眼鏡を投げた。リアンが慌てて両手を出して受けとめる。と、フィノもまた、隣から覗き込む。

「これ　>アーティファクト<　ですね」

「ああ。俺が昔に、知り合いから譲ってもらったモンだ。レンズ自身が【魔石】で作られていてな。コレを通してアイテムを見れば、俺みたいに魔力の薄い奴でも、対象の【本質】が具現化されて見えるようになる」

説明を聞いていたフィノが、アイテムを見て言った。

「でもこれ、【魔】が感じられませんか。なにか外的な要因を受けたりしました？」

「最近、ちよつとな。やつぱ修理しねえとダメか」

「ええ。レンズ部分の【魔石】は、一度分解して再度【魔】を籠めるか、代用品を用意するしかないと思います」

「付与師が必要か、ヤツらぼったくりやがるからな……」
エンチャンター

それもまた、王城のギルドに勤める鑑定師グイットアハテンと同様の職業だった。
「職人の絶対数が少なえぶん、修理費が高額なんだよなあ」

ジークハルトが愚痴った時に、

「わたし、できう、かも……」

リアンが言った。恐々と、それでもどこか力強く、見つめる。

「この中に入ってるませきに、【魔】をわけてあげればいいんだよね？　この、えつと……。あ、あーひふあくと？？」

しどろもどろ、自信無さげに、泣きそうになりながら、それでも言葉を続けた。

「わたし、できうかも。この絵本に、やり方　書いてあったから」

リアンが手元に広げた、手にした本を閉じる。

「だから、それ、直せると思いまう」

「本当か？ おまえ、工具を使ったことはあんのか」

「……あう、それは……、ないれす……」

「じゃあ無理だな」

リアンの瞳に、じわりと涙が浮かぶ。

隣に座っていたフィノが、柔らかい金髪を撫でた。

「ええつとですね、リアン様。【魔石】に特定の力を込めるのは、すぐく高度な能力が問われるんですよ。しかも、他者が最初に込めたアイテムに【属性】を上書きするのは、とっても難しいんです。
魔都でも付与師と呼ばれる専用の職人が、少数いるぐらいで……」

「……フィーも、信じてくれない？」

「あ、いえ、そのお」

「できるもん」

今度は頬をリスのように膨らませて怒る。フィノが困ったように、ジークハルトを見た。

「リアン、おまえ【属性】を上書きすることができんのか？」

「で、できまう！」

「ただし、バラすのと、組み立てるのは出来ないってか？」

「で、できまへん……」

ワグナーの書物を抱えて悲しそうな顔をする。けれど翠の瞳は、どこか期待と切望にも満ちていた。名前程度しか知れない、エルフの瞳と意思が不思議と胸を打つ。

「意外と面白いかもな」

一級品か、否か。ジークハルトの興味を惹いた。

「リアン、それ持ってついてきな」

「ふえ？」

「タダ飯が食らえるのは今日までだ。この店にいる間は助手として働け。お前もアイテムに興味があるなら、できる限り俺から知識を盗んでみる。どうだ？」

まずは、最初の手ざわりを確かめるように告げる。

対する翠の瞳は、より一層輝いていた。

「あ、あいっ！」

「よし」

立ちあがる。職人は足早に部屋をでた。その後ろを、王女が迷いながらも追いかける。

「……あらあら」

一人残された侍女だけが、くすりと笑う。楽しそうに呟いた。

「では。私もお夕飯の支度をしましょうか」

夜が深まっていた。

店を閉店し、食事と風呂も終え、あとは眠りにつくまえに仕事場の道具を整理する。力を取り戻した片眼鏡モリクルのレンズ周りを、水で湿らせた布切れで拭いていた。だまって瞳に乗せると、ガラス越しにぼんやり揺らぐ、世界の色が見える。

「本当に、直しまいやがったな……」

くくつと笑う。一度、力を吸い込まれてしまった片眼鏡の > アイファクト< は、以前と変わらないどころかその力を増している。

「たいしたもんだ」

【魔】と呼ばれる力に優れていた所以なのか、リアンは確かに付与エンチャ師として優れた才能を持っていた。しかし悲しいまでに不器用で、ネジの一本を外すことすら時間をかけた。アイテムの構造を解説すると一瞬で理解するのだが、それ以外の事に頭が回らない。

「一種の天才ではあるんだろうな」

思ったその時に、すぐ後ろで扉が開いた。

「……あ、あの」

ジークハルトが振りかえる。リアンがいた。

まだ苦手意識が根強く残っているのか、扉にしがみついたままだ。「どうした？」

「……」

扉から身を半分だして、ジークハルトを見ている。昼間に着ていた作業着は脱ぎ、今は絹製の、高価なネグリジェをつけていた。

「まだ、おしごと、してまう？」

「道具の手入れをしてるだけだ。今日はもう寝ろ」

「てつだう？」

「よせ、仕事が増える」

「……う」

落ち込んだその顔を見て、疲れたように付け加える。

「悪かった。ところで、なにか欲しい物は無いか」

「へう？」

「おまえが直した片眼鏡は、貴重なアーティファクトだったからな」

「……あ、あい」

「おかげで金が浮いたんだ。無理な頼みでなけりや聞いてやるから、言ってみろ」

リアンの表情に、ほんのわずか明るい笑みが浮く。おずおずと部屋に入ってきた。

「……あ、あのね……」

控えめに、壁にかかった肖像画を指さした。

その先にあるのは、赤ら顔、親指を立てて笑うワグナーがいた。

「このひとに、あつてみたい」

「……どうしてだ？」

「このひとが、あの本を、書いたんだよね」

「わかるのか」

「なんとなく……。このひと、ジークハルトのおとーさん？」

「やめろ、悪寒がする」

思わず眉間が鋭くなってしまう。

リアンが怯えたように身を引くのを見て、ジークハルトは面倒くさそうに付け足した。

「まあ、師匠と呼べないこともねえな」

「ししょー？」

「教えを請うた相手だ。役に立つことから、くだらないことまで、いろいろな」

「今もこの街にいるの？」

「いや、もう何年もあつてない」

「どうして？」

「死んだんだろ、たぶんな」

言つと、しばらく間が開いた。リアンは少し迷った素振りをしながらも「どうして？」と繰り返してきた。

「ここは『そういう街』だ」

応えたジークハルトの声には、ほんの少しの苛立ちと、それから苦痛が滲んでいた。

「ジジイは冒険者としてこの街にやってきた。それなら、いつ死んだつておかしくねえ。迷宮の中で朽ち果てりゃ、死体だつて見つからないのも珍しくない」

「——ねえ、ジークハルトは……」

リアンが呟いた。初めて名前を呼ばれた。

「この街が、嫌い？」

「嫌いだ」

即座に答えた。

富は一部に集中し、貧困者は命をかけても、その日の飯種を稼ぐのがやっと。中にはエリオットのような例外もいたが、他者を憎く思うよりもまず、この国の有りようそのものが腹正しいと思つていた。だからせめて、ジークハルトは王宮に仕えない。稼ぎが少なくとも、小さな店を続けていることが、言葉無き抵抗だった。

「わたしも、嫌い」

「だろうな」

親族、同類の一族を皆殺しにされた。我欲の詰まった人間に裏切られた。商品として扱われた。そんな境遇にあつて、

「——森は嫌だった」

「森？」

「うん。私は【幹】だったから。ずっとずっと、同じとこにいて、同じ本をずっとずっと読んでたの。外に出してもらえなかった」

「どういうことだ？」

「……ないしょ」

寂しそうに微笑んだ。瞳はうつすら潤んで、一滴だけ、頬を静かに伝いおちていく。

「でもね、だからね。生き残りだって言われても、よく、わかんない」

「そうか」

「——あのね。ジークハルト」

「ジークでいい」

「じゃ、ジーク。お願いしてもいいですか？」

「……なんだ」

少し困惑したように返事をする、リアンはゆっくり、笑みをこぼした。

「わたしの、ししよーになって」

項目11：飴と鞭の比率は3：7。

リアンがジークハルトの店に来て一週間が経った。特にこれとい
って波風も立たず、平穩無事な日常が続いていた。

昼過ぎ、客足が途絶えていた時間に、ジークハルトは随分と冷め
てしまったコーヒーを飲んでいた。

「——まだか、リアン」

「うくつ、ん、ん、んくつ」

机に片肘をつき、酸味の効いたコーヒーを飲んでいる隣で、リア
ンが必死に手を動かす。

「むずかしいでう、ししよくつ！」

「それぐらい、さつさとバラせ。あと、その呼び名やめろ」

「えー」

新緑の如き翠瞳で見上げられると、それ以上は反論する言葉も消
えてしまう。なし崩し的に「手を動かせ」とだけ言うと、今度は素
直に従った。

「むむくつ！」

作業机の上には銀色のトレイが乗っている。精密のネジ回しで、
細かいパーツに分解された、目覚まし時計の部品が並んでいた。

「遅い。おまえ、本当に不器用だな」

「うう……」

リアンはネジ回しを手に、ふらふらと、危うげに外していく。工
具の先についた小さなネジを、トレイの上に持っていこうとした時
だ。

ピンツと机で跳ねて、

「あつ！？」

床の上に落としてしまう。

「おい、無くすなよ」

「あ、あいつ！」

拾いあげようとして頭を突っ込み、今度は「ごすっ！」と派手な音をたてた。ネジを摘んで現れたリアンは涙目だった。

「……おでこ、ぶつけてしまいまひた……」

「なにやってんだ、バカ」

涙目になった、リアンの前髪を持ちあげた。指を近づけ、触れる。

「し、ししょーっ!？」

「痣にもなってるねえ、大げさだな」

「あ、あのっ、ええとっ!」

——カラン、コロン、カララン。

リアンが軽く目を回しているときに、店の扉が開いた。

入って来た客は長身細身の女性だった。獣の毛皮で作られたレザーベストとズボンを身につけ、板金の入った硬質なブーツが床を叩く。右目は眼帯で覆われており、左手は常に、腰元にある長刀の柄に添えられていた。

「久しぶりね、ジグ」

「一つに結いあげた長い黒髪が揺れる。」

「……レティーナ?」

ガタツと椅子が音をあげ、ジークハルトが立ち上がった。そんな様子を楽しむようにして、残された瞳が猫のように細くなる。

「ジグ、最近あなたの顔を見なかったから、野たれ死んだかと思ってたわよ」

「こっちのセリフだ。残念だが、そこそこ上手くいつてるさ」

ジークハルトが席に座りなおすと、レティーナと呼ばれた女性は近づいた。

「相変わらず、副業の仕事を受けてる。って聞くけれど」

「金があつて困るこたあないからな」

「あまり安請け合いしていると、死ぬわよ?」

ふっ、と笑いながら、ジークハルトの向かい側にある椅子を引き、

浅く腰かけた。

「……で、どうした？」

「そのまえに、私も質問したいのだけど」

レティーナが、ややジト目になって、言う。

「ジグ、あなた。いつのまに子供を^{こども}拵えたのよ」

「は？」

レティーナの視線を追ったその先、机の下に隠れたリアンが顔だけ覗かせていた。眼帯をつけていない方の瞳に見つめられると、「ひいっ！」と叫んで、また引っ込んだ。

「すごい美形ね。男の子？ 女の子？」

「うるせえ、勝手に俺の子どもにすんな」

「もう。相変わらずの堅物ねえ。冗談ぐらい流しなさいよ」

にんまり笑ったとき。後ろにある扉が開いた。

「失礼します、飲み物をお持ちしました」

「フイ〜〜っ！」

机の下からリアンが飛び出して、白黒エプロンの裾に、ぎゅむつと抱きつく。

それを見て、レティーナは怪訝そうに、ジークハルトの方を見た。
「……あ、もしかしてそういうこと？ 連れ子の女性に手を出すなんて、いい度胸してんじゃない」

「だから、ちがう。こいつらは事情があって預かってるだけだっ！」

「そうなの、って……」

フィノの顔に注目する。レティーナは何かに気がついたように、目を瞬いた。

「貴女、蒼髪のギルドにいたわね」

「いいえ。私はただのメイドですよ。剣閃レティーナ様」

続けて、レティーナの視線がゆっくりと、腰元にひつつく子供の顔に向けられた。

「そっちの子は……」

「俺の弟子だ。裏路地で食いつぶれてるところを、拾ったんだ」

「弟子？ ジグの？」

「ああ、付与師エンチャンターの素質を秘めてる。ただ、半端なく手先が不器用な
んでな。技を仕込んでる最中だ」

「へえ、ジグが弟子を取るなんてねえ？」

レティーナが、くすつと笑う。

今度こそ楽しそうに、女性らしい含みを込めて、少し意地悪く。

「昔の貴方からは想像できないわね」

「うるせえな。冷やかにきたなら帰れよ」

ジークハルトが、ガシガシと髪をかく。反対の手をだして、つま
らなそうに告げる。

「仕事を持ってきたんだろうが。鑑定物があるなら、さっさとよこ
せ」

「悪いわね、鑑定の依頼じゃないの。でも、ちょうどよかったわ」

「なにがだよ」

「実は、付与師を探してたの。貴方の伝手で、その筋の人間がいる
かしらと思ってね」

レティーナが胸元のベストに手を入れ、ポケットから、てのひら
に乗るサイズの懐中時計ポケットウォッチを取り出した。ジークハルトの瞳が見てわ
かるほどに大きくなる。

「……まだ、持ってたのか」

「懐かしいでしょ」

「少しな、借りていいか」

「ええ」

時計を受けとる。懐から片眼鏡を取りだして乗せた時、

「それ、貴方も持ってたのね」

「大事な商売道具だからな」

言いながら、時刻を合わす「リユーズ」を動かした。

くるりと、二つの針が仲良くまわる。

「どこが悪いのか？ 時刻合わせも問題なくできるみたいだが」

「肝心の【魔】の効果が弱まってるみたいだね。一日で時間もズレ

てくるのよ」

「ってことは、中の【魔石】に問題があるな。一度、バラすぞ？」
「構わないわ」

レティーナが頷いたのと同じく、ジークハルトが振り返った。

「リアン、仕事だぞ。はやく来い」

「あ、あいつ！」

フィノにくつついていたリアンが、慌てて駆けてくる。作業着のポケットから、小さな片眼鏡を取りだして、同じように身につける。

「ふふ、可愛い弟子ね」

「見かけは小せえが、実力はあるぜ。お前からもらった片眼鏡、実はちつとヘマして使い物にならなくなってたが、リアンが【魔】をエンチャント付与して、今は問題なく動作してる」

「へえ、やるわね」

黒の瞳が優しく微笑んだ。ずっと手を泳がせて、たれのついた帽子の上から、リアンの頭をなでる。

「お手並み拝見といくわよ。小さな職人さん」

「あ、あいつ！」

ジークハルトの手に、精密のネジ回しが渡される。

手早く蓋を開いて、刻まれたサインをリアンに見せた。

「職人の名前は、アドルフ・ランゲ。有名な時計職人であると同時に、エンチャント凄腕の付与師でもあった人物だ。この職人が作ったアイテムは冒険者だけでなく、一般人にもコレクターが大勢いる。サインの贋物も多いからな、しっかり覚えとけよ」

「ほ、ほむっ！」

リアンが身を前にだして、サインを見た。ひたすら一心に見つめていると、そこまで見んでいいと、デコが叩かれる。ぴい、と鳥の鳴き声みたいな声をあげて引っ込んだ。

「解説するぞ」

「あい」

「この男が作った時計には【魔石】が込められている。【魔石】は、時計のイメージと呼応して、装備者の速度を高める効果を持つ。影響は微々たるものだが、一瞬の判断が生死を分ける冒険者にとってその効果は大きい」

語って、ジークハルトは懐中時計をバラしていく。まったく危うげなく、細かい部品を、トレイのなかに移していった。

「し、ししょー！　すごいでうっ！」

「やかましい。それより【魔石】の位置を探してみろ」

「うん」

言われた通り、リアンは黙して、時計を見つめ続けた。

「……いちばん、おく。ぐるぐる回ってる、はぐるまに、がちってあたってうトコ」

「テンプ、だ。正しい名称ぐらいは覚えておけよ」

リアンが答えた後も、よどみない手つきで懐中時計の完全分解を進めていく。動力源となるゼンマイを入れた香箱車オーバー・ホールをはじめ、時計の針と連動した二番車、三番車、四番車、そして、速度の伝達と調整を行う心臓部へと辿りつく。

「ここだ」

振り子の原理を持って回転する、テンプと呼ばれる機械の上。隣合わせた歯車の速度をひっかけて調整している『爪先』に、緑色の、極小の【魔石】がはまっていた。

「リアン、この魔石の【属性】が分かるか？」

「んー、【風】かなあ。それに、じかん？」

「正解だ。冒険者からは【時空じくう】と呼ばれてる」

「あら、本当に優秀なのね。さすが、ジグの弟子だわ」

「えへへへへ」

リアンが、てれつと笑う。その額を、ジークハルトが指ではじいた。

「ぼけつとするな。いいか、よく聞けよ」

「はうあう……」

リアンが、おでこを両手で抑え、頷いた。

「ランゲが作る懐中時計は、精巧ではあるものの、基本的には通常のゼンマイ式と変わらない。だが、これに【魔】を込めると話が別だ。ワーグナーのジジイの本を読んだお前なら理解してると思うがな。【魔】には、わずかながら > 質量 < が存在するんだ」

「重さがあるってことだね？」

「そうだ。ジジイの言い分だと、魔術発動の為の【精霊】には重さがあり、【魔】として概念化されたのも同様だって話だ。実際の炎や水に重さがあるように、人間が生みだした【炎】や【水】にも重さがある」

「あい」

「そして【魔石】に属性化された概念を封じた場合、【魔】の効果が増幅されると同時に、質量そのものも大きく増す」

「あい」

こくん、こくん、と首を振るリアンを見て、ジークハルトも一息つく。向かいに座るレティーナは、反対に首を傾げはじめていた。

「つまりだ。歯車の回転にひっきり、回転数を維持している【魔石】の爪先に重さが増せば、どうなると思う？」

「テンプ本体の回転に、ごさがでまう」

「誤差が出ると、起きる弊害は？」

「ひっかける爪先のリズムがズレて、はぐるまの回転も、一緒にズレていきまう」

「そうなる、どうなる？」

「時計の針を乗せた別のはぐるまも、ズレが大きくなりまう。ズレがひどくなったら、時計として、ただしく機能しまへん」

「正解だ」

ジークハルトが手を伸ばす。軽く、帽子のうえに乗せた。

「えへ」

ほんわか喜ぶリアンに向かい、しかしもう一言。

「お前なら、コイツをどう直す？」

「へう？」

リアンが、きょとんと首を傾げた。

「この時計を、自分が作る立場で考えてみる。【魔石】の効果はひとまず考えなくていい。これを時計として正しく使えるようにするには、どうする？」

「ませき、をつかわず、フツの部品をつかいまう」

「不合格だ。もっとよく考えてみる」

「あい」

リアンが、そつと静かに目を伏せる。

その様子を見て、ジークハルトの表情に少し、笑みが浮かんでいた。

しばらく何も言わずに、ただ答えを待った。さして時間もかからず、リアンは翠の瞳を開いて、ジークハルトの顔を嬉しそうに見上げる。

「最初から、増える重さ、質量を考えてつくりまう！」

「正解だ。やることはわかったな？」

「あい！」

リアンが元気よく手をあげる。だが向かいに座るお客は、首を傾げるばかりだった。

「……えーと、どういうことかしら」

「へえ、レティーナは分からなかったのか？」

「うるっさいわね」

隻眼の女剣士が、思いつきり眉をひそめていた。剣呑な気配を滲ませた様子に、リアンが怯えて机の下に隠れようとする。ジークハルトがニヤリとして、その背中を掴みあげた。

「隠れてんじゃねえ。説明してやれ」

「あ、あいつ。えーと、えー……。し、ししょおっ！」

「おまえな。客に説明すんのも大切な仕事だぞ」

「らってっ！っ！」

泣きつくリアンをあしらいながらも、店主はどこか楽しげだった。

「つまり、このアーティファクトはもともと、【魔石】を組み込む予定で考案されてたわけだ。ただし、肝心の【魔石】に力を込めすぎると、テンプレを調整する部分が重くなり、回転数がズレてくる。そうなると時計として使い物にならない。元来の道具が正しく力を発揮しないと、【魔】の概念も発動せず、【魔石】に付与された【速度上昇】の効果も失われる訳だ」

一息つき、すっかり冷めたマグの中身を煽った。

「で、こいつの場合は、長年の使用で【魔石】に封じた概念の付与が薄れてる。歯車を回転させるテンプレ調整部に重さが足りず、勢いがつけられないわけだ」

「いいわよもう。ようするに、修理しないといつか止まってしまいうわけでしょ」

「ま、平たく言えばそうだな」

レティーナの、明朗解決な答えに苦笑する。

「ただし、適当に同じ大きさの【魔石】に変えてもダメだ。込めた【魔】のバランスが正しくなけりゃ、コイツは機能しない」

「はいはい。つまり【魔】と時計の双方に熟知している職人が必要で、ここには、その職人が揃ってるわけでしょう？」

「そういうこつたな」

ジークハルトは言って、分解した部品を集めたトレイを、リアンの前に置いた。

「どうだ、直せそうか」

「あい、できまう」

小さな両手の、小さなひとさし指。

トレイの上に乗った【魔石】をはめた部分に、ちょこんと触れた。すう、と息を吸い込んで、言葉を発する。

『——【精霊】を知る我、命ず。』

摩擦係数を鉄より有し、対象となる道具の強度を上昇。
炎から【炎】を生成する。鉄と化合し熱量を上昇せよ。その数値

は——』

リアンの口からこぼれるのは、複雑怪奇な『呪文』だった。

「ジグ、この子……」

「まあ見てろ」

『——数値の設定が完了。

続けて回転を促す力の象徴を【風】 および媒介とする色は【
翠】 と銘じる。

精神を司る精霊と接続し、化合せよ。

複合条件による言語定義は 【時空】 と称する。

道具は、人に使えるべき物なり。望まれるならば、それに応える
べき物なり——』

リアンの口から、流れる水のように、言葉の奔流が押しよせる。
ジークハルトの片眼鏡越し、様々なイメージを放つ色と光が見え
ていた。

そして小さな指先から、【魔石】の中へと流れ込んでいく力を、
黙って見送っていた。

『以上、ここに定義を決定する。 > 属性付与・再起動 < 』
エンチャント リアクト

呼応する。

翠色の【魔石】のなかに、溢れていた光が吸い込まれた。リアン
は閉ざしていた瞳を開いて、ぱあっと花を咲かせてみせる。

「できまひたっ！」

「よし」

ジークハルトは、部品を乗せたトレイを寄せて、分解した懐中時
計を元の状態に組み合わせていく。それもまた、見る者にとっては
魔法のような手際の良さだ。指先で拾えないほどにバラバラになっ

たパーツが、決められた位置に収まって、元通りに形成する。

「完成だ」

そして最後に、元に戻った時計のゼンマイを巻く。時刻を合わせると、

——カチ、コチ、カチ、コチ。

時計が規則正しく動きだす。さらには、懐中時計の全体から翠色の光が浮かびでた。

「質は保証するぜ。恐らく効果もあがってるはずだ」

「え、ええ……」

レティーナが、まだ驚いた様子で懐中時計を受けとった。時計を耳に添えて、その音色を確かめるような仕草をした後に、

「……懐かしい音が、聞こえる……」

隻眼の施されていない側の瞳を細めて、微笑んだ。

項目12：客人への詮索はやめておくが吉。

リアンの初仕事は大成功に終わった。レティーナが笑顔で「また来るわね」と言つて、満足そうに店を後にした直後、

「リアン、少し留守を頼む」

「へう？」

「表の看板は返しておく。客が来ても適当にあしらつとけ」

「えっ、えっ？」

困惑するリアンの様子には応えず、ジークハルトは急ぎ壁にかけていた上着を羽織り、そのまま駆けるように店を出ていった。

「……………」

その場に残され、所在なさげに、分解の途中だった目覚まし時計を手元によせる。

「続き、しよつかな」

ぽつんと呟いて、ネジ回しを掴んだときだ。廊下につながる扉が静かに開いた。

「失礼します。お茶を――。あら？ リアン様、ご主人様は？」

「おでかけ。るすばん頼むつて」

「そうでしたか」

フィノがやってきて、両手に抱えた盆を作業机の上に置いた。湯気の立つ紅茶のカップを、リアンの前に差し出す。

「ありがと、フィー」

「ふふ。ご主人様の分も作ってきたのですが、冷めてしまいますし、こちらは私がいただいてしましましょうかね」

フィノもまた椅子を引いて座る。甘いミルクの漂う紅茶を一口含んだときに、

「ねえ、フィー」

「なんでしょう」

カップに口付けたまま、上目づかいになって、リアンが何気ない

風に言う。

「レティーナって、どういう人かなあ」

「えっ？」

食器が小さな音を立てた。フィノが少し驚いて正面に座る少女を見つめると、柔らかそうな頬のうえに、ほんのり明るい朱が乗っていた。

「あ、あの、えっとね。ししょー、レティーナを、追いかけてったから……」

もももごと、言葉を口の中で転がすように言ってくる。

フィノが思わず、小さく笑った。

「リアン様、気になるんですか？」

「ちよ、ちよびつと……」

「いやん可愛い」

地の声で反応してしまえば、リアンが言葉にならない小さな悲鳴をあげていた。ごまかすように紅茶を飲んで「あふっ」と舌を出す。そんな所作のひとつひとつが、フィノにとっては可愛らしく映ってしまう。

だからつい、口が軽くなってしまったのかもしれない。

「レティーナ様は、剣閃とも呼ばれる、一流の剣士にして冒険者です。ご主人様とは昔、同じギルドに属していたと聞いてますよ」

「ししょーも、昔は冒険者だったんだよね？」

「ええ」

フィノは紅茶を一口、静かに含んだ。隣に座るリアンが「続きは？」という表情をしていた。

「——私とエリオット様がこの街に訪れたのは、三年前でした。その時には、ジークさんは冒険者を引退されており、すでにこの場所で鑑定士を営まれていました」

「へー、エリオットと、フィーは、ずっとこの街にいたんじゃないんだねー」

「はい。私たちは来訪者です。ジークさんと、レティーナ様はこの

街の出身ですよ」

カップが軽く音を立て、ソーサーの上に置かれる。リアンも聞きかえた。

「じゃあ、レティーナだけ、ずっと同じギルドで冒険者をやったの？」

「いえ、それはですね……」

フィノが困ったような素振りを見せた。少し開きかけた口を閉ざして、逡巡^{しゅんじゅん}するように宣言する。

「あまり、気持ちのよい話ではありませんから」

「いいよ。フィー、教えて」

「リアン様？」

「わたし、ジークハルトのこと、知りたい」

翠の双眸に見据えられ、フィノがほんのわずか、たじろいだ。仮の主従関係であることすら忘れて圧倒される。王族、として生まれた者に共通する、静かな威圧感。

「おしえて、ね？」

「……私も詳細を存じているわけではありません」

「それでもいいよ」

「わかりました。くれぐれも、ジークさんにお尋ねしてはいけませんよ」

「あい」

二人の間に漂う空気が、再び和らぐ。そろってほんの少しの紅茶を口に含んだ。同時に小さな音が重なった。

「当時、お二人が在籍されていたギルドは、今は存在していません」「そうなの？」

「はい。ギルドの代表者を含めたパーティーが、迷宮を探索中に『全滅』してしまい、土地と財産を所有する権利が認められなくなっ
たんです」

「……………え」

カチャン、と大きな音が鳴った。普段は甘くて優しい、野ブドウ

色の瞳が、まっすぐにリアンを貫いていた。「続けますか？」と尋ねられ、リアンは受け入れた。

「——パーティには、当時、十三歳だったジークさんと、レティーナさんも参加されていたそうです。私も、それ以上に詳しいことは存じあげません」

職人街から、目抜き通りへ続く道を歩いていた。言葉は少なかったが、何気なく交わす視線や、整えられた石畳を歩く足音でさえ、互いがもつとも最適とする間合いを保っていた。

時が経てど、忘れられないものがあつた。

人の流れがうねっていても、最小限の動きでそれらを避け、すぐに元の立ち位置へと体が戻る。息をするように覚えていた。

懐かしいな、と。

雑踏の中を歩き、ジークハルトは思う。レティーナの左手もまた、常に長刀の柄に添えられているし、右手の指は、常に暖めておかんとするように泳いでいる。

彼女のベストの内には、過去に自分が贈った【魔】を込めた懐中時計が収まっているはずだった。自分も同様に、【魔】を込めた短刀と、片眼鏡を忍ばせている。

「——ジグは、変わったわね」

「ん？」

前を見つめながら、レティーナが告げてきた。

「随分と優しくなったわ」

「どうだかな」

同じように応える。互いの顔は見ない。

「なったわよ。貴方は、自分の知識を誰かに教える人間じゃなかったもの」

ジークハルトの記憶よりも艶のある、それでいて、柔らかな微笑が返ってくる。

「もう、冒険者に戻るつもりは無いのね」

「無いな」

「残念。実は少しだけ、期待してたのに」

「ウソつけ」

間髪いれず応えると、また、楽しそうに笑われた。

「悪態にも、切れがなくなってるわよ」

言われてしまい、苦そうな顔をする。短い茶の短髪をかいて歩いた。眼帯のない左目と、懐かしそうに笑う横顔を見てしまえば軽口も叩けない。

二人は目抜き通りを越え、やや細い路地の方へ歩いていった。

街の雰囲気は一変し、なにかしら武装している者達が、暗い色の瞳を向けてくる。すれ違う度に、わずかな緊張感を覚えながら進むことになる。

「この街の、この場所だけは、いつになっても変わらないわね」

「……変えようとしている奴が、一人いるがな」

いつも厄介事を持ちこむ男の顔を思いだせば、隣に立つレティーナもまた、ふふつと笑っていた。

「数日まえだったかしら。おまえも森の探索に参加しないかって、わざわざ『蒼髪』が出向いてきたわ」

「ご苦労なこつたな」

「蒼髪が来たのは、いつだったかしら」

「三年前だな」

他の冒険者と同様、エリオットは数人の女性を連れて街にやってきた。

翌年には、卓越した戦闘能力から『蒼の剣聖』などと呼ばれるまでになり、さらには王城の政治に食い込んでいた。一体どんな詐術を使ったのかと、噂の種が途切れない男であったが、実際、普段はどこか飄々としている癖に、いざという時の立ち振る舞いや所作には、妙に高貴な振る舞いを見せていた。

「知ってると思うけど。蒼髪は、滅びた国の王族だ、なんて噂も

あるぐらいよ」

「実際聞いたら、想像にお任せするとか抜かしやがったがな」

「不思議な男よね」

「なに考えてるか、知れたもんじゃねえ」

あれだけ出世すれば、もうジークハルトの店に顔をだす必要もないだろうに、足しげく訪れては、厄介な仕事を持ちかけてくる。一度は冗談で「この国の王になるつもりかよ」と問いかければ、エリオットは「まさか」と両肩を竦めた後で言った。

『——俺たちは根無し草だったからな。帰る家が欲しいだけなんだ。そして、この街には同じような境遇の連中が多いだろ？ だから、できる限り広くて、住み心地の良い家を作りたいと思うわけだ。その為にも、力が必要だ』

エリオットの根底にある想いは、正直、ジークハルトには理解しがたい。

仮に実現したところで重荷となるだろう。生きていくなら一人がいい。背負うものが少ないことが、この街では賢明な生き方だと身を持って知っている。

「ジグ」

「なんだ？」

「力、って、どういうものかしら」

レティーナが立ち止まっていた。わずかに行き過ぎたジークハルトは、彼女の方へと振りかえる。薄暗い路地裏で視線が交わった。

「蒼髪の問いよ。あいつは、大切な者を守るべき手段。と言ったわ」

人の流れはちょうど途絶えていた。

「不思議よね。あの男だって、それなりの地獄を見てきたのでしょうに。それでもバカみたいに、御伽噺の勇者みたいな事を語るんだもの……。ねえ？」

チキッ、と。

刀が鳴る。

「ジグ、あなたは、現実が分かっているでしょう?」

答えねば、斬る。とても言うような気配を醸す。

豹変した昔馴染みの態度にも、ジークハルトは特に表情を変えなかった。そして目つきは相変わらず険しい。

「……そうだな」

思考することは、経験を、過去を蘇らせることに等しかった。

もっとも最初に浮かんだのは、小汚いスリの小僧だ。

「最初は、エサを食い、奪う手段だった」

「私たちと出会う前ね」

頷いた。即席のパーティに参加させられて罫付きの財宝を漁りまくっていた。けれど転機が訪れた。ややお人よしの人間に拾われてギルドと呼ばれる組織に所属した。毎日のように顔を合わせる大人たちは気が良かったし、優れた剣の腕を持つ、同じ年の少女もいた。気まぐれに、初めて贈り物をした。

「力があれば、金があれば、自分を満たして、たまには、相手を満たしてやることもできると知った」

「そうね、嬉しかったわ」

けれども平穏は続かなかった。ギルドが崩壊し、根こそぎ奪われていったとき、

「今度は、なにをするにも、金が必要であると知ったな」

「同感だわ」

器用にしか過ぎない手には、崩壊した日常を止めることはできなかった。

学が至らなかったのだ。日々、命を懸けて迷宮に潜るしかない。

それでも、どこかで情というものを信じており、金を持ち逃げした相手を許しかけた瞬間に、腹へと刃が突き刺さり、消えぬ傷を負ったのだ。

「……力は手段だ。持つことで、相手を殺して奪うことができる」

「ええ、私も殺したわ。殺しまくったわ。犯され、蹴られ、隙を見た夜にも、ね」

口元が自嘲するように歪み、剣先が抜かれていた。

その一閃は貫かず、かろうじて喉に添えられるに留まった。

「ね、ジグ」

剣先が薄皮一枚、触れて切る。

「過去、貴方の驕りが、私の人生を狂わせたことを覚えているわよね？」

喉から血が垂れる。あとほんの少し手を伸ばせば、それが致命傷になりかねない。しかし動かず、瞳を逸らさず応じた。

「街へ引き返そうと言う、お前の両親の言葉を俺が切ったな。迷宮の奥にあつた財宝に、仕掛けがあることに気づけなかった」

しん、とした気配だけが、魂を刻むようにおとずれる。

「たくさんの【魔物】に囲まれたわね」

「ああ」

「私は片目を失って、気がついたら貴方の背に負われてた」

「ああ」

「貴方は安っぽい言葉を吐いたわね。生涯をかけて償うとか、なんとか」

「言ったな。俺は何も知らない、単なるガキだったよ。酒場で妙なジジイに会ってから、そいつを知った」

ジークハルトは静かに、彼女に向かって言葉をかけた。

「結局のところ、力つてのは生きる手段だ。正しく生きようが、汚く生きようが、形は違えど、差は無えよ」

「素敵な答えね。今すぐに貴方を殺してやりたい」

「悪いが断る」

「あら、どうして？」

「生きてるんでな。残念なことによ」

極めて真面目な顔で言えば、レティーナは声をあげて笑った。

「それ、反則。貴方ってば、本当に優しくなりすぎよ」

「そうか」

「あー、もう。だったら、あの時の言葉は、今でもまだ有効なんで

しょうねえ？」

「有効だ」

「バカ」

剣先が翻り、鞘の中へ閉ざす。一滴の赤い血が伝う様子を見て、レティーナは柔らかに微笑んだ。

「貸しよ。今日だけは許してあげる」

「助かる」

「——レティーナ様？」

物騒な会合を終えたとき、不意に、後ろから声がした。ジークハルトが振りかえると、そこには顔立ちの整った、十歳を半ばに超えた程だろっ少女がいた。

「ロゼ、どうしたの」

「いえ、あの、庭で作業をしていたら、声が聞こえたような気がして」

「迎えに来てくれたのね」

「はい」

素直に頷いた横目で、ジークハルトのことを見上げる。

「レティーナ様の、お知り合いの方ですか？」

「そうだな、そっちは……」

「私のギルドの子よ。貴方の弟子と一緒に、身寄りがないらしいから引き取ったのよ」

レティーナが言葉を挟んだ。その声は優しく、明るい。

「両親のギルドを買い戻したの。蒼髪のギルドにも少しだけ、借を作ったけどね」

「……そう、だったのか」

「他にも何人か身寄りのない子供たちを預かってるわ。いつかの誰かを思い出して、気がついたら声をかけちゃったのよ」

パチッと瞼を閉じて、ロゼと呼んだ少女の隣に立つ。頭の上にそっと手を乗せると、少し照れたように、くすぐったそうに笑った。

「お前は変わってねえな」

「本当にね」

力強く、告げた。

「蒼髪が言ってた森の探索に付き合ってもよかったんだけどね。長い間『家』を空けるのも不安な気がして、それに、久々に貴方の顔も見たくなったから」

笑みを向けられて、ジークハルトもまた笑い返していた。

秘めた想いを、隠し切れないというように。

「良かったら、寄ってく？」

「いや、今日はいい。ウチの店番はまだまだ半人前なんだな」

「そうね。しっかり指導してあげなさい。また今度、店に寄らせてもらうから」

「ああ、そうしてくれ」

笑い声が二つぶん、静かに、どこか幸せそうに重なった。

「さよなら、ジグ」

「またな」

二人は別れた。

互いの家に帰るために。再び、それぞれの道を歩きだす。

項目13：店の主と、お客様。

職人街の奥にある鑑定士の店に、一通の訃報が届いた。

黒い上着を掴み、そういえば、あの日もこれを着ていたことを思い出していた。

「ジークさん、そろそろ時間です」

声に振りかえると、いつもと違う格好の女性が見えた。落ちついた野ブドウ色の髪だけが光を反射する。彼女もまた黒一色の喪服を着ており、唇の赤いルージュも相まって、妙に艶かしい。

「今日はメイドじゃないんだな」

「ええ」

「悪い。冗談だ」

ジークハルトが袖を通したとき、廊下に繋がる扉が開いた。ふらふらした足取りで、リアンがやってくる。

「……ししょ、フィ〜？」

「リアン様」

「どこか行くの〜？」

寝惚けているのか、ふわっと欠伸をする。ジークハルトが近づき、屈んで手を伸ばした。

「今日は閉店だ。上で寝てろ」

「ふえ？」

短い金の髪を乱暴になでる。リアンは頭を振りながらも、どこか嬉しそうに撫でられていた。

「いいか、怪しい奴が着ても扉を開けるなよ。二階でおとなしく、本でも読んでろ」

「あい〜」

背を向ける。それから外を見て「雨か」とつぶやいた。傘を手にして店をでる。反対の手には招待状と、壊れた懐中時計が握られていた。

その報告を聞いた時、正確な内容は、あっさり抜けていった。時間をかけて、どうにか、断片的に理解した。

自分のギルドの仲間を守るために、死んだこと。

生き残った仲間が、彼女の亡骸を運んだこと。

ギルドの主は、すべての最終決定と、責任を負うこと。

むかし、彼女の両親はそれを実行し、彼女もまた同じ道を選び抜いたこと。

牧師が十字を切った。

レティーナの名前を口にしたら、その音を、ぼんやり聞いていた。

小雨の降る早朝。街外れの墓地で、冷たい風が流れる。

冒険者の葬儀が行われることは珍しい部類に入る。大抵は朽ちた骨と化して、迷宮に転がることになるからだ。死体を持ち帰られることになっても、窯の中で焼かれ、細くなった骨をそのまま河中へ流されることも多い。

だから、たとえ少なくとも、名を彫られた墓前に人々が集い、一人の人間の死を嘆くことは大変に稀だった。

ここは、そういう街だった。

生も死も、気品はあらず。

昨日、当たり前のように挨拶を交わした知人が、次の日には息絶えていた。姿を見なくなったら。服だけが見つかった。そんな話を聞くのは珍しいことでは無い。

黒い集団から少し離れ、枯れた大樹の幹に背を預ける。手の内には、粉々に破壊された懐中時計が存在する。針は止まっていた。

『———という風の吹き回しかしらね？』

忘れた。どうしてこんな物を渡したんだったか。

頭から、つま先まで。感覚が無い。

傘は閉ざしている。たぶん、ずぶ濡れになっている。

『ねえ、この前のお礼なんだけど。よかったら、』

棘のついた棒で殴られるような感触がきた。胸が痛んだ。

朝からなにも食べていないのに、吐き気を催した。喉がカラカラに枯れている。

いっそ、上着に隠した短剣で、喉を切り裂いてしまおうか。

『どうして、私を守ってくれなかったの。ウソツキ』

思い出す。なのに、時計はもう動かない。

針を巻き戻すことは叶わない。

『ジグ、貴方は根本的なところで、冒険者には向いてないんだと思う』

彼女を守ってやりたかった。少しでも危険から遠ざけてやりたかったのに。

ふざけるな。

『あなたは賢くて、慎重で、実は臆病だったりする。つまり、優しいすぎるのよね』

ふざけるな、ふざけるな。

『平穩に生きるべきだわ。たとえば、そうね。店でも開いてみたら？』

ふざけるな、ふざけるな、ふざけるなッ！

『また今度、あなたの店に寄らせてもらうから』

「……なにもッ！」

できなかつた。

壊れ、止まってしまった時計は、二度と動きはしなかつた。

眠れば昔の夢にひき戻されて、起きれば明日がやってきた。

「……………あ？」

頭が揺れた。世界は闇の中だった。少しずつ目が覚めて、ああ、真夜中なのかと、ひとりで馬鹿みたいに呟いた。

「……喉が渴いたな」

酒の匂いがした。気分が悪くなるほどではないが、それでもいつもより多く飲んだせいかな、額が軽く痛んだ。胸焼けがひどい。

「……………水」

ギツ、と音を立て、ベッドから起きあがる。食卓に供えてある清水を求めて、一階へ降りていく。途中、店の表に繋がる扉の先から、灯りがこぼれているのを見つけた。

カチャカチャと、小さな音が聞こえてくる。

進むか、無視するか、戻るか。

考えても無駄に頭が痛くなるだけという風に、不機嫌な顔のまま、部屋に入る。

「リアン」

「あつ」

短い金髪が、さらつと揺れた。白い手に精密のネジ回しを持っている。夜なので、薄いシャツと、淡い色のショートパンツを履いているだけの格好だ。

「なにしてんだ、おまえ」

「ご、ごめんなひやい！」

リアンが手元に散らばった部品を隠そうとする。無視して近づくと、作業机の上には、完膚なきまでに、粉々に砕けた懐中時計があった。残された想いの品はパーツ単位で歪みが生じ、折れ曲がっている。

「直せうかなと、思ってた……」

「無理だ」

向かいの客用の椅子を引いて座った。それぞれ椅子の高さの違いから、二人の頭の位置は同じところになる。しゅん、と萎れた顔を眺めて、くくつと笑う。

「直せるわけないだろ」

「……あい」

「コイツはもう無理だ。ひとつの時計を、最初から作るのと変わんねえよ」

乾いた笑みが広がった。ひたすらに、どこまでも、波のように広がった。

「……俺が守るとか、どのツラ下げて言いやがったんだか……」
力を抜いて天井を見あげる。視界が揺れた。

「リアン、フィノはどうした？」

「ふえ？ ギルドに帰ったよ。おぼえてない？」

「そうか……。エリオットが帰ってきたんだっただな」

早朝の葬儀の最中、古い知人が亡くなった代わりに、森の探索に出かけていたエリオットが生還した。当初の契約通り、フィノと王女を自らのギルドへ連れて帰ろうとしたが、

「おまえ、どうして、フィノと一緒に帰らなかったんだ？」

「もう少し、ここに、いたかった、から……」

「こんなところに居てどうすんだ」

「……もっと、色々教えて欲しい、でう……」

翡翠の瞳に、涙が溜まって、こぼれ落ちていった。

小さな手の甲でぐしぐしと涙をぬぐう。

「なんで、おまえが泣くんだよ」

「……わ、かんない、でう……っ」

ぐすつ、ぐすつと、こぼれる嗚咽を、ただ黙って聞いていた。

椅子に座ったまま、その頭に、思わず手を乗せてやろうとして気がついた。

——また、重荷を増やすのか？ 一人が生きやすいんだろう？

伸ばした手が止まる。

盗賊の力は、誰かを守れるほど、強くない。

「帰れ、リアン」

「なんでっ！」

「迷惑なんだ。おまえはもう、精霊の泉の権限を持つ、唯一の生き証人だ。つまり本音を言えば、死んで欲しいって連中がわんさかいんだよ。いつかこの店にも、おまえの命を狙うヤツが来るかもしれない」

すうつと、リアンの瞳から光が消えていく。

ただ放心したように、ジークハルトを見つめる。

「めいわく……？ わたし」

命を狙われることよりも、そっちの方がこらえるというふうに、言う。

「わたし、ここにいたら……、ジークに、めいわくかけう……？」

返す言葉に詰まった。心が弱っていたせいかもしれない。酒も少し残っていたこともあるのか。ともかくその時、自分を慕ってくる存在を斬り捨てることができずにいた。

「……俺は、一人が気楽なんだよ」

代わりに、とことん情けない言葉が口をついた。

そんな安っぽい言葉で、愛らしい、一途な子供が納得するはずもなかった。

「じゃ、じゃま、しないからっ！」

むしる勢いづいた。

「ご、ごはん、つくりまう！ お洗濯とか、フィーの代わりにするからっ！ こーひーもいれまうっ！ だからっ、だからっ……！」

拾ってください、拾ってくださいっ！

どこぞの捨て犬だか、捨て猫だかが、必死にきゃんきゃん吠えてくる。

「……あのな、少しぐらい王女のプライドとか無いのか」

「そんなものっ、お金になりまへんっ！！」

しかも変なところだけ飼い主に似てきた。ジークハルトが「はあ」

と最大級のため息をこぼして、作業机の上に散らばる懐中時計の残骸を見やった。

「卒業試験にするか」

「へう？」

「ボロクズになったコイツを一から組み立て直せ」

「えっ、えっ、えっ？」

「おまえは俺の弟子なんだろ、リアン」

「——っ！」

今度こそ目の前の頭に手を添えた。添えてしまった。これで後戻りができないな、という想いはあったが、それでも自然と笑っていた。薄汚い生まれの盗賊だって、光を求めてはいけない、なんて理由もない。

「し、ししょー……」

「なんだ」

「……笑ってまう」

「うつせえ」

「にやつ！」

身を乗りだし、細い髪の毛を掴んでぐしゃぐしゃ回す。リアンが声をあげて笑う。ジークハルトもまた笑った。その後で、翠の両眼に溜まった涙を、指の腹で拭ってやる。

「リアン」

「……あ、いつ！」

「時計の部品を扱ってる職人の工房と、『魔石』を専門に売買してる知り合いを紹介してやる。俺がここまで金にならない仕事をするなんざ滅多に無いぜ。だからやれ、いいな？」

「うんっ！」

柔らかそうな頬の上を、もうひとつ涙が零れていく。笑顔が満開になった。

「わああ……いつ!!」

「うおわっ!？」

両手を伸ばす。机を乗り越えて、飛び込むように抱きついた。ジークハルトは椅子に深く座っていたせいで逃げられず、咄嗟に全身で抱きとめる。椅子の足が浮き上がり、二人一緒に後ろへ倒れ込んだ。

「だいすきっ！」

時は、なり。

翌朝に、さつそく事件は起きた。

二階にあがって眠りなおし、ふたたび目を覚ました時だった。

「……ん？」

焦げた匂いが鼻をついた。二日酔いに痛む頭を抑えつつ台所へ降りると、白いエプロンといつもの帽子を被ったリアンがいた。

「ういやぁーっ！」

気合い一閃。

手元から、ぐおおっ！と紅い炎が燃え上がる。フライパンに蓋を落とせば、隙間から黒い煙がもうもうあがった。

「なにやってんだ……」

「あつ、ししょー、おはようございまうっ！」

「状況を説明しろ」

ジークハルトが睨みつけると、リアンが嬉々として言ってきた。

「朝ごはん、作ってまう！」

「メシ……？」

「あい！ ししょーのは、先に作っておきまひたっ！」

それです、それっ。とばかりに指さした食卓の上。

消し炭となったトースト、焦げたウインナー、ブラック目玉焼き。唯一に瑞々しいのは、まっぷたつにされ、じわぁ……と、汁を垂れながす、トマト。

「コレを食えってか」

「あい！」

断言された。迷った末に、ジークハルトは消し炭トーストを口に運んだ。

「……………」

予想通り、いや、それ以上に悲惨な味だ。

消し炭特有の苦さと、妙な甘さが、口の中で絶妙にブレンドする。

これは砂糖か。大さじ何杯振りかけたよ。口の中でゴリゴリするぞ。甘え――。

もはや顔面が歪むのを通り超えて硬直しかける。その口元を手で覆いかくす。正面には、なにかを期待する瞳があった。

「ど、どーでうか？」

おい。マジか。これを褒めろつてのか。

おまえは俺に、この食物を練成した成果を、褒めて認めると要求すんのかっ!？

葛藤。

「……………食べなくは、無い」

「えへ」

精一杯の譲歩だった。後は容赦しない。

「どけ。料理は俺が作る。おまえはそこで見てろ」

ジークハルトはヘラを取り、黒こげになった玉子を退けた。新しく二つを割って、フライパンに落とす。塩とコショウを少量に振って、手早く丸め、オムレツを作っていく。

翠の瞳がキラキラ輝いた。

「すごいでう! ししょーは、お料理もできるんだあ!」

「お前よりはな」

―― 本日は晴天なり。

最初、店に訪れた客は、朝食を終えて一時間ほど経った頃だ。特有の鈴の音が鳴って、店内に大男と小男のペアが踏み入る。

「兄さんよ、また来させてもらったぜ」

「ん、まだ生きてたか」

「そいつあご挨拶だな、おい」

二人の仕草は変わらず粗野なものだったが、その表情は、旧来の知人に会ったかのように和やかだった。

「今日はこいつを見せに来たんだ」

「おっ」

ジークハルトは一見ただけで、小さな感嘆の声をあげていた。
淡く金色に輝く宝石のブローチだ。さっそく片眼鏡をつけてみれば、
輝きは増していた。

「どうだ。今回は真正銘、中層の途中で発見したもんだ」

「当たりだな。質の良い【魔石】を加工した細工だ。職人の名も予想がつくぜ」

「一目見ただけでかよ」

「まあな。ただ、見たところ、本来の力が若干薄れてはいるようだがな」

「あー、兄さんよ。そりゃ、付与師の修理が必要かい？」

「鑑定ついでに直していくか？」

「へ？」

二人の表情が、そろって間が抜けた風になる。

その言葉が意味するところは、付与師がそれだけ稀有な存在ということだった。ジークハルトが振りかえると、扉の先に、びくびくと怯えたリアンがいる。

「……………兄さんよ、あんたの子か？　ちいせえなあ」

「違——」

「ちいさうないっ！　お子さまでもないんでうーっ！」

突然大声を出して、リアンが否定する。

「リアンは、ジークの弟子だもんっ！」

ぶんぶん怒って、大股でやってくる。どかっと、高い位置に置かれた椅子に座り、乱暴にブローチを取りあげる。

「お、おい嬢ちゃん！」

「嬢ちゃんじゃありません！　リアンでうっ！」

キッと睨んだ翠色の瞳には、存外鋭い瞳の色が浮かんでいた。

王女オーラを発散させて、そして一言「簡単っ」と告げてから、

【魔】を唱えた。

二人の職人が、一つ屋根の下で暮らした。自由エル鑑定士だけでなく、

貴重な付与土の子供も現れて、しかも兩人ともに腕が良い。噂は少しずつ広まって、客足は伸び、店で働く時間は増えていた。忙しい日々だったが、ジークハルトにとっては平穏な「日常」だった。やがて、咲き乱れていた花が枯れ落ち、雨季に入る。

その日は、連日の雨で客足が途絶えていた。早々に店を閉め、二人の職人は作業機で手を動かしていた。

「ししょー、油とって」

「ほらよ」

機械油を渡す。精密に計算された、真新しい時計の部品へ抽送される。

「いけそうか？」

「あい、大丈夫でう」

「それにしても、リアン、随分と器用になったな」

「ししょーのおかげ」

垂れのついた帽子の下から、嬉しそうに、ほころぶ顔がある。

組立作業は終わり、リアンが金色の懐中時計の蓋を閉めた。色の薄い、クリーム色の掌が、久しぶりに大きく震えているのを見る。

「動かして、いいい？」

「ああ」

片眼鏡をつけたジークハルトのしている隣で、リアンがゆっくり、懐中時計のリユーズを巻く。針が回って時刻をさした。

——カチ、コチ、カチ、コチ。

鳴った。響く針音が小さな店内にこだました。片眼鏡を嵌めた二人の瞳には、時計から漂う【魔】の気配が、うつすら見えている。

「……でき、た？」

「よくやったな」

リアンの頭に、ジークハルトの掌が乗せられた。短く切り揃えていた金髪は、今では首を隠すぐらいまでに伸びている。

「合格だ、付与された魔術も問題ないみたいだな」

「あいつ！」

「こんだけ出来りゃ、魔具専用の職人を名乗っても、問題ねえな」

「にゃあ！ めずらしく褒められたあーっ！」

「うわーいと、両手をあげる。そしてすぐ、なにかに気がついたように真顔になった。

「ししょー、もしかして、遠まわしに出ていけって言ってる？」

「は？ なんでだ」

「だって、これ卒業試験でしょ。完成しちゃったら……」

不安そうに見あげてきた。初めて顔を合わせてから数ヶ月の間に、身長の違いはぐらぐら縮まっていた。リアンの服装は相変わらず青い作業着だったが、胸がわずかに膨らんでいたりして、もう少年に見えるのは難しい。

「安心しろ、今日、明日に追い出すような真似はしねえよ」

「ほ、ほんろ？」

「本当だ。っていうかおまえ……。相変わらず、妙に訛るよな」

「あい、なおりまへんっ！」

外の雨はいくらも弱くなってきたらしい。心地よい雨の音を聞きながら、屋根裏にある自分の部屋、ベッドの上で、リアンは幸せそうに転がっていた。

「えへ、えへへ、えへへへ」

ほぼ一から修復した懐中時計の針音を聞きながら、足をパタパタ泳がせる。「それはおまえが持っている」と言われた時計の表面を撫でたり、キスをしたり、胸に抱いたりしながら転がっていた。

「わたし、認められたんだあ……」

どうしても、顔が綻んでしまう。嬉しい、嬉しいなっ、と言って転がっていると、

「はーっ！？」

ベッドから落ちた。それでも「にへへ……」と笑ってしまうのだ

から、もう末期だった。起きあがり、カチ、コチ、と、針が刻む音を耳にする。

「うれしいな……」

自分が作り上げた時計を、リアンはじつと見つめていた。満面の笑みだった顔は、次第に穏やかなものから、少し辛そうな感じへ移る。

「……レティーナ。キレーな、ヒトだったなあ……」

一度だけ、顔を合わせたことのある女性は美しかった。

心情を明かさない店主が、彼女の墓前にいる間はいつにも増して無言になった。何をするにも手際のいい男が、花を添えて立ち去るまでの時間は、ただ、長かった。

トクベツな、ヒトだったんだよね。

わたしの知らない、ジークハルトを知ってるんだよね。

ぎゅつと。時計を抱いた。

針音よりもゆっくり進んでいた心臓の音が、同じぐらいになり、早くなり。

「胸が痛いよ……」

頬は赤く、早鐘のように急いた。

自分の髪を撫でてくれた掌と言葉を思い出す。

それは温かったけれど、きつと、特別というには至らない。

「わたしは、お客さんと同じなのかな……」

レティーナのギルドに所属していた子供たちは、時折この店に訪れた。ジークハルトは料金を取らなかつたし、また「こいつはお節介だが」などと言って、詳しい助言を述べたりもした。さらにエリオットと、そのギルドもまた、残った子供達の支援を続けた。

そうして少なくとも、子供らが今すぐ路頭に迷うことは無くなつた。

陽が落ちれば、無事に帰れる家が残ったのだ。

「レティーナって、すごいな」

死してなお、彼女の意志は生きている。

「生も死も、さして気品はあらず……」

魔都の現状をあらわす、その言葉。けれど彼女の意味は、死した後も気高く在った。意思を引き継いだ者が生きてゆけば、この先、さらに変化が生じるかもしれない。

それは、未来へ続く道だ。より良き可能性だ。

「……変わりたい……」

ふと窓を見る。夜の窓に映ったリアンの顔は、美しくもあり、幼くもあつた。

エルフは長寿の種族だ。深い森のなかに住んでいるせいで、時間の流れに無頓着なところがある。けれどこの時ばかりは、ひどくもどかしくて、仕方が無いような顔になる。

今すぐに、この想いが冷めてしまわぬうちに。

「……もう少しでいい」

すうと夜気を吸いこんだ。暖かな吐息に変えて零した。

「お願い、あのヒトの近くに在りたいの……」

呼応する。

精神を司る精霊と、大気の精霊が結びつく。

『——其の概念を【時空】と定義。具現化^{イメージ}を喚起するは黄金、光の色』

想像上の【属性】が生成される。物理法則と呼ばれる概念自体が、意志を持つ。

概念が質量を手に入れる。この世界で【魔】と呼ばれる力に置き換わる。

リアンは命じた。

『——時空を知る我、命ず。時の流れを【加速】せよ』

魔術の完成。発動する。

リアンの内にある【魔】を代償として、時計の内側にある【魔石】へと結びつく。

> 時計< というアイテムが持つイメージと、ヒトが願う > 意志< が接続する。

道具は応じる。術者の、担い手の願いを叶えるべく。

力が蓄えられるまで、 > 概念質量< を一途に増した。

> エンチャント 属性付与・オーバードライブ 限界突破 <

発動した【魔】は加速する。

時計の針が狂ったように、ひたすら回る。回り続ける。

「……っ」

キンツと甲高い音。針が振りきれた。想いの力が、古代の理論と法則の壁を超越する。

限定的な空間のみ、光の速度を上回る。

【時空】を歪め、新しき概念に則り、世界が変わる。

「——ッッ!!」

声にならない悲鳴が千切れ跳ぶ。

リアンは、じたばた手足を動かして、もがいていた。

「ん、ん、んうううううううーっ!」

高く澄み切った声。二回り小さくなった服が、とても窮屈で仕方なかったのだ。

「はうううう……」

とりあえず、服をすべて脱いでみた。いつのまにか外の雨は止んでおり、窓からこもれる月明かりが、彼女の体を照らしていた。

「成功したっかい?」

卵の殻をやぶったばかりの雛のように、リアンは危うげに立ちあがった。

深い森のなかでも輝きそうな、まばゆい金髪が引きあげられる。スラリと伸びた華奢な背中を覆いつくすほどに長い。

「服、先に脱いでればよかったあ」

リアンは脱ぎ捨てたネグリジェに一瞥くれた。いつもの、伸縮に乏しい革の作業着であれば、膨らんだ胸がつぶれていたかもしれない。それから静かに手元を見る。

「……時計、また壊れちゃった」

ほっそりした五指と繋がった掌には、ついさっき修復したばかりの懐中時計があつた。しかし針は三つとも吹き飛び、根元の部分も不安定に揺れていた。おそらく中の歯車も焼け焦げて、ショートしているだろう。

「ごめんね。またすぐに直しまう」

静かに、ベッドの側にある棚へと乗せた。

空いた手を自分の胸に乗せ、小さく息をこぼす。

「おみず、のまなきや……」

今でも彼女のことを「リアン様」と呼んでくれる、たった一人の従者がいる。その彼女が店に訪れたときに、必ず置いていつてくれる【水】を。

「【魔】が、たりない」

求めるものは一階の居間、二人で食事をする部屋に置かれている。どこか虚ろに彷徨いながら。部屋から出ようとした。

「……………」

扉のノブを掴み、なにかを想って引きかえす。ベッドのシーツを剥ぎ取って、くるくる身体に巻きつけて。

頬にたっぷり朱を乗せて。リアンは部屋を後にした。

ジークハルトは薄手のシャツとスポンに着替え、二階にある自室の椅子に座っていた。机には古い書物が広がっており、その内容に目を通していく。

すべてに理解は及ばなかったが、ある程度予測のつく箇所は、別の羊皮紙に羽ペンを走らせる。びっしりと、紙面に隙間なく文字が覆われたところで一息ついた。

「こんなもんだな、そろそろ寝るか」

ペンをインク壺に置いた。ジークハルトを淡く照らすのは、机の端に置かれた【火の属性】を揺らめかせる燭台だ。それが不意に、大きく左右に揺れ動いた。

「ん？」

ふと天井を見上げる。階段を降りてくる足音が聞こえる。

「リアンか。喉でも渴いたのか」

安易にそう呟いて。本を閉じ、目を閉ざしてから燭代の【火】を吹き消した。闇に目を慣らしておくのは、もはや馴染んだ習慣だった。その直後に、

『ジーク』

扉の先から声がした。

『……ねえ、入っても、いい？』

「どうした？」

少しの間。躊躇するように、ゆっくり扉が開いた。

現れたのは、南西の森に住んでいた、エルフ族の生き残り。

「……リアン？」

「うん」

美姫、リーアヒルデ王女だった。絶世の美貌が、薄いベッドシートだけを身体に巻きつけて、歩を進めてくる。さすがに驚き、目を見開いた。椅子から立ちあがる。

ジークハルトの胸元に届くかといった程度の背丈が、今は、さほど変わらないところまで伸びていた。

「——ジーク」

妖艶に。女の気配を漂わせ、微笑んだ。

両手を伸ばす。しなやかな、柔らかい肢体を持って抱きついた。

「おまえ、その身体どうし、」

「抱いてください、な」

言葉の途中で、唇を重ねてきた。揺れる。ベッドの中に落ちていく。

「ん……っ」

身体を申しわけない程度に覆っていたシーツが、そつと床に落ちていく。

「ばっ、離せっ！」

ジークハルトが抵抗する。抱きつくも、所詮は女の細腕だった。両の手首は抑えられ、成熟した身体は逆に倒される。ギシツと音を立ててベッドが軋む。

職人の頬に、姫君の細い五指が添えられる。

「……して、くれる？」

「ッ！　なんだかよく分かんがっ、とりあえず服を着ろっ！」

「やだあ……」

蕩けたような声がきた。

甘い、ミルクをたっぷり孕んだ紅茶のような裸体から、目を逸らした瞬間だった。

リーアヒルデが枷から外れ、もう一度、抱きついた。

「喉が渴いたの。ジークが欲しい」

背中に両手を回し、朱色に染まった頬が寄せられる。暗がりの中で、金の髪と、翠の瞳もまた淡く照る。

「おまえ、【魔】が尽きかけてるだろっ、ひとまず落ちついて、水を――」

「わかってる。でも、貴方がいい。ジークハルトじゃないと欲しくない」

大人の女性の中に、ワガママな子供の声が混じる。身体が重なって、果実のように膨らんだ乳房が押し当てられた。唇が触れる寸でのところ、息さえ届く間近で告げる。

「ずっと、ずっと一緒にいて……」

嗚咽が混じる。

「もう、一人はやだ。一人きりでいるのは寂しいの」

姫君の全身は、ゆっくりと、職人のもとへ沈んでいった。

「私は、貴方に抱きしめてほしい。貴方は、私に、生きる手段を与

えてくれたから」

「……バカが」

互いの全身が小刻みに震える。両手の中に受けとめる。

「おまえ、俺なんかのどこがいいんだ」

「……………え？」

潤んだ眼差しが持ちあがる。ぱち、ぱちと、瞬きする。

相対する職人の顔にも赤味が差した。なにか急に、ものすごい失言を吐いたような気がしたという様子。その気持ちは、同じ屋根の下で、一つの季節を過ごしただけの間柄でも通じたらしい。

「えへへへへ」

「笑うな」

苛立つように、強く抱きしめる。

ここまで生きて、手にしてきた力で、強く、強く。

今度こそ、離してしまわないように。

損益分岐点。

フィノ・ニーベルンが、自らのギルドを出たのは昼前だった。手にバスケットを持って、鼻歌を奏でるような軽やかさで門をくぐった。

「ふふつ。久々に一日、お休みが取れました」

大通りから職人街へ。

「リアン様、お元気にされていますかねえ。立派な淑女になられる日が楽しみです」

なじんだ道のりを歩きながら、金髪翠瞳の少女に思いを寄せた。最初こそ、世界のすべてに怯えたように、自分の足下にくつついていたのに。少女の視線は、日毎に職人の手先へ、職人自身へと移っていった。

そして、エリオットが森から帰還した日。折りしもジークハルトの旧友である、レティーナの葬儀が重なった。

「あの時は……。折れてしまったかと、心配しましたが」

次第に、その影も薄れているようだった。そこにはきっと、少し風変わりな、一途なエルフの存在があったに違いない。

「本当に、季節がひとつ移ろうだけで、ヒトは変わるものなんですよ」

良い意味で、生命は変わる。

支えとなる目標がひとつ増えるだけでも、ぜんぜん、変わってくる。

フィノは、自然と足取りが軽くなっていくのを感じていた。

「まあ、正直なところを言えば口惜しいな—と思うのも、ありますけれど」

身近な男性に、大事な妹を取られた、といったような感じだ——。とは言っても、まさかそのとおりに「手を出している」はずも無からう。

リアンの方は、明らかに異性への好意として相手を見ているが、ジークハルトは彼女のことを「優秀な弟子」ぐらいにしか見ていない。失った恋人への喪失感を埋め合わせるには、リアンは幼すぎる。「あと何年かしたら、どうなるか分かりませんけどねー」

いざ、その時を考えると、勝手ながらも嬉しいような、悲しいような気持ちになった。もしかすると「ダメですよ、結婚なんて早いですよ」ぐらい言うかもしれない。

「うーん、言っちゃいそうですねー」

誰がなんと言おうと、リアンはフィノにとって、大事な大事な妹分だ。

もやもやと思いながら。気がつけば、鑑定士の店まで辿りついていた。久しぶりにメイド服を着てきたので、どんな反応をされるか楽しみだ。

——カラン、コロン、カララン。

「こんにちは」

耳慣れた鈴の音を聞きながら、店の扉を抜けた。

「バカかおまえは！ そんな格好でこっちに入ってくるなっ！！」

店内に入った途端に、いきなり店主の罵声が飛んできた。一瞬、メイド姿の自分のことを言われたのかと思ったが。

「だってだって！ 着る服がないんだもんっ！」

廊下に繋がる扉から、慌てて羽織っただけの、白い長袖のシャツ。男物である。

その下には何も身につけていない、金髪翠瞳の美女が顔を覗かせていた。二人の視線が同時に、メイドの格好をしたこちらに向けられる。

「……フィノ？」

「フィー！」

店主の男は、いくらか驚いた顔で。後ろにいた美女は、ぱーっと

明るい笑顔になっていた。

「フィー、ひさしぶ……、はわわわわわっー!？」
うつ伏せに、盛大にすっ転んだ。

「リ、リアン、様……?」

フィノは反射的に、その天然ドジっぷりこそ、彼女がエルフの王女リーアヒルデであると悟った。膝上で中途半端にひっかかっていた、桃色のパンツも見覚えがある。彼女に買い与えたものであったから。

――間。

「……………ご主人様、いえ、ジークさん?」

にっこり。

「ちょあつと、よろしい”ですよね”？」

フィノが、ジークハルトの方を見る。

曇り一点すら存在しない、完璧な微笑。

カツンと一歩近づくと、場末の鑑定士はとつさに一歩身を引いた。

『――【闇】を知る我、命ず。>冥界に住まいし黒狼の牙。我が手に生ぜよ<』

呼应する。

フィノの両手に、唐草で編んだバスケットが床に落ち、中身が僅かにこぼれる。

気に留めず、感情のない紫の瞳を宿し、現れた黒鋼の手甲を店主に向けた。鋭く尖った牙は、触れさえすれば、何者をも噛み千切つてしまえそうである。

「……ジークハルト・ワグナー様。簡潔に、かつ明確な説明を希望します。言い訳は不要です」

「わかった。わかったから、落ちついてくれ、たのむ」

じり、じり、じりつと、メイドと鑑定士との距離が縮まっていく。

「だ、だめでうつ！　だ……ふみやうつ！」

「お前は引っ込んでろ！　話がややこしくなるっ！　あと、下になにか履けッ！」

「ジークさんッ！　どこ触ってるんですかアアッ！」

かくして、三すくみの闘いが小一時間ほど、小さな店内で繰り広げられていた。

屋根裏部屋にて、フィノは、己の主を問い詰めていた。

「もう一度お聞きしますよ。リアン様っ！」

「……」ふいつ。

姫君がベッドの端に腰をかけ、正面に立つメイドから視線を逸らす。

「リアン様っ、本当に、ほんとおゝに、ご自身から望んだんですねっ！　ジーク様から強引に迫られたんじゃないんですねっ！」

「……」こくん。

「だからって、【時空】の秘術を用いるなんて無茶苦茶ですっ！　本当にもう！」

素直にうなづく王女に対しても、メイドは腕組みして叱りつける。少し目を離していた隙に、大きく見目の変わってしまった主に対して、なんとも同じことを繰り返かえしていた。

「いいですか、リアン様っ！　私が貴女をここに置いてギルドに帰ったのは、私が別の用件も抱えていて多忙であったこともあります。が、なにより、貴女の成長になると思ったからでして——」

「……さい」

「え？」

ぼそつと言った。耳の先まで真っ赤に染まっている。ぷるぷると、

両肩を小刻みに振るわせて、彼女は告げる。

「フィー、うるさい。わたし、どうして怒られなきゃいけないの？」
「は、はい？」

上目づかいに、細い眉を曲げる。

どこか煩わしそうに、リーアヒルデが、フィノに告げた。

「わたし、もう子供じゃない。身体だっておつきくなったし、ジークハルトの役にもたってるよ。わたしにアイテムの修理や、付与を頼みに来るお客さんだって増えてるんだから」

「リ、リアン様あつ！」

王女が拗ねたように唇をとがらせる。言われたメイドは、紫色の瞳を大きく見開いて、正直に「がーん」とショックを受けた顔をする。

「リアン様が反抗期だ……」

「ちがうもん。わたし、もう大人だもんっ！ ジークと結婚だつてできるんだから！」

「結婚ですって！？ だめですよっ！ リアン様は身体が大きくなっただけ！ 体は大人で頭脳は【ちみっこ】ですよっ！ 結婚だなんて、この私が絶対に許しませんっ！！」

「なんでフィーの許可がいるのっ！ おかしいよっ、フィーのバカっ！」

「そういうことをおっしゃっている間は、お子様なんですーっ！」
「子供じゃないって言ってるの……っ！」

きやあきやあと、姫君とメイドが言い争っていると、どすどすと階段を駆けあがってくる音が響いた。叩きつけるように扉が開く。

「うるせえ！ 商売中だ！ 静かにしろッ！」

朝から起きた騒動は、フィノがリーアヒルデを連れて帰ったところで収まった。身支度の洋服や、その他、何から何までを買わないと気が済まないようだった。

尾根の向こうに陽が沈み、今夜は星がよく見えた。ぼっかり浮か

ぶ満月が、世界を薄く照らしている。

「そろそろ店を閉じるか」

表に出て、入り口の扉にかけたプレートを裏に返す。

「よお、ジーク。話は聞かせてもらったぞ」

「……エリオット」

短い蒼髪を揺らして、片手をあげる二枚目の男がいた。いつものように黒一色、そろそろ暑苦しいだろうロングコートを着て、腰元にも変わらず飾り気のない長剣を覗かせる。

「結婚式には呼べよ」

いきなりそう言った。脇に抱えていた紙袋の口を持ち、掲げる。

「久々に酒でも飲もうじゃないか」

「……………」

ジークハルトは無言で、店に戻らんとする。

「おいおい、せめて一言ぐらいあってもいいだろう」

「閉店だ」

「そう無下にするな」

「閉店だ」

「レアな年代のヴィンテージワインと、ツマミを持ってきたんだ。少しぐらい付き合えよ」

結局のところ、押しに負けて、ジークハルトは店内に戻っていた。食事をする居間の机の上、波々と、二つのグラスの中に赤いワインが注がれる。

「さて、乾杯するか」

「しねえよ」

厭そうに眉を寄せ、ジークハルトは一息に煽る。空になったグラスの中へ、机の上に乗った高級ワインを傾け注いでいく。傍らに広げられた燻製肉も噛みちぎるように食らった。

「少しは遠慮しろ。高いんだぞ」

「知るか、俺にとっちゃタダ酒だ」

エリオットが「まったく」とか言いながら、こちらはワインの匂いを嗅いだ後に、ごく少量を口付けた。優雅にワインを楽しむ男に苛立ちながら言葉を投げる。

「リアンはどうしてる」

「おっ、やはり気になるか？」

「うるせえ」

つまらなそうに言つてのけると、エリオットは、一口サイズに切られたチーズを摘みながら、どこか楽しげに言葉を返す。

「安心しろ。うちのギルドにいる女たちが面倒を見ているはずだ。俺が夕方に城から戻ったときには、すでに着せ替えショーが開催されていた。状況を聞きたいか？」

「興味ねえよ。それよりアイツ、フィノとは上手くやれてんのか？」
「あれはまあ、仲がいいことの裏返しだな。そして俺はというと、まったくもって蚊帳の外なのさ……」

エリオットがしみじみ言う。ワインをさらに一口。

「ドレスを作る布が足りんから買つてこいだの、着飾るアクセサリが無いから宝石店に予約してこいだの、ついでに調味料が切れたから一瓶買ってきてだの、便利に使われる始末だ。拳句には『そこに立つてると邪魔だから、どこか行つててください』と言われるんだな、これが……」

もう一口ぶん傾けてから、突っ伏した。

「俺だつて、頑張ってるんだ、頑張ってるんだよ……」

「相変わらず酔うのはえーな」

「酔ってない。お父さんは頑張ってるのだ！」

「うぜえ」

素直に吐きこぼしてから、高級なワインを水のように煽った。エリオットはふたたび背筋を伸ばし、やはり優雅にグラスを揺らすも、ペースは速い。

「おい、無理すんなよ」

「無理などしてないっ！ 酒は俺を裏切らないっ！」

「デメエ、吐いたら叩きだすぞ」

睨んでから、ジークハルトもまた一息にワインを煽った。

「それより、森の探索の結果はどうなったんだ」

「それも難しいな。『精霊の泉』は発見したんだが……」

エリオットが苦い顔をして、深刻そうに漏らした。考え込むように口元へ指を添え、思案げな表情を浮かべる。

「予想通り、泉の水には魔力を奪う【逆転】属性——呪いが、付与されていた」

「解いたんだろ、てめえの力でよ」

「まあな。村にも【転移】の属性を施しておいたから、大型の【魔石】があれば、エルフの里まで一瞬で移動できるようになった。【水】を持ち運ぶのも容易だ」

「それで、なんか問題があんのかよ」

「あるんだ」

エリオットが頷いた。

「【逆転】の呪いは解いたが、肝心の泉に含まれた【魔】が思っていた以上に薄い」

「……どういうことだ？」

「今までエルフ族と取引していた > 精霊の霊薬 < よりも、大きく効果が落ちている」

「他に源泉があるんじゃないかねえのか？」

「いや、間違っではないない」

エリオットは言い切った。そして酒を煽る。

「……あれでは、研究で練成された安物の効果しか期待できない。それだから大々的に泉の発見を街には伝えてないし、まだ流通もできていない。だから、だな……」

言葉を区切り、エリオットが言いにくそうに発した。

「俺たちは、泉に呪いをかけた術者の存在を見つけ出さねばならぬ」

「そいつが真相を知ってるから、ってか？」

「……たぶんな」

ふら、ふらと左右に軽く揺れながら、今度はちびり、と口付けた。
「だが、それが見つからないときた」

「捕らえたドレスの女は？」

「拷問官がやり過ぎて、口を割らせるまえに死んだと聞かされた」
「うさんくせえな」

ジークハルトが、ハツ、と笑い捨てる。

「城にいるどうかの奴が、一枚噛んでやがるだろ」

「恐らくな、実は見当もついている。その男が今日になって言ってきた」

「なにをだ？」

エリオットが琥珀色の液体を一息で煽り、飲み乾した。最高に重々しいため息を漏らす。

「エルフの里を壊滅させたのは、あるいは、リーアヒルデ王女かも知れん、とな」

「……ふざけんな」

机の上に拳が落とされる。グラスが音を立てて机にこぼれた。

ジークハルトが、瞳を激怒の色に細める。

「あのアホが、んな事するわけねえだろうがっ！」

「だが、そろそろ話を聞く必要があるだろう。街の経済にも関わっているのだからな」

「エリオット、てめえ」

「睨まれても答えは変わらんぞ、ジーク」

殺気に近い覇気を向けられても、エリオットは平然としていた。

むしろ口元を歪ませて、ほろ酔い加減を楽しんでいるようですらある。くくつと笑い、緑色の瓶を大きく傾け、互いのグラスに赤い液体を注いでいく。ワインはそれで空になった。

「おまえが、そこまで感情をむき出しにするとはな」

「つるせえ」

最後は一気に飲みほした。顔がわずかに赤くなったのを見ても

振りをして、エリオットもグラスを傾ける。

「リーアヒルデは王城の連中には変わらず、ニーベルンのギルドで預かっていると通している」

たん、と空いたグラスが鳴る。

「しかし、さすがに連れてこいと言う意見が大半を占めてきた。正直、真っ向から反論もできんところだ。これ以上匿っていれば、俺たちのギルドが、エルフの王女を手籠めにして、泉の権利を独占するのだという総意になりかねん」

悪いが、俺にも守るべきものがあつて。

そこには優先順位も存在する。エリオットは言つた後で、席を立つた。

「二日後、また来る。答えを出しておいてくれ」

一人、ジークハルトは暗くなった店内にいた。作業机のある表に戻り、天井にかかった明かりをつける。

リアンの力を持っても、巻き戻すことも、止めることも適わない。

死んだ人間が蘇らないように、世界を刻む時だけは戻せない。

「さあ、どうする？」

残り二日で金と道具をかき集めて、二人で街から逃げ出そうか。いや、そんな面倒なこととはしなくていいのかと考えなおす。

「リアンを見捨てるのなら」

所詮は行きずりの関係に近い。短くも楽しい時間だったと思ひさえすれば、自分はこの場でなんの問題もなく生きてゆける。人肌が恋しくなれば商館にでも通つて、適当な女を抱けばいい。店主と客という間柄はとても気安くやりやすい。

掌が、腹を貫いた傷痕を抑えていた。あの日以来に定めた生き方は自分の性にあっていると思つていた。

「……なあ、ワグナのクソジジイ」

壁にかかった、赤ら顔の肖像画を見て、ジークハルトは呟いた。

「デメエは、どうして、俺なんかに声をかけたんだ」

なんの関係も、接点も無かった。

ナイフを振るい、血肉と、それを得るための金を求めていた少年に声をかけたのは、その老人だけだった。

『——ワシは、強欲じゃったからのう』

いつものように、酒場で飯を食らいつつそう言った。

『誰にも知恵を授けることなく、そのまま、逝けばよいと思っておった』

だが、不意に怖くなったと言った。

暗い地の底から這いずり出てきたような、死に瀕した少年と出会ったときに。

『似てると思った。ワシは知恵だけ重ねてきたが、その本質は五十歳も下のガキンちよと、大差ないのだと知ってしもうた。このガキンちよが、五十年後にワシのようになるのかと思うたら、なんかない、救えんなーとか、思うてなー』

安酒の入った酒瓶をあり、ふえふえふえ、と笑った。ジークハルトの皿から肉を取りあげようとしたので、とりあえず殴った。

『手加減せい！ えー、だからのー、結局のところ自己満足じゃよ。今までは自分の為に、ひたすら知恵を積み重ねてきた。そして最後に、その知恵を五十歳も下の小僧にさずけてやった。そんなところぢゃわい』

ぐっ、と親指を立て、もう少し言葉を続けた。

『——よきものは、より、よきものになる、その義務がある。ワシは思っておるよ』

カラカラと笑って。

『やはり、ワシはこの街が好きかもしれん。生きとりゃ、また会おう』

いきなりそう言って、そしていなくなった。以来、二度と姿を見ない。

ただ、それで繋がりが切れたのだと思ったら甘かった。今までは、

店主と客の間柄でしか無かった酒場のオヤジが、ジークハルトに向けて一通の封筒を差し出した。

「あのジイさんから、おまえにだ」

開けば、入っていたのは小さな鍵と、土地の権利書と、何故か得意げに親指を立てた、赤ら顔の肖像画。

『ゲイルフリート・ワーグナー・ツヴァイ より、ジークハルトへ』

つらつらと、土地の譲渡に関連する細かい事柄が、長文に分けて記されていた。ジークハルトは必死に目を通し、どうにか理解した。

『——ようするに、ワシの養子になりや、ここの土地をやるぞい』
用紙の一番下、空欄になっているところにサインした。

瞬間に、野良犬だった少年は「ジークハルト・ワーグナー」という称号と、帰る家を得た。一人、からっぽの門戸を潜った時に、ここに店を開こうと思った。

むかし、見捨ててしまった少女が、その生き方が似合うと教えてくれたから。どんなに金が欲しくても、もらった片眼鏡だけは手放せなかった。

「結局のところ、俺は……。なにひとつ、自分で決断して来なかったな」

誰かに救われ生きてきた。もしくは流されるように。

「俺は所詮、たいしたことのない場末の鑑定士だ。けどよ」

今は自分の限界を、ある程度知っている。

故にこつこつと、わずかな水滴が、石に穴を穿つようになるまで歯を食いしばった。

一件も客が入らない日も珍しくは無かったから、盗賊まがいの仕事も兼業して食い扶持を稼いだ。しかし同時に、そんな自分が口惜しくてたまらなかった。そこから連れ出してくれた【光】が、
「リアン」

変わるかもしれない、と思う。

変わりたい、と思う。

「今度こそ」

己の意思を貫き通そう。

生も死も気品はあらず。魔都の代名詞であるその言葉。
ジークハルトは両手の拳を握りしめる。

「二日もいらねえよ」

ある種の商談

翌日の朝。ジークハルトは、ギルド『ニーベルンの指輪』の門を潜っていた。正面玄関であるロビーには、ギルドの主である男と何故かメイド服を着たベテランの女冒険者がおり、同時に振りかえってきた。

「あら、ジークさん。おはようございます」

「どうした、おまえが自分から来るとは珍しいな……うぐっ……」

昨日の酒が残っているのか、少し顔色の悪い蒼髪はこめかみを抑え、メイドの格好をした受付嬢から頭痛薬を受け取った。

「エリオット様、お酒弱いんですから。無茶をなさらないでくださいね」

「……いや、大丈夫だ。フィノ、悪いが水を持ってきてくれないか」

「はいはい」

メイドが、ぱたぱたと廊下に向かって歩いていく。それと入れ替わって、

「——ジークっ！」

野うさぎのように、一目散に跳んできた美姫に抱きつかれた。

「どしたのっ！　もしかして、迎えにきてくれまった？」

「違う。それに半日会わなかったただけだろうが、はしゃぐな」

「えへへへへ」

数日前には、色気なんぞとは無縁の格好をしていた蛹たぬが、一足飛びに羽化していた。長く伸びすぎていた金髪は、肩の後ろで綺麗に切り揃えられている。シンプルではあるが、これからの夏に合いそうな素朴なワンピーススカートも似合っていた。それから最も気になったのが、

「リーア、おまえ、その耳どうした」

「あう、これ？」

紫色の、小さなダイヤ型のイヤリング。一見すればすぐに分かる

はずの長耳が、今は人と変わらぬように見える。

「フィーからもらったの。【幻惑】の属性が付与されてるから、ジークの持つてる片眼鏡なんかでじーっと見られない限りは、エルフだつてバレまへん」

「なるほどな」

ジークハルトが裸眼で意識を集中しても、映る光景に変化は生じなかった。相当に純度の高い【魔石】に、リーアヒルデが直に付与エンチャントしているのだろう。

ルーインの都には、多種多様な種族が集まってくる。ハーフエルフなど見ないわけではないが、それでもやはりエルフは目立つ。

身に危険が及ぶ可能性があるために、できる限り目立たないほうがいいのは当然だ。当然だが――

「ふえ。ジーク、どうしたの？」

「なんでもない」

「えっ？」

「ぱち、ぱち、と。」

長い睫が瞬きするだけで、視界に映されるだけで目立つ。顔を背ければ、厭な感じに笑う男女がいた。いやいや、これはこれは、うんうん。等と頷かれる。

「ふはは。俺はいま、実に貴重な光景を見たぞ、なあ、フィノ」

「はい。なんというか、とても微笑ましい感じでしたね。主にジークさんが。正直、今でも口惜しいところではありますが、これならこれでまあよいものですね」

「……おまえら」

片手がひくつと動き、ズボンの隠しポケットにある、スローイング・ナイフを掴みそうになる。

「ジ、ジークっ、わたしなにか変かな？ お洋服似合っていない？」

「やっぱり、ヘン？」

「違いますよ、姫君。貴女のお姿があまりにもお美しいので、そちらの職人は――」

「死んどけ」

ナイフが飛んだ。エリオットが軽く身を横にするついでに、二本の指で柄を掴む。投げかえす。同じように掴み返す。

「おまえは腕が良いが、短気なところは何年経っても変わらん」

「デメエも、あんまりぼんやりしてると次は刺すぜ」

ナイフを再びしまう。

「エリオット、空いてる時間はあるか」

「仕事熱心だな、まったく。フィノ、悪いが他のメンバーには朝食は先にとるよう言っておいてくれ」

「かしこまりました」

侍女が恭しく礼をする横を、エリオットが通りぬけていく。その背を追うジークハルトを留める手があった。

「ジ、ジーク、えと……」

「あとで呼ぶ。悪いがおまえにも、少し話を聞かせてもらおうと思う」

ギルド『ニーベルンの指輪』の二階奥。

机が一つあるだけの応接間に入るなり、エリオットが告げてきた。

「さて貴重な家族の団欒を壊してくれた貴様の用事とは、一体どんなものかな」

「リアンはデメエらにはやらねえよ。俺の店に連れて帰る」

「ふむ」

エリオットが片肘をついて、どこかけだるそうに反応する。対するジークハルトもまた、椅子に座して相手を睨みつける。

「ジーク、姫君を連れて逃げるつもりか？」

「いや、この街で暮らすつもりだ。変わらず、『鑑定』と『付与』を基軸にな」

「それは……。王女の居所を知っていながら、あえて見逃しておいてくれ。とかふざけた事を抜かすつもりか？」

「そんなところだな」

「斬るぞ貴様」

しばらく間があり、

「――失礼します」

フィノが盆の上に水を乗せて入ってきた。もう一度、失礼しますと告げて出ていった。エリオットがグラスを手にとり、水を含む。

「……………おい、ジーク」

「なんだ」

「他に、なにか言うことはないのか？」

「ねえよ」

「そうか。貴様は本当に頭が良いな」

ため息がこぼれる。二人ぶん重なっていた。先に言葉を放ったのはジークハルトだった。

「今でも、正直なところわからねえんだが」

「なにがだ？」

「他人の命を、どうして必要以上に構ってんだか。俺自身、わからねえ」

「そこは適当に考えておけ。男は逆立ちしても、女には適わんものだ……………」

ふーっと、どこか哀愁を込めた二枚目の横顔が、朝日に染みっていた。

コイツも苦勞してんなと思いつつ、ジークハルトは机に両手をついた。

「……………どっかの王女が言ってたな。プライドなんか、金になんねーつてよ」

「ああ、まったく持ってならんぞ」

エリオットの捨てセリフと共に、ジークハルトが、頭を深く落としていた。

「頼む。俺一人の力じゃ足りない。リアンを、助けてくれ」

「……………なにを、どう、助けてくれと言っている？」

「テメエ、言ってただろうが。王城の連中で犯人の目星がついてるつてよ」

「まあそうだが。とはいえ、王城に引き渡せば姫君が暗殺されると思っているわけじゃないだろ？ 余計な事に口を突っこまなければ、幸せかどうかはともかく、それなりの生活も保障されるんじゃないか？」

「どうだかな」

ジークハルトが顔をあげた。椅子に背を預ける姿勢に戻り、言葉を繋いだ。

「エルフ族が管理する『精霊の泉』の存在は、秘中の秘だと昔に聞いた」

「しかし俺たちが見つけたぞ。【魔】を奪う呪いも、俺が解いた」

「だが、力が足りないと言っただろ。本来の【魔】を蓄積する力が、ひどく弱まってるとな」

「……」

間が生まれた。今度はいくらか長かった。

ジークハルトは、迷わず言い切る。

「精霊の泉、その存在が秘中の秘、じゃねえ。泉に含まれる【魔】の力を保つ術こそ、それなんじゃねえのか。その鍵は、リアンが唱えた > 時間転移< の秘術にあるはずだ」

グラスに入った水。保たれた質量を見やる。

「リアンは数年の時間を、アーティファクトの時計と、相応の【魔石】を代償にして飛び越えた。仮に > 時間転移< の上限がなければ、何百年、何千年もの時を越えることができるハズだ」

「…………… かもしれない、な」

水が、ゆらゆら揺れていた。

「なあ、エリオット…… > 時間転移< を対象の泉に付与すれば、泉の【時間】を巻き戻して、資源が最大級だった頃に復元してやれるんじゃないか。その場合、小さな【魔石】やアーティファクト程度だと、触媒としちゃ、これっぽっちも足りねえが……」

【魔】は、精霊を媒介にして発動する。

自然界の精霊と、術者の体内に眠る【魔】を、言霊コトダマに乗せて接続リンク

して。

対象を知ること、具現化^{イメージ}が実現する。概念の本質が変化、あるいは実体化する。

ワグナーの言葉が、ジークハルトの中に蘇る。

「——エルフは日常的に、精霊の泉を、生活用に取り入れておるのだと言われとる。

故に、その体に秘めし【魔】の力は強大で、消耗が激しく、彼らは森を離れない——」

つまり彼らは、太古の水をよく【知っていた】。

それからリーアヒルデは、ジークハルトが知るどんな付与師^{エンチャンター}よりも、高度な付与術を身につけていた。難解な本を読み解くのも異常に早かった。

そして、とことん不器用だった。

森の中で暮らすエルフの種族は、獲物を追うため弓を用いる。日常的に樹を削るだろう種族だ。

見目も麗しく、指先は細い。程度の差はあれど、手先は器用であるはずなのに。

リーアヒルデは、著しく不器用だった。けれど指導をすれば季節がひとつ変わる間に、精密な時計を一つ直してみせた。

「あいつは、リーアヒルデは、そういう風に育てられたんだろ。世界が限定されたエルフのなかでも、さらに隔離されてな」

自己の無い生き方。他者と言葉を交わさず、書物のみから知識を得る。

その時の為だけに生かされてきた。大事に、貴重に、保管されて、それはまるで、

「道具^{アイテム}だ」

鑑定士は確信する。

道具の本質とは、どのような物であれど、根っこに通ずる部分は同じだ。

それは、人のために存在する。

「一つ聞くぞ。エルフのルーツってのは、この国の人間じゃねえのか？」

「……本当に、おまえは良い目を持っているな。ジーク」

エリオットは頷いた。そして、静かに告げていく。

「詳細は古すぎて、伝える物も失われて久しいがな。おそらくは、この地方の初代王族に仕えていた、魔術師の一団だ。エルフの王族を担っていた魔術師もまた、もともと【魔】に優れた者だったらしい」

「詳しいじゃねえか。情報源はどこだ」

「そいつは言えん。まあ、城に踏み入る機会があればこそ、だな」
一つ笑ってから続ける。

「彼らは言うなれば、この国の生贄ニエでもあった。最も優れた者が秘術を用いて、泉の水を【魔】に満ちあふれた、古代のものへと還元する。その時に触媒となるのは術者であり、長寿なエルフ族の生命時間くそのものだ」

生も死も、気品はあらず。

それは長い時間をかけて、いつしか冒険者に贈る言葉へ変わっていた。

「つまり、リアンが犠牲になれば、俺たちは今まで通りに貴重なアイテムが得られるわけだな？」

「そうだ」

エリオットが頷いた。この街は、同じことを繰り返してきたのだと。

たった一人の命を犠牲にして、多くの命を救ってきたのだと。

「……クソジジイが言ってたぜ」

「うん？」

「変化を望まないのは、息をしないことに等しいってな」

「そうか。なら、おまえはどうする？」

「決まってる」

ジークハルトは望んできた。

常に、生き抜くための手段として、力を望んできた。

「——よきものは、より、よきものになる、その義務がある。これもクソジジイの言葉だ。リアンはまだまだ伸びる。犠牲になる必要なんざ最初からねえ。あいつは『生きる』ことで大勢の人間を助けることができるだろうよ。俺はその手を惜しまねえつもりだ」

「く、くくつ……、はははははっ！」

エリオットが声をあげて笑った。楽しそうに、同感だよと言うように声をあげる。

「——いい覚悟だな、ジーク！ 熱心なお前に仕事をくれてやろう！」

素早く立ちあがる。取りだした羊皮紙に羽ペンで荒く書きつけたぐしゃりと掴み、投げつけるように放った一枚を、ジークハルトは片手で受け止めた。広げる。

「相変わらず適当なこと書きやがるな。クソ野郎」

依頼者： 【匿名ヲ希望スル】

依頼対象： ジークハルト・ワーグナー

依頼内容： 精霊の泉、その源泉に【呪い】を施した術者の

発見。

対象と接触し、意図した事柄を尋ねよ。状況によつては排除せよ。

追伸： 生きて帰ってこい。姫君を泣かせなくてはならぬ。
な。

そして、この街を、より、よきものへとするた
めに。

意思決定——【COMMIT】；

翌日、エリオットは王城へと立ち寄っていた。

「——本日は、皆様にお知らせしたいことがあります」

石畳の会議室の間にて、深々と頭を垂れる。訝しげに見つめられる中で、とりわけ何処か嬉しげに、最初に嫌味を言ってきたのは白い瞳をした、屈強なる騎士隊長だった。

「蒼毛の。貴様、なにかしでかしたのか」

「ええ、まったく申しわけありません、レンデル隊長」

「黙れ。発言を許してはいない。本来ならば、この場に冒険者風情が顔を並べているだけでも、許されんことなのだ」

エリオットは黙って、さらに深く頭を下げた。だから、その顔に笑みが浮かんでいたことは何者にも知れなかった。

「それで、なにをやらかしたんだ、貴様」

「実はですね、リーアヒルデ王女が攫われてしまいました」

「……………は？」

張り詰めていた場の空気が、ぽかんと、間が抜けたような具合になる。

「詳細を聞こうか、エリオットよ」

ただ一人、上座の席に座る、この城の主だけが問うてきた。

「はっ、嚴重にリーアヒルデ王女の身柄をお預かりしておりましたが、どうも、その御身を狙っている気配がありまして。日夜問わず、我がギルドに賊の気配があり、昨夜ついに不覚を——」

「……………貴様、王女が、攫われた、だと……………!？」

エリオットの言葉を区切るようにして、憤怒の形相でレンデルが距離を詰め寄ってくる。吊るした長剣に手を添え、今にも抜き払わんという勢いだった。

「何処だッ!? 王女は何処へ行つたアッ!?」

「さあ? 攫つたのは賊ですからね。私を知るはずありません」

「つぎけるなアアッ!!」

空気が振動した。

なかには悲鳴をあげて、席から立ち上がった老人もいたが、エリオットだけは態度を変えない。わざとらしく考える素振りをして言っただけだ。

「まあ、いいではありませんか。これで、泉の権利は我らがもの。そうでしょう?」

事態が動き出すまで、一日とかならなかった。

ギルド・ニーベルンの地下。床も壁も分厚いレンガで覆われた部屋の中央に、装飾の乏しい台座が置かれている。その上に、何の支えもなく空中を漂う【魔石】がある。周辺には、この世界の【魔】が輝いていた。

「——エリオット様、他の団員より【声】が届きました。レンデル隊長が動いたそうです」

「ようやく痺れを切らしたか」

主であるエリオットと、両耳に手を添えて、ここより離れたところから聞こえてくる【声】を伝えるフィノがいた。その向かい側には、ジークハルトとリーアヒルデも並んでいる。

「いくらか側近の者を連れて、城の『転移室』より、南西の森に【転移】したとのことだ」

「わかった。ジーク、支度をしておいでくれ。こちら森への【転移】は準備が整っている」

「今回は、俺が動けばいいんだろ?」

「悪いな。共謀者となった城の連中を縛りあげた後、すぐにそっちへ向かう。無茶はするなよ」

「金を貰うまでは死なねえよ」

「ジーク……」

いつものように応じれど、リアンだけは不安げに肩を寄せてくる。「心配しなくていい。俺は単独の方が慣れてるからな。——エリオ

ツト、騎士隊長の男が、今回の敵ってことでいいんだな？」

「ああ。例の競りに参加していた者たちを問い詰めれば、何人かが実行犯として、王城の騎士団の名をあげた。ここ数年のエルフ族との取引にはレンデルが矢面に立っていたいな」

「エルフとの取引は、騎士隊長が担う仕事なのか？」

「いや……。エルフ側がそれを要望していたらしい」

「なにか理由があんのか？」

「さあ、な」

ジークハルトが問うと、エリオットが、微妙に言葉を濁した、

「おい、エリオット、わかってることがあるなら言えよ」

「俺も詳しいことは知らん。王宮に取り入れるようになったのは最近だからな。ただ、レンデルという男が騎士隊長に昇格できたのは、エルフ族との交渉をスムーズに行っていた影響もあるらしい。無論、武術の実力も相応にあるが」

「騎士ってことは、貴族の嫡男だったりすんのか？」

「いや、騎士の位を授かる前は平民だったらしい。父親は冒険者らしいが……。この男に関しては、正直いい噂を聞かん。母親についても情報は無い」

「そうか。親の顔を知らないガキなんぞ、この街には吐いて捨てるほどいるしな」

華やかな、にぎやかな、大通りから離れた路地裏で。

力なくうずくまり、腹を空かせ、凍え、死んでいく者がいる。

中には信じていた大人に裏切られ、一袋の金貨の為に殺される子供もいる。

珍しくない。

「……ジーク、ほんとの、ほんとに、だいじょうぶ？」

「大丈夫だ」

「死んじゃ、やだよ。もう、ぜったい、やだ」

抱き寄せる。なびく金髪に手を添えて。

「待つてろ。すぐに帰ってくる」

「……うん」

小猫のようにすり寄ってきた耳元に息をかければ、くすぐったそうに泣きそうに笑った。耳元を飾った小さな宝石もまた、嬉しそうに揺れる。

「これ、持ってた」

首元にかけていた、小さな懐中時計を外した。ふたたび、一から組み立て直したそれ。

「時計があれば、どこにいても、わかるよね？」

ジークハルトの手に、時を刻む音が乗せられた。

カチ、コチ、と。

手の中に秘めた時計の音は、冷酷に、あるいは穏やかに、変わることなく鳴り続ける。

「帰ってくる」

「うん」

自らと、大切な物を生かす手段を、正しく力と呼ぶのであれば。泥をすすり、汚濁を食らい、反吐を散らし、魂を汚してでも。

「——生きよう」

障害排除——【KILL】；

深い、夜の時間がおとずれた頃。

ざあああああつ……と。

森の深淵にある木々の梢が一本、大きな音を響かせた。だが、それに追従する音は聞こえてこない。波のようにおだやかに、静かに
凪いでいく。

暗闇の装束に身を包んだ盗賊は茂みのなかに身を置いていた。音を立てることのないよう立ちあがり、腰の後ろに携えていた短刀^{マインゴッシュ}を抜く。

「——炎を知る我、命ず。> 灯火^{シホ}よ生じ、我の側を照らしだせ

< 』

握り手に秘められていた【魔石】が呼応する。

柄のついた短刀^{マインゴッシュ}が一对。それぞれの剣先に、生み出された【炎】が灯る。

揺らめく炎が周囲を照らす。

「行くか」

ジークハルトは一步を踏みだした。正面には、扉をつけ忘れた入り口のように、虚^{ワロ}を開けた大樹が並んでいる。となりあった大樹は、つり橋のように枝葉を絡め、渡り廊下のように行き来できる、自然の構造をつくり上げていた。

（……見張りがいねえな？ エリオットの話だと、騎士団が巡回してるって話だったか）

【炎】の属性が付与された短刀を手に、ジークハルトは大樹がならぶ森の小道を進む。時折、避けられない下草が音を立てる程度に、音が響いた。

生き物の気配がない。鳥や動物、小さな虫さえも。

静寂の森を歩き、やがて、とりわけ巨大な、大樹の正面に立った。開けた虚の深部へと、踏みこもうとした時だった。

「—— たす、けて、くれエエツッ!!」

虚の奥から反響するような悲鳴が来た。とっさに身を離し、残る片手を、別の短刀へと添える。耳をすますと、水の音が聞こえてきた。

大樹の深部。

地底より、こうこうと湧き上がるようにして、水があふれていた。天然の泉はとりわけ深く、中央は底が見えぬほどの様相を保っている。

「—— レ、レンデル隊長オツ！ た、たす、たすけっ……！」
「沈め」

騎士の鎧をまとった男の眼前にて、下級兵士の一人が足掻いていた。水の飛沫が多量にあがり、愚かにも溺れているように見える。
「い、やだ……。消える、消えちまう……！」 「俺が、消えるッ」
「！」

泉の水、それ自体に意志が含まれているかのように下級兵士の粗末な鎧の中を通り抜け、四肢を包み、体の隅々をひたしていく。開いた口から腹の中、臓腑に落ちていく。

「—— 水と、時空、すべてを知る我、命ず。その効果を > 逆転 < せしめよ」

呼応する。

レンデルの持つ、青い刀身の剣が光る。

喉をうるおし、生命の維持に必要な不可欠たるものが、本質を歪められる。

その効果を【逆転】させていく。

「…… あ、あ、あ、ああ…… あ…… あ………!!」

兵士であつた男の肉体を、精神を、時間を、存在と呼ぶべき概念、そのすべてを。

【水】が、一滴残らず吸いつくした。

後に残つた剣と鎧だけが、泉の底へと沈みゆく。それを見やる騎士隊長は、白い瞳をよせた後に、忌々しそくに吐き捨てる。

「ザコでは絞りカスにもならんか。やはり、王女でなくては……」

——クソ野郎が」

レンデルの背後から声がした。間髪いれず【風】を纏つた、投げナイフが飛来する。

「……………ガ……ッ!？」

突き刺さる。引き絞られた強弓のように。鎧を貫き通し、肉を刺す。

ぐらり、と体が傾ぎ、飛沫をあげながら膝をついた。背後より、迫る。

泉の水を蹴散らし、柄のついた短刀マインゴシユを持ち、疾る。

レンデルもまた、血を吐きこぼしながらも剣を抜く。

「蒼毛の手の者かアツ!」

「知る必要なんざねエツ!」

かがり火のように、【炎】の剣閃が二刃、舞う。

【水】の色と揺らめきを宿した長剣が、それを受けた。

「ク、ソガアツ!!」

決死。大きく横になぎ払つた斬撃。

「!」

ジークハルトが押され、かろうじて、受け流す。

その僅かな間に、レンデルが立つ。

白眼が猛る。長剣を泉の中へ突き落とし、

「こ、んなところで、終わつてたまるかアツ!!」

吼える。

『——【水】を知る我、命ず。>凍れッ! 爆ぜろッ!<』

呼応する。

足下に満ちた【水】が波紋を広げる。一瞬で轟音をあげ、吹き上がる。

凍てついた【氷の矢】と化し、前方の空間すべてを包み込まんと、襲いかかった。

「ぐー！」

ジークハルトは身を引いた。凍った矢の幾本かに穿たれる。

単発の威力は低い、【逆転】された【水】は、肌に触れるだけで正常な意識を惑わせる。

「……！」

不意に意識が揺れ、さらに、

「オオオオオオオオアアアアッ！！」

「チィッ！」

飛沫をあげた先より、現実の白刃が来る。

豪腕から放たれる一閃が、頭上より落ちてくる。

短刀を交差。

盾のように掲げ、正面より相対。

……！！

三本の白刃が、閃光として交わった。

鋼鉄は摩擦を起こし、其処より火花が爆ぜる。

「死、ねエッ！」

「デメエがなッ！」

鏢迫り合い。

手負いの騎士と、盗賊の力は拮抗していた。

勝負を決するは、次なる一手。

「【水】を知る我、命ずッ！ 氷柱と化し、敵を穿てッ！！」

「【炎】を知る我、命ずッ！ 火球へ転ぜ、焼き払えッ！！」

呼応する。

【魔】が、具現化する。

宿る精霊、世界に満ちる精霊。共に接続し、武器が、使い手の命を聞き届ける。

質量と本質を変貌し、敵を破壊せんと、牙を剥く。

「——ガ、アアアアアアアアアアッッッ!!」

「……ギ、ッ!」

マインゴーシュ
短刀に秘められた赤の魔石が、放たれた火花を増幅し、レンデルの顔に直撃。

同時に、ジークハルトの足下からは、先端を尖らせた氷柱が伸び、脇腹を貫いた。

「っ、ぜえッ!」

突き刺さった【氷柱】を、【炎】を纏いし短刀で叩き割る。レンデルもまた、【水】の力を変化させ、顔を覆う【炎】を打ち消した。
『……………ッ!』

互いが一歩身を引き、距離を取る。

両手に持った双刀はさらに炎を帯び、苦痛に歪む二人の男を照らし出していた。

「忌々しい……ッ!」

「そりゃ、こつちの、セリフだ——【火球】っ!」

ジークハルトが先手を取る。

ふたたび、空間を飛翔する【火球】に対し、長剣はなぎ払われた。
「つざかしいわアッ!!」

【火球】を、水の長剣が二つに叩き割る。だが、

「……なっ!?!」

一呼吸おかずして、ジークハルトは、自らの手にある短刀を投げていた。

かろうじて斬りかえし、短刀を弾くも。

「ッ!」

体制を崩したところへ、さらに、残る一刀を。

「――グー！」

まっすぐ眉間に迫ったそれを、首を捻ることで回避する。が、避けきれなかった。

ブシュッ、と決り取れる音。頬を裂き、レンデルの耳を斬り落とした。

『ア、ア、アアアアアアアアアアッ!?』

絶叫が迸る。レンデルが千切れた耳元を押さえ、両膝をつく。

不意をついた時に受けた背中への傷も、じわりと、染みを広げていく。

「……ッ！」

精製された【氷柱】で貫かれた脇腹を抑え、ジークハルトは、さらに懷に隠し持っていた一振り抜き放つ。刀身が漆黒の、一切の光を反射しないナイフだった。

そのとき、ふと。気がついた。

レンデルの残る片耳が、尖っている。

魚のようだった白眼に、わずかに「翠の色」が混じっている。

「デメエ、まさか……」

思わず言葉を漏らしていた。騎士の悲鳴が止み、

「……ク、クク、クハハハッッ!!」

鎧が外れたような、己を嘲笑するようなものに、変わる。

「醜いだろ、醜いよなアッ！ 俺の父はなア、すべてにおいて最低のクズだった!!」

ゴフツと、口から鮮血があふれる。

「欲深く、浅はかで、泉の噂を聞きつけ、死に瀕し、それでも、変わり者、のエルフに出会い、命を救われたのが運の尽きだ。お互いのなア……ハハハハッ!!」

立ちあがる。延々と狂気に満ちた、笑いを湛えながら。一步を進んだ。

「この国は腐っている。貴様も、そう思わんか？」

一瞬、戸惑った。

「ヒトも、エルフも、悪しきに過ぎんッ！ この国を、変えねばならんのだッ！ 悪しき冒険者と、王城の老害どもを排し、この俺が王となるッ！ 国を変えるッ！！」

血走った瞳で、レンデルが【水】に、長剣を突き刺した。

「——【水】を知る我、命ず！ > 愚かな生命を、すべて、飲み乾せッ！！ < 』

【水】が渦を巻く。闇の中に浮かび、巨大な渦を巻きあげ、大口を開けるようにして、ジークハルトの頭上に落ちてくる。

「死ね！ 死ね！ なにもかもなアッ！」

「……つざけんな……」

漆黒のナイフを一閃。

【水】が、ジークハルトのいた周囲に、滝のように降り注ぐ。刹那、

「——【時空】を知る我、命ず。 > 彼方へ通じる扉、此処に生ぜよッ！！ < 』

【魔】を唱え、その姿を消していた。

瞬き一つの時間で、墜ちてくる洪水から逃れる。

「——テメエの見てる世界は、」

「なッ！？」

空間を超越。放った短刀マインゴーシュを拾う。

駆ける。

「今までと、なにひとつ変わっちゃいねえよッ！」

「黙れエエッ！」

相対。

水の長剣は空を斬る。

鋼の短刀が、斜め一閃の軌跡を描く。

首筋に触れる。

皮を斬り、肉を断ち、血の通う頸動脈をまとめて裂いた。

散華する。血が吹き荒れる。

「……あ、が、ア……」

ばしゃん、と。

その巨体が泉のなかに落ちた。泉の一箇所に、まっかな花が広がっていく。レンデルの体もまた、本質を変貌させた【水】へ溶け込んだ。

「……クソッ」

膝をつく。脇腹に受けた裂傷を抑える。

ぬるりとした血が滲み、赤く広がっている。

深い。膝をつきそうになるのを堪える。

【魔】を使いすぎたのか、意識が朦朧としはじめていた。

「はやく、ここから、でねえと……」

ちゃぶ、ちゃぶ、と。

足下の【水】が波打っていた。

——生体のリソースを確認……。

「……………あ？」

なにか、どこからか声らしいものが聞こえた。同時に、ざわざわと、足下の【水】が波紋を広げていく。湧き上がった。

『——ジグ——』

甘く、優しく、澄みきった、女の声がやってきた。

懐かしい、艶を含んだ声だった。

一瞬、痛みすら忘れ、呆けたように応えていた。

「……………レティーナ？」

応えてしまったとき、【水】がきた。膝上に達し、身を包まれる。

我に返り、短剣を持つ手に力を込める。抵抗せんとするも、遅かった。

（——っ！？）

ジークハルトの口中へ向かい、生ぬるい【水】の気配が染みこんできた。

【TRUE】

空が美しく、茜色に輝いていた。

西の尾根の向こうへ沈んでいく夕日を見あげていた。

気品は無く、ひたすらに自由で。

あの先には何があるのだろうかと思いを馳せた。街外れ、丘の上にある岩に腰をかけて、世界の先を見る。いつか、自分はその向こうへ行けるだろうかと夢を見た。

「——ジグ。やっぱりここにいた」

振りかえると、黒髪をなびかせた少女がいた。小走りに駆けてきて、鳥のように軽々と飛び上がってみせる。彼の隣に足を乗せた。まぶしい笑顔が可愛らしかった。

「陽が暮れちゃうわよ」

「そうだな」

いつもの無骨な軽鎧ではなく、村娘が着ているような、飾り氣のない平凡なエプロンをつけていた。

「家に帰りましょう」

「……」

手を取った。少女は物騒な長刀の代わりに、唐草で編んだバスケットを手に抱えている。色とりどりの明るい花束が覗き、内にある一本を手にとった。そっと、少年の鼻先に触れさせた。

「いい匂いだ」

「ふふっ、でしょう？」

少女が笑う。これからの憂いなど、なにひとつ無いように。

「帰ろう」

「ええ、一緒に帰りましょう」

少年が、少女の手を取って立ちあがる。

短い下草を踏みつけて降りると、小さな家が見えた。

そうだった、と思う。

自分には、帰る家がある。一人じゃない。

——チク、タク、と。

【時】 が鳴っている。

気がついて、胸元の隠しポケットに手を入れる。

にぶい鎖の音を聞いた。硬質な重さが不思議と手になじみ、その重さこそが、真実であるような気がした。

「どうしたの、ジグ？」

「……あ」

少女が、バスケットを落とす。自由になった両腕を回してきた。身を寄せられるとまた、頭のなかにモヤが浮かび、時計の刻む音が遠のいた。

けれど消えてはくれない。音は、さらに大きくなって告げてくる。

『——過ぎた時は戻らないし、これからを歩んでいくのは恐ろしいけれど——』

時計の上蓋に触れる。文字盤が視界に映る。秘められた想いが、七色の虹のようにあふれ出た。キラキラと輝いて告げてくる。

『——あなたと一緒になら、怖くない——』

過ちも、後悔も、諦念さえも乗りこえて。
進みましょう。

『ジークハルト』

一緒に、その先へ。

「……帰らないとな」

「ジグ？」

「悪いな、レティーナ。俺の帰りを待つてる奴が、いるんだよ」

ジークハルトは言って、もうひとつ、反対の胸ポケットから小さな片眼鏡を取る。

『——【正しき】を知る我、命ず。＞この世界の、歪みを明かせ
く』

鑑定士である男が口にしたのは、形の問わぬ概念と呼べるものだ
った。

答えが「ひとつ」でない、不確かなもの。質量を持たないもの。
しかし道具は、呼びかけに応じた。

片眼鏡は、授けられた具現化^{イメージ}を力と化した。
発動する。

装備者である鑑定士の男が、心より信じる【解】を、提示する。
生じる。一点のみを指し示し、出口はそこだと告げていた。

漆黒のナイフを抜いた。

『……ジグ！ やめて！ ジークハルトツ！』

【水】が作りだした幻聴には、耳を傾けなかった。

力を込めて、意志を貫いた。ありし日の思い出を、過去へと押し
流す。

温かく、懐かしき時間と決別する。いとおしむだけの時に、終わ
りを告げる。

「——ここは」

先へ続く道は汚れている。醜悪に満ちている。

正しく流れつく世界の先は、そんなところでしか、ないけれども。

「俺の帰る場所じゃあ、ねえんだよッ！」

自らの腹を、貫き刺す。傷口が開けた。

力さえあれば、生き抜ける世界へと帰還する。

「——ジーク、生きてるか、おい、ジークハルトツ！」

「……う」

意識を深淵の底より持ちあげる。

常日頃から、厄介な仕事を持つてくる男が、そこにいた。

「……エ、リオット、？」

「おつ、生きてたか、しぶといな」

軽く言われた。しかしその表情には心底、安堵したような笑みが浮かぶ。

「王城の方は片付いた。リーアヒルデ王女もフィノに任せてきたから大丈夫だ。あとはおまえ次第だ。ジークハルト」

そうか、と言いかけ、口から大量の【水】を吐く。

「——ガツ、ハツ、ゲホツ、ゴホ、ゲ、エ……ッッ！」

「大丈夫か、おい！」

体がこごえるように冷たい。指先ひとつ満足に動かせない。夢から覚めるために施した傷は影響無かったが、レンデルの【氷柱】に穿たれた脇腹の怪我は、変わらずあった。

「……………」

「くそ、まずいな。出血が止まらんか」

エリオットが焦ったように言う。

そうして、どこか、諦めたように呟いた。

「二度目だな」

黒いコートの内側に手が入り、そこから黄金の指輪が現れる。

「感謝しろよ。少年」

指輪を嵌めた手を差し伸べる。

『——【呪】を知る我、命ず。 > オーバードライブ 限界突破・逆転 リバース < 』

唱えた。指輪を嵌めたエリオットの掌が、ジークハルトの負傷した部分に触れると、一瞬で開かれた傷口が閉じていく。身体に熱が戻ってくる。全身に感じていた疲労ですら消えていた。この場に赴く前の、万全の状態に巻き戻っていた。

「ジーク、調子はどうだ？」

「……おい、今、なにした？」

ジークハルトが起きあがれば、エリオットはあくまで、軽い調子で言ってきた。

「気にするな。おまえの時を、ほんの一日だけ、巻き戻したただけだ」
「……は？」

「代償は、大きいかな」

ジークハルトは眉をひそめた。そして、正面の男を見下ろした。

「おい、エリオット……？」

「——歳は、取りたくないもんだ、な……」

目前。男の蒼髪が白くなり、肌にシワが増えていく。

腰を曲げて、膝を曲げて、くつ、くつ、と笑う。

骨ばった右手を差し出してくる。薬指に嵌った黄金の指輪が、キラリと輝く。

「——これはな、ニールンゲンの指輪というのだ。所有者の願いを、【なんでもひとつ、実現させる属性】が込められておる、最上級の >アーティファクト< でなあ……」

衰えていく。歳を重ねていく。その、あまりにも急激な変化を見届ける。

「——そのむかし、愚か者の男がいた。この世の遍く知識を、すべて己の物にしたいと願った故に、その力を他人に施さんとすれば、己に >呪い< を授けてしまうのじゃよ」

いつしか若い男は、着ているものは違えど、数年前に見知った老人へと変わっていた。

「……ワー、グナー？」

「久しいのう、ジーク。元気にしとったか？」

冗談めいて「ふおふお」と笑った。

老人が己の心臓に手を添えた。苦しげに呻く。

ジークハルトが咄嗟に肩を貸して、その身体を支えた。

「おお、すまんのう」

「ふざけんな……。なにが、どうなってやがる……。おいッ！」

「質問は後じゃ。まずは【水】を精製しておる、元素装置を破壊していくぞ」

「は？ ゲンソ……？」

「この世に、精霊や、魔という概念が生み出される前に存在しておった法測じゃよ。リーアヒルデが唱えておるのは、それらの科学式が元になっておる——まあ、いつか解説することがあれば、また講義してやるわい」

ふお、ふお、ふお。

「……ワグナー、テメエは何者なんだ？」

「ただの酒好きな物知りジジイじゃよ。よく知つとろう？」

それから腰に帯びた長剣を、枯れ木のような手で握る。

鞘に閉ざしたまま、杖のように用いて、ジークハルトから離れて歩きだした。半ば呆然としながらも、その後ろ背を追いかける。

「……四年前、死にかけてた俺を助けたのも、あんたなのか」

「うむ。本当に、単なる気まぐれで助けてしもうた」

振りかえって、ニヤリと笑った。昔に老人がいつも被っていた帽子はない。一つに束ねた白髪が舞い、頭の両脇からは、先の尖った耳が見えていた。

「……エルフ、なのか？」

「大昔の話じゃの～。国を建てなおすため、魔術師の一員として城を出て、森に【封印】の属性を施し、泉を管理することになった一人じゃ。指輪を手に入れてからは森を出て、あっちこっちを放浪しとったがの～」

「テメエ、一体いくつだよ」

「忘れた」

あつさり言ってから、ワグナーは樹の虚の中を、奥へ、奥へと進んでいく。

そして、ふと足が止まっていた。

「アレが、【水】を生み出しておるモノだ」

「……んだよ、こりゃ」

二人の目前、無数の枝を伸ばし、大樹の空洞に根付いた灰色の柱時計く。

よく見れば、枝は太い血管のようできて、循環するように鼓動し、

蠢いていた。絶えず不気味な音を響かせており、二人が見上げた正面中央には、四角に切り取られた窓があった。その向こう側から、青白い光を発散させている。古代の文字が表示されていた。

【警告】コード・エラー。

「気色悪いな、これも、アイテムなのか？」

「そうじゃ。今風に言えば、【輪廻】の属性を生み出す、永久機関の>アーティファクト<かのう。遥かなる古代の遺物じゃよ」
「……さっぱりわかんねえよ」

柱時計の文字盤は随所が歪み、時刻を示す針は、今にも折れてしまいそうなほど、危うげに震えていた。チグ、ダク、チグ、ダグ、と。不気味な音を立てて時を刻む。

突如、ブオンツ、と空気が振動した。妙に青い光が二人の目をつく。

窓の向こう側から見える文字が変化していた。

【警告】コード・エラー。

音声認識によるパスワードは入力されていますが、リソースが不足しているために、【水】を生み出すことができません――

発せられる言葉。意味するところは、ジークハルトには分からない。しかし、それが「なにを」求めているかは、漠然と理解ができた。さらに、文字が置き変わる。

【警告】プライオリティの高い【ユニット】を、直ちに捧げてください。

古代の言語を発する柱時計が、懇願するように、発信しつづける。

【警告】プライオリティの高い【ユニット】を、直ちに捧げてください。

世界は、同じ過ちを繰り返してはなりません。

一人の命が、大勢の命を救います。新しい【概念】が、世界を支えます。

永遠を、輪廻を、悠久を、不変をここに。我々は提供します。

【MATERIALIZED-MANA】ここに、新しい世界を創造します。

「リアンを差し出せっか」

「そーいうこったの」

ワグナーが、どこか寂しそうに笑った。

「繰り返してきたのよ。同じ事を、ずうつとな」

指先を目元に掲げて、黄金の指輪を見つめる。

「……ワシも同じじゃ。【過去】だけを望み、孤独を愛した」

指輪の表面を撫で、自嘲気味に笑った。

「いやはや、本当に歳は取りたくないのお」

灰色に濁った瞳が、若者を見る。

「ジークハルトよ。アレは、ワシ一人では壊せん。しかし、おまえとならば、できるやもしれん」

「手伝ってやるうか？」

「うむ。じゃが、壊せばどうなるか理解しておろう？」

「そうだな」

短く応じ、ジークハルトは懷中時計を握りしめた。

「アレが残ってる限り、リアンは未来へ進めないんだろ」

あとはもう、不敵に笑うだけだった。

未来を祈り、願い、望む。

「俺は薄汚い盗賊だ。欲しい物だけ、あればいい」

迷わなかった。疑わなかった。

「ただ、手にいれた力を誰かに貸してやってもいい。必要であれば、手を差し伸べてやってもいい。腹を空かせた奴がいれば飯を食わせ、でもいいし、金が無い奴がいれば施してやってもいい——たまには、ただどな」

永遠との決別を。未来への渴望を。失うことを恐れない。

先へと進む。

『——時空を知る我、命ず。』
意志は煌いた。

『> 進め！ <』

呼応する。

ヒトの言葉が橋渡しに、道具が支えになって、【魔】を生みだす。概念が質量を持つて実体化する。

常識を超えた可能性を生み出して、さらに輝く【光】となる。

【光】は世界に満ちていく。

幾千、幾万の輝きとなって散華する。

『> 撃ち碎け！ <』

飛翔。【光】はなびく【閃光】に。瞬く星のように宙を駆ける。

一斉に飛んでいく。まっすぐに、古来の遺物を目掛け、千変万化に爆ぜまくる！

【警告！】

柱時計の針が回った。

正しく、正しく、正しく。

ひたすらに正しく、プラスの方向へと突き進む。

【警告！】 識別不能な【属性】に対応します。

【属性】の概念は【時空】の亜種と判断。

概念を圧縮後、リソースを【逆転】します。

私は、抵抗します。

私は、応えねばいけません。私を作りし存在の願いと想いに。

永遠に。

針が動きを止める。ギイギイと、虫の鳴き声のような音が呼応する。

未来へ進もうとする針を押し留め、逆方向に回転をはじめる。

「往生際が悪いのう」

ワグナーが剣を引き抜いた。正眼に構え、こちらも不敵に笑う。

「滅びようじゃないか。新しい世界に道を譲ってやるのも、我らが務めじやろうて。ただ、それだけのことを知るのに、世界を巡り、故郷に還り、長い、長い時間をかけた」

老人とは思えぬ鋭い踏み込みが、地を削り取る。

「——もう、迷わぬ」

一閃する。勢いのある斬り込みが深々と入る。

「よきものは、より、よきものに！ 世界は変わっていく！！その義務がある！！！」

剣を柱時計に突き刺したまま、【魔】を唱える。

『——【呪】を知る我、命ず！ > 対象の放ちし概念を、我へと刻めッ！<』

想いを込め、貫き通す。柱時計の一角に突き刺さった剣の刃を伝い、黒い、靄のかかった【闇】が流れこんできた。悪しきものを、自らの身体を持って食らい込むように、体の中に取り込んでいく。
「ぐっ！」

「なにやってんだっ、クソジジイ！」

「……なあに、心配無用じゃ」

全身が影のようになったワグナーの口元だけが、ニイと笑っていた。

そして徐々に、柱時計の内より放たれる【闇】が失せていく。

【概念消失】 起動を、停止、し、、、ま、、、、、、す。

ブウンと音をあげて、青白かった枠中の光が消えた。

人ならざる、奇妙な音もまた停止した。そして、ゆっくり、ゆつくりと。

永遠を刻む柱時計は、自壊した。

二人の目前で、積年の歴史が瓦礫と化した。

すっかり虫食い穴にされた枯木のように、乾いた骨のような音を立てて、朽ち果てた。

「……やったか……？ おい、ワグナ、そっちは——」

「ふう」

長剣に集われた【過去】の属性が、持ち手にその意志を還元させていた。

キンツ、と流麗な音を立て、白銀の刃が鞘に戻る。ジークハルトに向けられた表情は、くつくつと愉快そうに笑う顔。蒼の髪と瞳を持つ、端正な顔をした若い男だ。

「やはり、こちらの方がしっくり来る」

「……おい、エリオット」

「む？」

ジークハルトは少しだけ笑った。漆黒の短剣を喉元に突きつけてやる。

「酒代のツケ、今ここで、まとめて返せ」

教訓：明日へ進むため、貯金は少しずつ増やすこと。

エルフの森にある泉は枯れてしまった。

魔都ルーインにそびえる王城は、大きな収入源であった。>精霊の霊薬<の原水を、未来永劫うしなった。今後は現状の技術で作りあげた代用アイテムの、さらなる改良に力を注ぐと結んだ。また、その研究者たる専門知識の深い職人の募集を募るとのことだ。

エルフの民が死滅した元凶は、王城が伝えたところによると、巫人とそれを操作した術者によるものだと言えられた。

また、騎士団の内部体制がいくらか変わり、内部の密告者によると、騎士団長の「レンデル」が主犯であるような事も伝えられたそうだが、本人の遺体と、部下たちの行方が知れぬことから、その詳細は知れない。

新しい騎士団長と、執政の一部を握る者としては、冒険者で名を広めた >剣聖< エリオット・ニーベルンが就任。彼は旧来の風土を大きく崩し、今後は冒険者と共に、迷宮の深淵へ向かう者たちを支える制度を作ることを約束した。

さらに今後は『ギルド・マーケット』も改革し、従来の職人の制度も変えことを発表した。

「名のある職人たちは、その過去に関わらず、現状の能力を正しく評価されるべきだ。ゆくゆくは、そのための後継者を育てやすい制度も作りあげ、職人たちは自由に店を構えてよい政策へと移行する」
エリオットはそう発信し、最初の手始めとして、職人を育成するための『公開講座』を試験的に実施した。

反響は大きかった。あつという間に、王宮に住まう正規の職人たちだけでは、教師役の手が足りなくなつた。そしてここぞとばかりに、エリオットは動いた。

「——皆様、場末の職人にも、やたらと腕のいい連中がいるんですよ、まあ、最初は、そうですね。これぐらい、の値段で雇ってみて

は如何でしょう」

エリオットが言つて、一枚の紙片を提示する。

王城にいた老人たちはそろって頷いた。

「ほお、そんなに安くていいのかね？」

街には、変わらず朝日が昇っていた。

ジークハルトは、生欠伸をあげながら階段を降りた。

「ねっみい……」

じきに夏が来る。少し汗をかいた服を面倒に思いつつ、茶色の短髪を掻きながら、廊下を歩いた。

身だしなみを整えてから、客を迎える仕事部屋に入ると、リアンが机に突っ伏していた。美しいと評せる顔は、今はまぬけに大口を開いて、

「くにゃー」

幸せそうに、妙な音のいびきをあげていた。

部屋は壊滅的に汚かった。机の上には様々なアイテムが無造作に転がって、その惨状は床にまで広がっている。作業機の周りには足の踏み場が無い。

「くそっ」

ジークハルトは、床に落ちたアイテムを避けながら、リアンの下に辿りつく。

「おい、リアン、起きろ」

「うみゃゝ……」

幸せそうに眠るアホの頭を軽く叩いた。両肩を震わせて、リアアヒルデが目を覚ます。

「……あいー……。まいどいらっさいませえ」

「なに言つてんだ」

「ふにゃ？」

数回瞬きした後で、ふんわり、笑顔になる。ジークハルトのことを認識したのか。両手を翼のように広げて抱きついた。頬に軽くキ

スをして、

「お腹すきまひたっ」

「第一声がそれか」

少し力を込めて、長い耳を引っ張りあげてやる。「ぴいーっ！」と、ヒヨコのような声をあげて、ぐすつと泣いた。

「ひどい」

「やかましい。寝る時は、道具は片付けてから、二階で寝ろって言ってるだろうが」

「だってー、なんか最近になって、お客さん増えて忙しいんだもん」

「……それは、まあ、確かにな」

商売は順調だった。

客が増えると、中には弟子入りを求めてくる声もあったし、正式な『鑑定師』と『付与師』にならないかという声も増えた。しかしそのすべてを、ジークハルトは断った。

王城の貴族（エリオット含む）の言いなりになるのは癪だったし、それに弟子というのなら、既に一人いたからだ。

「忙しいのは、お前のおかげだ。あまり無理すんな」

「えへへ。ねえ、ジーク」

「うん？」

両手が伸びてくる。微笑んで、身を寄せてくる。

「ご褒美、ちよーだい……？」

翠の瞳が閉じて、赤い唇がせまる。応えようとした時だった。

——カラン、コロン、カララン。

祝福するような鈴の音。入って来たのは、男女の二人組み。

「よお、ジーク。いい仕事を持ってきてやったぞ」

「あぁっ、もうっ！ 朝っぱらから何やってるんですかっ！ ダメですよっ、淫らなアレやコレは、せめて深夜に済ませてくださいね

っ！ 分かりましたかりアン様っ！」

「……フィー、空気読んでー」

褐色肌の美人メイドが、「がーん」と、衝撃を受けたような顔になる。

「リアン様に、立ち振る舞いに関して怒られたーっ！」

「これはこれは。姫君も成長されたものですね」

「えっへん！」

「……そうか？」

フィノがその場で頂垂れ、エリオットが一步前にでる。

ジークハルトは、リアンに回していた腕を外し、楽しげに笑う男を睨みつけてやる。

「仕事なら請けねえぞ。充分、間に合ってるんでな」

「まあそう言うな。子供ができた時のため、蓄えは少しでもあった方がいいだろう？」

「うるせえ、帰れ」

「照れるなよ」

無視して、丸められた羊皮紙が投げられる。ジークハルトは嫌そうな顔で封を解いた。記された文字に眼を通してから、「は？」と首を傾げてみせる。

「……おい。学園の臨時講師って、なんのことだ……」

「お前が弟子入りを拒否していると聞いてな。まあ、その気持ちはわからんでもない。だが教師で教えるならば、夫婦間の営みを維持したまま——」

「そういうのはッ！ まず本人の許可を取りやがれッ！」

「ちなみに仕事は明日からだ。準備する物はそこに書いてあるからな。頑張れよ」

「テメエは昔つからそうだよなッ！ 人の話を少しは聞けよッ！」

「ははっ、お前も昔から、なんだかんだと押しに弱いからな」

「うるっせえ！」

店内で、朝一番の、店主の罵声が響き渡った。

魔都に住む鑑定士は、今日もまた、明日にむかって生きていく。

迷宮の「機工人形」

キュイ。小さな音が浮き上がり、ジジジ……と、天井に吊るされた明かりが点灯した。

照らされた室内は、窓のない、青みがかった壁と床を持つ部屋だった。扉の向かいにある壁際には木製の本棚が置かれ、ぶあつい書物や紙の束が積まれている。

本棚の隣には一台のベッドがあり、さして広くない部屋は、それだけの家具でほとんどが占められていた。

「……………」

ベッドに横たわるのは、白衣を着た女性だ。ゆっくり、瞳を開いていく。

——おはようございます。

不思議な音色の声。長い眠りから覚めたとき、最初に伝うべき言葉を一音として発したような響きだった。

上体を起こした際に、背まで届いた銀髪がさらりと揺れる。長い前髪もまた、表情のない顔を撫でて逸れた。瞳は海の底から救いあげたような蒼の色。全身の体軀は細身であり、肌の色はやや白い。

どこか精巧な人形のようにもある彼女は、無表情に呟いた。

「私は起床しました」

ぱちり、ぱちりとまぶたを瞬かせ、赤い唇を動かした。

「寝過ごしてしまいました」

素肌の両足が、ひんやり、冷たそうな床を踏む。

立ちあがる。静かに、右腕を宙に差し述べて、言葉を紡ぐ。

『——【次元】を知る我、命ず。コール・オブジェクト・オーバーンチャント』

呼応する。

白い閃光が右手に集い、異世界の扉を開くように、その右手首を光が包んだ。輝きは次第に縮小し、ふと消えた後に、一振りの剣が握られていた。

「>> マテリアライズ・オブジェクト<< 【水属性】生成装置の破壊を確認。任務を開始します」

ひた、ひたりと足を動かし始める。部屋を出た。

『 アイテム鑑定士の業務内容2 白銀の騎士と、黒の魔剣 』

魔都ルーインと呼ばれる国があった。遙か昔に、一際優れた技術と文明を誇っていたが、巨大な地殻変動によって地の底へと沈んでしまった街だ。

現在、その「古代都市」へ赴くには『迷宮』と呼ばれる地下洞を抜ける必要がある、道中には【魔物】と呼ばれる生物の領域が広がっていた。しかし依然として、そこには古代の知識を秘めたアイテムが存在する。それらを求め、一攫千金を夢見る『冒険者』たちは集ってくる。

魔都の遙か頭上に栄える、もう一つの魔都——「ルーイン」に。

——「ごおおおおーん。

街の北東部にある学園校舎に、大きな鐘の音が響きわたった。教室からは下級生をはじめとし、十代半ばを過ぎた上級生達もまた、にぎやかにお喋りして廊下を歩く。学園の制服を着た若者たちは、口々に「涼しくなってきたな」「もう秋ね」といった事を告げ

ていた。

そんな校舎の廊下を、一人足早に歩く青年がいた。癖のない茶の短髪、上は白のワイシャツで、下は紺色のズボン。首からは「臨時教師」を示すプレートをかけていた。顔立ちの方も精悍ではあるが、双眸がやたらと鋭く、もつと言えば人相が悪かった。

「——先生、ジークハルト・ワーグナー先生！」

校舎の入り口を目指していた青年の足が止まる。声がした方向に振りかえれば、長い赤髪を揺らして駆けてくる女生徒がいた。

「間に合いました。もう、お帰りになられたかと」

「ロゼ、なにか用か？」

「はい」

ロゼと呼ばれた女子生徒が息を整え、顔をあげた。頬にはほんのり朱が乗って、他の生徒たちと同様に、幾分か子供らしさを残す顔立ちだった。細い眉と、少し吊りあがった紺色の瞳は、彼女の性格を実直的に見せている。よく言えば勉強のできる優等生。悪く言えば堅物な女子生徒といった感じに。

「エリオット様と、フィノ様がお待ちです」

ロゼはまっすぐ、やや挑戦的な眼差しで、ジークハルトを見据えた。

「……エリオットが？」

「はい」

臨時教師の表情が陰しくなった。眉間に皺が寄せられて、露骨に不機嫌な顔になる。

「面倒な予感しかねえな」

「こちらです」

言って、ロゼは肅々と歩きだした。

「一階の理事長室でお待ちしているとのことですよ」

「理事長室？」

「ええ、授業中だったので、先に挨拶へ行かれたと」

理事長は、この学園で最も大きな権限を持つ男だった。

ジークハルトは、あまり気乗りしない感じで、後ろ髪をくしゃりと搔いた。ロゼが歩幅を落として隣に並ぶ。

「ところで、ジークハルト先生」

「その呼び方はやめてくれ。他の奴にも言ってるが、苦手なんだ」

「申し訳ありません、ジークハルト様」

「だから、様はいらねえよ……」

「いいえっ！」

いきなり、ロゼが歩みを止めた。そして生真面目に、やはり険しい顔で言う。

「私たちの『ギルド』を支えてくださっているお方を、呼び捨てに出来るはずありません。特にジークハルト様は、レティーナ様の――」

「わかったから、よしてくれ」

言葉を遮って言い返す。ロゼが気圧されたように両肩を震わせたのを見て、臨時講師に似合わぬ風貌の青年は、大きなため息をこぼした。

「お前が、あいつをどれほど慕ってたかは、見りゃ分かる。けどな、俺自身はそんなたいした奴じゃねえんだよ」

「先生、謙遜をなさらないでください。先生のアイテムに関する知識や、【魔】に関する分野の知識量は、正規の鑑定師にだって及ばないところが多々ありますっ！」

ロゼは直立して、差のある背丈を詰めるように見上げた。

この学園の生徒である「ローゼ・フォン・ハーツ」は、数ヶ月まえに親代わりであつた女性を亡くしていた。ロゼを含めた子供たちが路頭に迷ってしまったわぬよう、ジークハルトも彼女らを支援しているという背景は確かにあるのだが、

「ジークハルト様、やはりここでは、先生と呼ばせていただきますっ！」

「……もついい。好きに呼べよ」

「はいっ！」

言えばようやく、少し顔が綻んだ。

ジークハルトが後ろ髪をかきながら歩きだす。ロゼもまた、変わらぬ歩調で並んだ。

生徒が行きかう廊下を曲がり、右手に重厚な扉が見えたところで立ち止まる。

「では、私はこれで」

「ああ。伝言すまなかったな」

「いいえ――。あの、先生」

「うん？」

「えっと、ですね」

少し迷う素振りを見せて、それでもロゼは告げていた。

「今度、また、お店の方にお邪魔させていただきます。それではっ！」

素早く踵を返して駆けていく。ロゼが去ると、周辺に生徒の影は見えなくなった。

「……ったく。あいつの真面目なところだけ似てやがんな」

呟いた後で、応接間の扉を数回ノック。

即座に「入りたまえ」と、室内から返事がきた。

扉を抜けると、中には三人の男女がいた。来客を迎えるため、コの字型に配置された応接椅子に座っている。

「よお、ジーク」

後ろ手に扉を閉めると、まず、一番手前に座っていた蒼髪の青年が立ちあがる。

『ギルド』と呼ばれる組織の主、エリオット・ニーベルン。丈夫そうな黒衣のロングコートを汗一つこぼさず、平然と着こなしていた。とりわけ見栄えのする二枚目の顔立ちが、口元を緩める。

「どうだ、ここでの仕事は慣れてきたか？」

「自分の店番をしたほうが楽だな」

素直に言っと、青年の隣に座っていた褐色肌の女性も立ちあがる。エリオットと違い、こちらは胸元をいくらか開いた涼しげな服装だ

った。丁寧に頭を下げれば、野ブドウ色の紫髪がさらつと揺れる。

「久しぶりだな。フィノ」

「はい。お久しぶりです、ジークさん。本日はお忙しいところ、ご足労いただき感謝します」

「別にいい。居候が今ごろ腹が空いたって喚いてるかしんねーけどな」

「大事にされてますね」

「そうだな」

適当に応じて、残る一人に視線を向ける。

「まあ、君も椅子にかけたまえよ。ジークハルト・ワーグナ君」
部屋に入ることを許可した声。

上座の席、ふっさりと茶の髭を蓄えた、壮年体躯の大男だ。仕立ての良さそうなスーツは体のラインに沿っており、筋肉質の足を組んで座っている。見上げてくる視線の色には、人生の成功者であり続けた自信に満ちていた。

「ついさきほどまで、君の噂をしていたところだ。蒼の剣聖エリオット・ニーベルン殿と、その従者であられる彼女、フィノ・ニーベルンとね」

「……そいつはどうも。場末の鑑定士の噂でよけりや、いくらでも聞いてくれ」

率直な物言いで応じ、ジークハルトも席に座った。向かいに座るエリオットが、くつくつ笑う。

「相変わらず口が悪いな。生徒の前でもそんな感じか？」

「大差ねえよ。で、お前らはなんでここにいるんだ」

「こちらのアーグネスト・ヴェルザム氏より、仕事を頂いてな。ついでに、お前の名前も出してみたわけだ」

「うむ。ジークハルト君の話を聞いていたところ、君にもこの仕事に関して適性があるようだ。是非手伝って欲しいと思っただ」

エリオットの言葉を、理事長である男が繋いだ。

「我が校の名誉と、【魔】に關しての研究、発展をかけて、引き受

けてくれるな？」

「……俺はまだ、依頼の内容すら聞いてねえんだが」

今度こそ、ジークハルトは不機嫌そうに言って退ける。

「そもそも、俺はこの学園の教師だって引き受けたつもりはねえ。

どこその蒼髪が、勝手に手配しやがったせいだな」

「気にするな。実入りの悪くない仕事だろ？」

「まあ……。そこんこは助かつてる」

「あと、誰かに知識を教えるのも悪くないだろう」

「やたらと食ってかかってくる、貴族のガキがいなけりゃな」

「ま、そこは目を目を瞑っておけ。昔は貴様もたいして変わりなかつたぞ？」

「——そうだ、な」

うなずくと、エリオットは軽く両肩を震わせた。

理事長である男が、そんなやりとりを興味深そうに見ていた。

「詳しくは聞いてないが、君たちは旧知の仲なのかね？」

「ええ。彼には命を救われたり、救ったりした仲ですよ」

「金を貸したりな。主に俺が」

「はは、なるほど」

大仰な仕草で頷き、蓄えたヒゲを撫でる。

「ジークハルト・ワグナー臨時教師。君は評判以上に、面白い男のようだな」

「そうかい」

「うむ。君の『アイテム学』に関する授業は、論理的で分かりやすいと評判だよ」

「知ってることを話してるだけだ」

「おっと、そうそう。先日も君に勝負を挑んだ生徒が、逆に赤っ恥をかかされたという話も聞いている」

「覚えてねえよ」

「はっは。まあ、そう照れてくれるな。ジークハルト・ワグナー君」

「……………」

反論しようと口を開きかけ、結局押し黙る。そんなやりとりを見ていて、エリオットの隣に座っていたフィノもまた、くすりと笑った。

「アーグネスト様。彼にもご依頼の内容を説明してよろしいですね？」

「おっと、そうだったな。説明してくれたまえ。フィノ・ニーベルン嬢」

「畏まりました」

一礼して、フィノが、ジークハルトの方を見た。

「——ジークさんは、オートマター機工人形なる存在を、ご存知でしょうか？」

魔都の「姫君」

職人街の一角、奥に進むにつれて細くなる袋小路に、古代アイテムの鑑定店がある。場末とも呼べる場所にある店内では、一心に亭主の帰りを待ちつつづける女性がいた。

「……おなか、すいたでう……」

突っ伏した作業机の上には、ごちゃごちゃと、鑑定を依頼されていたらしいアイテムが並ぶ。それらに加え、作業用の精密ネジ回し、小型のハンマー、散らばったメモ用紙などが、机の上に広がっていた。

「ジークー、早く帰ってきてえ」

顔だけ持ちあげて切なそうに呟けば、お腹が「ぐうー」と鳴いた。「もう一步も動けまへんで……」

細長い睫の下、紺碧の瞳が潤んでいた。すらりと整った鼻梁と細まった唇。肌の色はミルクと蜂蜜を混ぜたようにすべらかで白い。耳に下げたは涙滴型のイヤリングは、彼女の長い耳を隠している。

「はうううー……」

太陽の兆しのように輝く金髪は、今は花模様のシニヨンで結い上げられている。ただひとつ、女神のような容姿と程遠いのは、その格好だ。大きなポケットのついた、やぼったい青の作業着^{ツナギ}姿と、だらんと机上に垂れた、その姿勢。

「奥さん、お腹空いて死んじやいまう……」

ぐうぐうと、腹の虫が鳴りまくる。

「うつ、うつ、はううん……」

泣きが入りはじめたところで、表玄関の鈴が、カラン、コロンと鳴り響いた。扉を開けて入ってきたのは、店の主である青年だ。二人の顔に対極的な表情が浮かぶ。

「ジークー！」

「リアン。お前はまた、こんなに散らかしやがって」

「おかえりっ！」

しかしそれでも、ぱたぱた子犬のように駆けってくる体に抱きしめられると、

「……ただいま」

ほんの少し、幸せそうな顔を浮かべてみせた。

昼食は、パンとソーセージ、別皿には、コーンと野菜の付け合せが乗っていた。

二人は席についた後、瞑目し、手を合わせて祈った。

ジークハルトは祈る神を知らない。むしろ、そんな存在はいないのだということを信じている。しかし、犠牲になった食物には感謝の意を捧げてでもいいだろうと、そんな風に思い始めたのは最近だった。

「食うか」

「うん！」

祈る神はいなくとも、生きていくことは出来る。

パリッと、ソーセージの皮が千切れるいい音がして、リアンがほくほく顔で告げてくる。

「おいひ〜」

「そうか」

ジークハルトもそれだけ言って、手を運ぶ。

「ねねっ、ジーク」

「ん？」

「今日は遅かったけど、がっこの方でなにかあった？」

「ああ。エリオットとフィノが来ていてな。仕事を一つ頼まれた」

「わっ、いいーなー。どんなお仕事？」

「あまり良くねえぞ。機^{オートマター}工人形の探索と鑑定だ」

「……おーとまたー？」

はぐはぐと、ウサギのようにレタスを齧っていたリアンの手が止まり、ジークハルトが応える。

「古代に作られた自立兵器だ。迷宮内で起動したものが一体、徘徊してるらしい。それを、なんとかしてこいってよ」

「えっ、じゃあ、迷宮に入るの？」

リアンの瞳に不安がさした。

「入るのはそんなに奥じゃねえから大丈夫だ。エリオットと、それから仲間も連れて来るらしいしな。それに、迷宮がどう変わったのか、俺も少し興味がある」

「……危なくなったら、すぐに帰ってきて」

「わかってる」

言葉を返すと、安堵した笑みが届いた。

「それで、機工人形の鑑定って、なにを鑑定すうの？」

「ああ。正確にはそいつが装備している、剣が問題らしい」

「剣？」

傾げてみせるリアンに、ジークハルトは応えた。

「>魔剣< だって噂だ」

「…… >魔剣< ? フツーに【魔】を【属性付与】した剣じゃないの？」

「少し違う。——この魔都では基本的に、【魔】が付与されたアイテムで、使い手にとって有用な物は『アーティファクト』反対にマインスの効果を付与するアイテムは『呪い物』と呼ばれるのは、もう知ってるな？」

「うん」

【魔】と呼ばれる力。

この世界では万物において、その物体が元来持つ【属性】を変化させる概念が存在した。自身や相手を強化、弱化したり、さらに大気中から【炎】や【氷】を生み出し、質量を与えて操作することもできる。しかし、それが最も有用に発揮するのは、道具の【属性】に、力を付与させた場合だった。

「基本はどっちも同じ『付与師』^{エンチャンター}が付与したアイテムだね」

「そうだ。だが稀に、概念を超越した、唯一無二の品が存在する」

「がいねんを、ちょーえつ？」

「たとえば、そうだな」

ジークハルトが切り分けた林檎を手にとり、口元に運んだ。しゃりつと、音を立てて食むと、リアンも一つ手にとって、しゃりしゃり幸せそうに食べていく。

「リアン、今食べた林檎を、【時空転移】を唱えて、元に戻せるか？」

「へう？」

「お前は【魔】のリソースがあれば、物体の時間軸を変動できるだろう？」

「あい、できまう。でも、このリンゴはできまへん」

「どうしてだ？」

「だって、食べちゃったもん」

ごつくん。咀嚼したリンゴを飲み干した。手元にはまだ、半分になつたリンゴが残る。

「リンゴ自体の時間は巻き戻せうけど、二つに分かれた物は戻らない。元々が一つだったから。私がそーいう風に認識してうから。——なくなつた命を戻せないのと一緒でう。【時間】と【命】の存在は、似て非なるもの、だから」

最後の言葉を紡いだとき、リアンは少し寂しげだった。

ジークハルトも、ほんの少し苦笑する。

「まあ、言い換えるとだ。世界にある常識的な概念すらも無視できる、【万能】の力を秘めた代物が存在するってわけだ」

「えっ、じゃあ、人が生き返っちゃったり、しちやうの？」

「可能だ。古代都市には、【蘇生】の概念を付与した >魔杖< 一つのもあつたらしいぞ」

「本当に？」

「あながち嘘じゃ無いかもしれねえがな。期待はすんな」

「——うん」

リアンは、またしても寂しげに笑う。

その言葉の向こうにある意図は、知っているよという風に。

「ねえ、ジーク。＞魔剣＜ は、どんな効果なの？」

「そうだな。聞いた話だが、【次元】の属性が付与されてるらしい。剣には、常に別世界の時間が流れているから【錆びない】し【折れない】んだ」

「へえ。でもでも、それってちゃんと斬れうの？ ううん、手で持てう？」

「察しがいいな」

ジークハルトが口元を緩める。

「＞魔剣＜ には独自の【時間概念】が流れている。故に他の【次元】に一切の干渉が行えず、同時に他からの影響を受けることもない。はずなんだがな」

「うんうん」

「この ＞魔剣＜ の属性は、衝撃の際にだけ、発動するらしい。

つまり、この剣は、瞬時にすべての【属性】を切り裂き、同時に外敵からの攻撃、及びすべての影響を防ぐ。……東洋の国に、最強の矛、最強の盾って話があるんだが、正にあれだな」

さて、語り終えたぞとばかりに、ジークハルトはコーヒーの入ったマグを傾ける。

それを眺めていたリアンが、ぽつりと言った。

「……ずるくない？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0340z/>

アイテム鑑定士の業務内容

2011年12月2日21時51分発行